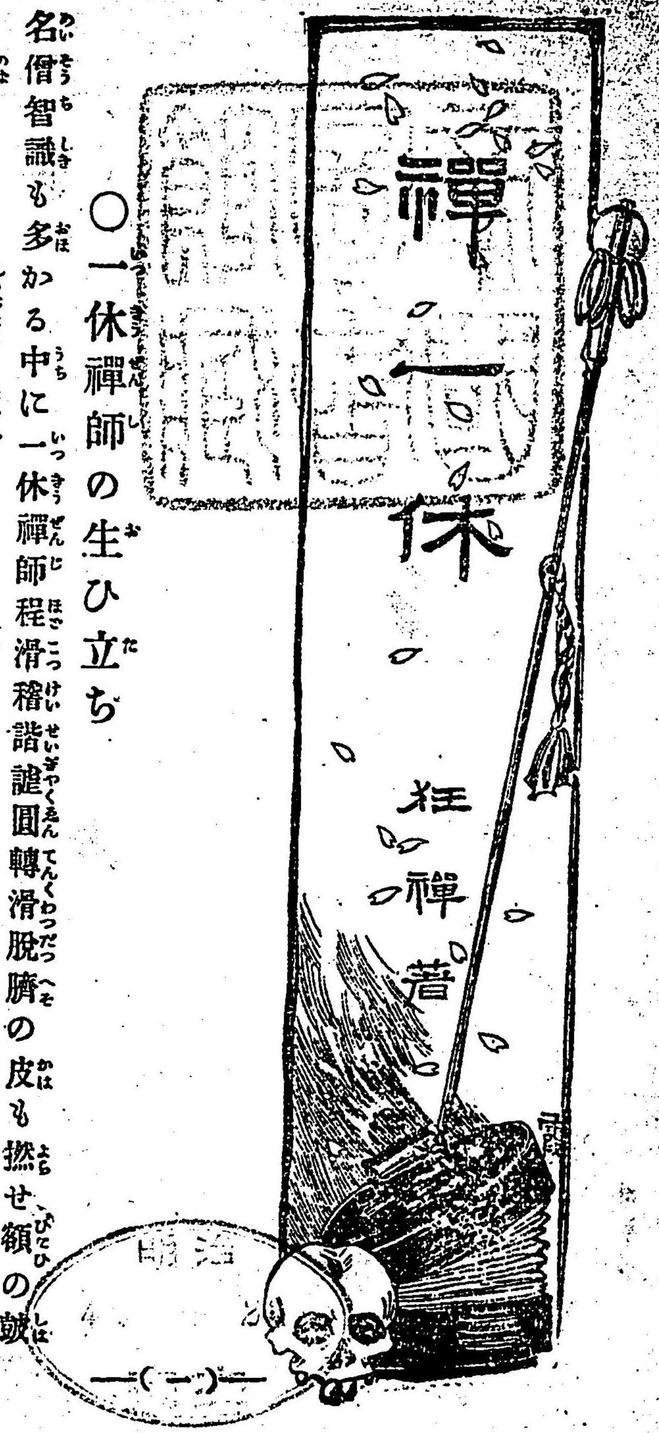
コ1167

325
84

禪一休

狂禪著



○一休禪師の生ひ立ち

名僧智識も多かる中に一休禪師程滑稽諧謔圓轉滑脫臍の皮も撚せ額の皺も延さしめて衆生を濟度せられし御方はありません師は掛卷も綾に畏き後小松院の二の宮に在し九重の紫雲通へる大内も己が十方世界に亘る大智を容るに狹しとて尊き御位も破履の如くに捨て身を佛道に投せられ是

れよ入らまして後ちも常よ須彌の上より八宗を一目の下よ睨みつけ釋迦も達摩も皆お我が藥籠中の物と爲されました寶ハ釋迦も達摩も一休の玩弄と爲されたことでござりました何さま其才智ハ廣大無邊のことで慈くばかりでござります殊よ其賢れて秀でられましたるハ頓智で事よ當り物よ觸れて瞬間咄嗟よ出でまする智ハ恰も電信の如く迅速でござりまして而うして其頓智の愈々出でゝ愈々盡きませぬのハ宛然滾々たる原泉の盡きぬが如くであります何さま一休の一舉手一投足ハ常よ皆お智惠の運動で苟の咳唾も智惠の珠とおッて輾轉出づることでござります左樣でござりまするゆえ一休ハ如何おる場合よ臨みまするも決して其智惠の窮する等のことハおく常々何事も甘く遣ッてのけられたことでござります

總て世ハ一心の趣けやうで輕く處すれバ輕く重く處すれバ重くおることでござります今若し青き眼鏡を懸けて旅行しますれバ宇宙の森羅萬象ハ悉く青く見ゆることで若し又赤き眼鏡を懸けて山野の間よ立ちますれバ

其身を繞る所の百物ハ皆お赤く見ゆることでござります丁度是れと同じ道理で快樂の心をもて世よ處しますれバ社會の事ハ視るとし見るもの總て快樂よ感ぜらるゝことで若し又憂鬱の心をもて世よ處しますれバ社會の事ハ聽くとし聞くもの都て憂鬱の種とおることでござります其處で彼の快樂の心をもて世を渡るものを名づけて樂天家と云ふことでござります其所謂樂天家て世を渡るものを名づけて厭世家と云ふの意で又其所謂厭世家とハ外でもとハ外でもおい即ち天を樂む者と云ふの意でござります其處で顧みますれバ彼の釋おい即ち世を厭ふ者と云ふの義でござりますが茲迦の下流を酌む佛者僧侶ハ總て其厭世家よ屬することでござりますが茲よ一休禪師ハ全く世の僧徒者流と一變しまして其身ハ墨染の法衣を着おからも露毛ほども世を厭ふ心の憂鬱よハ染ます恰も浮世を輕氣球の如く最と輕く見做されまして總て何事も輕く身よ受け世の人の憂しとする事も茶よして樂んだことで其狀ハ丁度大瓢簞を大海よ投げ入れ風波のまよ

まに任せて人間到る處何方よも浮む瀬いありとして浮世を樂しくも飄々として渡られたことでござります何さま面白き境遇で此の教旨をもて世の人をしも教へたことでござります之を物よ譬へて申せば彼の釋迦や達摩い極樂淨土の蓮根を堀り來ッて其儘生で衆生の饗應よ供したことでありまするよ一休い其れでい誰れも蓮根を喰ふ者いあい斯うしてこそ饗應せめとて醤油や味淋三盃等の五味を調加しまして是れを善い鹽梅よ割烹料理して衆生の饗應よ供したことでござります偖てこそ衆生が喜んで歸依したことで如何よも敬服のことでござります

偖ても茲よ一休の本傳を演ぶるよ就きましてい世の英雄豪傑又い力士俠客の傳を演ぶるとい聊か其体を異よすることで彼の英雄豪傑等の傳い大概何か晴れ〳〵しき一大事件があッて段々と之れよ向ッて進むものでござりまするゆえ其講談の秩序い能く整へます併し其秩序を整へまするよい其前後接合の轄として勢ひ或い他奇おき事をも演べねばおちぬことで

あります去るよ一休の傳い全く之れよ反しまして敢て一大出來事のあるよてもござりませぬゆえ夫れから其れと云ふ脈の續ける講談も致し兼ねることで實いと申せば單獨の事を多く取り集めてお話し申すことでございます但し其換りよい何れを取りましても皆々一粒精撰の面白き講談でございます是れが他の傳と異おる所でござります偖て此の趣きがお解りよおりましたら愈々本傳よ入りてお話し仕りませう

○智襲小僧過失の遁辭

一休和尚の猶ほ未だ幼おかりし頃或る寺の小僧と爲られましたが此の寺よ一ッの什物として蛇目の茶碗がありました師の僧養叟和尚よい最と之を大切よ致されまして小僧おぞよい容易よ之を見せませんでした去るよ見せぬものとしあらば猶ほ更らよ見たきい人情の常で一休い兼々此の什物を一度見たいとい思ひましたが如何せん此の寺の第一の寶物でござりますれば容易よ見ることもおらず一休も詮方おく其儘數月を送りました

るゝ或日のことでございました師の僧ゝゝ所用のあッて一休を遣して他出致されましたれば一休ゝゝ大ゝ打ち喜ばれ豫て見たく思ひし什物の蛇目茶碗を見るゝ此の時であると同じ朋輩なる小僧と共ゝ之を取出して之を見ましたが最と珍らしきまゝ兩人して打返しつゝ之を見てありましたが餘り多く拈り廻したので竟手外してポカリ取落しました落ちて果敢なき瀬戸物ゝ憐れ微塵ゝ碎けました去れば一休始め兩人の小僧ゝ愕然として大ゝ打驚かれ這ゝ如何ゝせんと茫然として居りまする所へ生憎や師の僧ゝゝ外面より歸り來られましたれば一人の小僧ゝ周章狼狽まはりてありましたが一休ゝ胸中ゝ忽ち一計を案じ出し卒爾ゝ師の僧ゝ向ッて云ひまするゝゝ　弟『如何ゝゝお師匠様此の世ゝ生きとし生けるもの其生ゝ如何ゝゝゝり給ふものでございるか　師『是れゝ俄かの問ひ凡そ生きとし生けるもの皆ゝ一たびゝ必ず滅す之を生者必滅とゝ云ふことである　弟『去あらば其滅するゝ如何ゝ　師『時節到來せることである』と此時一休ゝゝ彼の蛇目

の碎け茶碗を取出され之を師の僧ゝ示して云ふゝゝ　弟『お師匠様時節が到來しました』と申されましたれば師の僧も一時呆然として打驚れました　師が去りとゝゝ賢き小僧ゝと深く其才智ゝ感ぜられたさうでございます是れゝ就いて一寸お話しがございます其れゝゝ外でもない嘗て或所の下婢が勝手で一ッの瀬戸物を取落して破壞しました此の下婢中々の頓智者ゝて之を破壞すと早々縁側を二ッ三ットン〳〵〳〵と足音を致させて畜生々々と二聲三聲怒鳴りましたが彼の半片茶碗を持ち來ッて　婢『奥様彼の隣家の猫の畜生めが是れ此通りいたづらをして行きました』と申されました今一休の事と併せて好一對の談話でございます

○頓智小僧、師僧を驚かす

我れ人を謀れば人亦我れを計るとかゝて一休の十二三歳の頃でございました其寺の師匠ゝゝ甚く飴を好まれまして常ゝ一ッの壺ゝ飴を澤山貯へ置きましたが之を一休小僧ゝ食ゝれてゝ堪らぬと或る一日之れゝ向ッて

云ふよん　師『是れ〳〵小僧よ此の壺の中よあるものゝ大人が喰ふてゝ敢て差支あいが若し子供が食へゞ忽ち毒よ中ッて死することでされゞ子供たる者ゝ努め喰ふてゝおらぬことであると斯様よ戒め置きましたれゞ先づ〳〵是れよて安心のことである」と己れ一人ひたものよ喰ひました一休ゝ側を向いて長き舌をべロリと吐き出し心の中で思ゝれまするやうゝ師匠能くこそ我れを子供と侮りて誑らかせり併し我れ其手ゝ喰ゝおの燒蛤である好し〳〵我がせんやうをこそ見れと師の留守を待ち設けて居りました折節師の坊よゝ所用ありて一休を寺よ遣して外出せられましたれゞ

一休ゝ大いよ打喜ばれまして豫て望める壺中の飴を嘗めるゝ此の暇であると彼方此方と尋ね探しましたが師の坊も深く隱くしたと見にまして中中よ知れませんでしたが漸々のことで探し出しました場所ゝ子供の手の屆かぬ棚の上でござりましたれゞ一休ゝ臺の上よ登りて取りましたが餘り喜び調子よ乘ッて棚より取り下しおがら過まッて竟飴を打ちこぼしました南無三寶頭と云ひ手と云ひ衣類よ至るまでベト〳〵よ着けましたが何がさて日頃食ひたいと思ッた一心よ敢て开を厭ひもせず先づ小杓子を持て二三杯立てつけよ遣られましたが其甘きことゝ雲へんよ物おく類りよ舌鼓を鳴らして引續けて又二三杯遣らかしますれゞ最早舌も抜くるばかりで有繋の甘きを嘗ふ蟻よ均しき小僧も今ゝとて再び嘗める勇氣も出けましたるよ如何思ひましたか其飴臺を取ッて座上よ抛ち微塵よ打ち破壞されました所へ師の坊よゝ所用もおし果てゝ外面より歸り來られました去るよ一休よゝ何事よか雙手を眼よ當て潸然として泣いて居られましたゆゑ師の坊よゝ不審のことよ思ひ　師『汝何事よか泣くよや』と問ゝれまするとと一休の答へて云ふよゝ　弟『左れゞでござる日頃お師匠様の大切よおさるゝ飴壺を竟した過失より取落して破壞しました何と申譯もおくお師匠様お歸りよおらゞ定めし甚きお叱りもあらう程等そ死んで申譯を致さんと思ふよ就きましてゝ日頃お師匠様のもうさるゝよゝ此の飴を子供

が喰へば死ぬと仰せられました程よ是れ幸ひのことである此の飴の毒を嘗めて死ぬふと覺悟を定めて一杯嘗めて見ましたが唯だ甘ひばかりで死ねませぬゆゑ是れゝ未だ食ふことが少ないからであると又重ねて二三杯嘗めて見ましたが未々死ぬれません是れゝ寧そ頭よも衣類よも塗ッたら ゞ死ねることゝ思ッて此處彼處よ塗ッて見ましたが何うしても死ぬれず今お師匠樣よ面會せて此の始末面目おきことでございますと申されます れゞ師の坊もホーと呆然て亦言葉もおく竟よ唯だ笑ッて止んださうでございます何さま手よ餘る小坊でございました

○大人小供の智惠競爭

是れも亦一休の酒は幼年よして師匠の許よあッた時のことでございましたが茲よ一人のこびたる旦那がありまして常々此の寺よ來ッて師の坊よ參學おどしましたが彼の旦那常々一休の敏捷おることを感せられまして折々ゝ戯れを言ッて問答おどを致されましたが或時の事彼の旦那皮袴を

着て來られましたるを一休早くも門外よてチラリと瞥て內へ走り入りましたがへぎ板よ早々書付けて門の側らよ立てられた文句に

一此寺の內へ皮の類堅く禁制おり若し皮の物入る時ゝ其身よ必ずばち當るべし

と斯樣に書付けて立て置れました所へ來て彼の旦那來られまして此の制札を見ましたが一向よ頓着せずッカ〳〵と寺內へ入りました一休ゝ之を見て忽ち馳せ寄り咎めて云ふよゝ 小『こりや此お旦那門外の制札を見たるよや 旦『尤も見たることである 小『見たとあらゞ禁制を犯し何故よ寺內よゝ入り來れるよや 旦『左れゞである此の寺の內へ皮の類堅く禁制とあらゞ何故よ寺內よ太鼓を置かるゝことである這ゝ抑も如何よするよや 小『成程當寺內よ太鼓と云ふ身よ皮を纏へるものがあるが併し彼奴ゝ既よ我が禁制を破ッたものであれゞ彼の太鼓よゝ晝夜三度ゾゝばち當てゆき鳴かすることである去らば其方へも太鼓のばちを當て申さんかと打

ち戯れますれば有繋の旦那も閉口して一言の言葉もおかッたことでありましたが彼の旦那如何よとも口惜く何うかして此の返報をおさんと種々と工夫をしましたが偶然思ひつきたることがありまして『來る何日齋の志薦めたく候程よ一休を御供よ御連れ成られたし』と養叟和尚を招待致されましたが鱸て其當日よもおりますれば養叟ゝ一休を供よ連れられまして彼の旦那の許よ到らんとて开が家の門外まで行きましたるよ此の家ゝ入口よ小川の横ぎり流れて一ッの小橋のある家でございますれば是れを渡らねば此の家よ到ることゝゝ得叶はぬことでございます然るよ如何ある故でございますか橋詰よ高札を立て筆太よ墨黒々と書かれました

—(二)—

る文句よ

此はし渡ること堅く禁制おり

と斯様よ書付けて建置れましたれば養叟和尚ゝ之を見て當惑致され一休を顧みて申さるゝよゝ　師『此の橋渡らでゝ此の家へ入ることゝ能ふまじ

這ゝ亦如何よ致さうか』と問ひますれば一休少しも躊躇せず直ちよ對へて云ふよゝ　弟『此はしと假名よて書いてあれば敢て仔細おいことでございますお師匠様中央をお渡りあれ』と申せば養叟も成程と中央を通ッて内へ入りますれば彼の旦那出で來り詰ッて云ふよゝ　旦『和尚主從よゝ殊よ筆太よ書いたる制札を見おがら何とて橋を渡られしぞ　小『否や何よ我等ゝ端を渡らず主人よゝ我等主從年寄りと子供おるを氣遣ひ親切よも此の端渡るべからずとの注意近頃忝おきことでございる折角の親切よも端を渡らずよ中央を通ッて參りました』と之を聞いて有繋目論見たる那も亦開くべき言葉もおく其儘閉口せられましたが如何よも殘念の至りで何がお不審して此の返報をおさんものと虚勞付眼で一休小僧の身邊を見ますると折りも折りとて一休よゝ小僧の身輕の出立よて當日法衣を穿たずよ俗衣を着て來られましたれば旦那ゝ是れ幸ひのことゝ忽ち不審して云ふよゝ　旦『凡そ沙門と申すものゝ忍辱二躰の法衣を着罪障懺悔の袈

—(三)—

裟を掛けてこそ眞に僧とゝ申すべきものでござると聞つるよ如何よ小僧
おれゞとて俗衣の出立ゝ心得ぬことであると斯樣よ不審致されますれゞ
定めて一休ゝ閉口さるゝかと案の外一休ゝ幼けれども和歌一首を讀みて
答へられました其和歌よ

着て來たぞ本來空のくろ衣
　　袖長からで人こそ知らね

と讀みますれゞ旦那も師の坊も手を拍ち阿ッとばかりに口を開いたるま
ま暫時が程ゝ其口を塞ぐこともおらんだことでありました偖ても旦那
ゝ御齋を出されましたが今一度不審せんものと一休よゝ故意と魚類の膳
を据ゑられましたるよ一休ゝ這ゝ珍らしき齋であるとひたもの食ひよ食
ひましたれゞ旦那之を見て云ふよゝ　旦『小坊よ卿ゝ沙門よありながら何
とて斯くゝ魚類を食さるゝよや這ゝ近頃合點の行かぬことでござる』と詰
りますれゞ一休之を聞いて左あらぬ体よて申さるゝよゝ　小『左れゞでご

ざる拂僧の口ゝ鎌倉街道でござれゞ貴きも賤きも敢て开を擇ぶことおく
皆おの之を通行さすることでござる』と云ふを聞いたる旦那よゝ扳けゞ玉散
る刀の氷夏猶ほ寒き一刀スラリと引拔き一休小僧の眼前へ突出されまし
て　旦『如何よ小坊よ卿の口ゝ鎌倉街道とあらゞ此の物も通り候か』と申さ
れまするよ一休ゝ毫しも騷ぐの氣色おく　小『而て亦其物ゝ敵か味方か
旦『敵である　小『然らゞ通すことゝ相成らず　旦『否や味方である　小『けへ
ん〳〵只今曲者の通るとの通告よて俄かよ關がゞッて何人も通すことゝ
出來ぬ』と斯樣よ申されますれゞ旦那も和尚も舌を捲いて感ぜられました
如何よも盡きせぬ頓智でござります

○餅の滿月一休の袖雲に隱る

是れゝ一休の十一歳の時のことでござりましたが或日師の坊よゝ偶々他
行して一休が留守居をして居りました所へ折りも折りとて此時檀家より
大いなる餅が一ッ來られました一休莞爾として笑まれ這ゝ善い福分が來

たことであると开を少し割ッて袖の下ゑ隠し置きましたが其半片を殘して師の坊の歸りを待ッて之を其前ゑ捧げ出しました師の坊ゝ之を見て心中ゑゝ甚く可笑しく思ひましたが左あらぬ体ゑて　師『滿月無片破闕ゝ何地ゑかある』と斯樣ゑ問ひまするとと一休透さず直ちゑ　弟『雲隱有是』と對へて彼の餅の破闕を袖の下より取出されました抑も此の意ゝ元來滿月と云ふものゝかく滿ちて闕けたる所ゝおきことであるが今此の餅も固滿月の如くまん丸ゑてあるべきゑ何として闕けたるかと問ひましたるゑ雲ゑ隱れて此處ゑありと對へたることで師の坊も之を聞いて莞爾として打笑まれましたが偖ても小賢しき小僧かおとて彼の餅を皆お賜ひました

○沙門鯉魚腹葬の引導

一休の猶ほ未だ幼年の頃師の坊ゑ使へて書讀み手習おどおして居られましたが折節冬の夜寒むの頃でござりましたれば師の坊ゑゝ乾鮭をあつもものとして獨りで之を喰はれまして一休へゝ唯だ豆腐おどばかり與へて置

れゑした一休ゑゝ之を見て最と羨ましきことゑ思ゝれ師の坊ゑ向ッて云ふゑゝ　弟『凡そ出家と云ふものゝ腥き物を食ゝずとゝ聞き及びましたるゑお師匠樣ゑゝ乾鮭をきこし召さるゝゝ苦しからぬことでござりまするか左あらば小弟もたべて宜しうござりまするか』と申されますれば師の坊も最と可笑しくおぼしめされて云へるゝ　師『我等の如き老僧の腥き物を食するゝ敢て差支もおきことであるが汝の如き小僧の身として腥き物を食ふ時ゝ忽ちゑ罰の當ることである』と斯樣ゑ仰せられました一休ゝ之を聞いて最と不審の眉を顰め小首を傾け云ふゑゝ　弟『同じ人間の身として同じ腥き物を食し獨り小僧ゑのみ罰當るとゝ如何ゑも心得難きことでございます小弟の思ふゑゝ老僧ゝ小僧より分別もあることでござりますれば老僧こと却て觀面ゑ罰ゝ當ることでありませう』と冷笑ひまするとと師の坊ゑゝ是れゝ手ごとゑ行かぬ奴であると思ひましたが左あらぬ体ゑて云はるゝゑゝ　師『汝幼き身をもて小賢しきことを申すものかお老僧とても

敢て御佛の御許さいあるまあらぬが併し我等老僧い夫れ其處が老功で引導をして喰ふことであれば敢て咎めいおいことである　弟『ハアヽ左樣でござりまするか然らば其引導と申すい果して如何おるものまてござりまするか一寸承りたいものでござります何うぞお師匠樣お聽せ下さりませ

師『偖て〳〵汝い小癖おる小僧であるわいイデ然らば引導して開かせうかとて一盃盛りたる乾鮭を捧げ箸をおッ取りのべての宣いするやうは

汝元來枯木の如し助けんとすれども生きて再び水中ま遊ぶこと能はず愚僧ま服されて佛果を得よ喝

と引導を致されましてひたものまムシャ〳〵喰はれますれば一休い側らま之を見て最と不審の眉を顰め甚だ羨ましさうま見てありましたが心中竊かま思ふやういイデ〳〵我がせんやうをこそ見れと夜の明るを待ち居ました蟾て東雲も晴れ渡り夜も全く明けはおれますれば昨夜來より待ち設けたる一休い早々ま躍り起きて魚市へ走り行きましたが雲時まして最

と も大いおる鯉を一尾買ひ求めて來られました先づ味噌汁をして之を拵へまして彼の鯉を魚板ま取延べ左手ま鯉の細首を押へ右手ま出刀をおッ取り將さま鯉の細首丁と打ち落さんと致しますれば生憎や此時しも師の坊ま い偶々勝手ま所用のありて入り來られましたが今しも一休が鯉の細首を打ち落さんとする此の体を見て愕然として大いま打ち驚れ之を戒めて申さるゝまい　師『是れいしたり沙汰の限りである昨夜も懇ま敎へたる如くま小僧の身としてい乾鮭だま も無用ぞと申したるま況してや生きて働く魚を害して之を喰いんとするい以ての外のことである』と戒めまする

ま一休い少しも騷ぐの氣色おく云ふまい　弟『嚮きまお師匠樣い引導をして乾鮭を食されましたが今小弟も亦引導をして此の鯉を食しますれば敢て差支いでざらぬことであらうと思いれます』と左あらぬ体で申されます

れば師の坊ま い大いま呆然れ果てゝ竟ま い笑いれましたが一休ま向て申さるゝまい　師『汝开い如何おる引導ましてあるまか其引導まして尤もらし

くば之を許すべきことであるが若し其引導にして道理なくば此の殺生は破戒の罪決して免し難きことである」と御家の一棒を小脇に搖込んで其引導の趣きは如何であると責められましたが一休は毫も騷ぐことなく左手に鯉の細首を押へ右手には出刀を笏に擬へて引導されまするやうは

汝元來生木の如し助けんとすれば逃んとす生きて水中に游ばんよりは
如かず愚僧が糞と爲れ喝

と引導が了りますや否や鯉の細首水もたまらず丁と打ち落されぐづぐづ

づと裝てしたゝかに喰ひまして空嘯いて居られましたれば師の坊には始終の体を見て舌を捲て驚かれ彼の棒も戛哩と投げ出されまして申さるゝには　師「世話に今年生れし猫が三年になる鼠を取ッたとか云はるゝが汝の如きものを云はるゝか偖ても汝は唯だものにはあらぬことである」と深く感ぜられましたさうでございます

〇目前の地獄極樂

是れも亦一休の猶は幼年のことでございましたが此頃より能く大人をも導かれました一日或人小賢しくも一休に向ッて問ふよう　或『是れ小法師殿よ彼の地獄極樂と云ふものゝ果たしてあるかものゝかきものか証據もなく實ゝ死して後ち彼の地獄とやら極樂とやらへ行きて見ねば別らぬことであるが其れも地獄へ行くよゝ三途の大河や死出の山なぞ云ふ難所を越さねばならぬことで殊よ又極樂と云へば是れより十万億土の先きと云へば中々よ遙けき道程よて千年や万年で行き着かるべきものよてゝござらぬ況して我等の如き足の不達者のものゝ極樂の事ゝ偖て置き地獄へも行き難きことである小法師よ是れゝ抑も如何あることよや』と申しますれば一休の答へて云ふよゝ　小『否お何よ地獄と云ふゝ敢て遠きことよてもお い眼前の境界よあることで極樂と云ふも亦敢て遠きことよてもおい皆お目前よあることである』と之を聞いて彼の者更らよ不審して云ふやうゝ

或『否々左樣よ目の前よ地獄極樂のあると云ふも現よ顯はれて見

行かぬことでござる如何さま小法師の分としてゝ委しくゝ人ゝ示すことも為らぬことであらう』と冷笑ッて居りまするとー休小僧とは云へ所謂一寸の虫ゝも五分の精神あるとやらゝて此の言葉を聞いて大ゝ腹を立てまして 小『偖てゝ其方ゝゝ我れを若年ものと侮るか』と申しあがら嚇せて一條の繩を持ち來りましたが彼の者の背後へ廻り其首ゝ之を引き懸けまして思ふさまゝゝめ付けて云ふゝゝ 小『汝是れゝ如何であるか 或『是れゝ眞ゝ地獄の困苦である』と斯う面りゝ地獄を見せましたれば一休ゝ其繩を解き弛べて申すゝゝ 小『汝斯く繩が弛みてゝ如何であるか 或『是れゝ尤も極樂でござる』と答へ其儘能くも地獄極樂の現在ゝあることを合點して偖ても侮り難き小法師かゝと舌を捲いて大いゝ敬服せられました

○一休山伏法力の競爭

一休嘗て堺へ下向の時淀の河瀬船ゝ乘られましたるゝ折節乘合中ゝ一人の山伏が居りましたが徒然の餘りゝや一休ゝ向ッて問ふて云ふやうゝ

『抑も御坊ゝ何宗ゝてござるか 一『左れば我等ゝ禪宗である 山『ハヽヽ左樣でござるか禪宗ゝゝ我等が如き奇特ゝでざらぬことであらう 一『否や何々禪宗ゝゝ殊ゝ奇特多きことである其方ゝ何ゝても奇特あらば現はして見せられよ 山『善し〳〵見せるとも〳〵今我が法力ゝて此の船の舳に不動妙王を祈り現はして見することである』と言ひつゝ 山『一ゝ逝多伽童子二ゝ羅羯羅童子』と珠數押し揉んで祈られまするれば乘合の者這ゝ如何ゝゝあることであらうと目と目を見合せて居ましたるゝ案ゝ違はずアラ不思議や船の舳ゝ不動妙王背後ゝ火焔を放ッて忽然として現はれ出でまし た其時彼の山伏ぢうめんを作られて云ふやう 山『如何ゝ人々ゝ能く拜ゝれましたか』とヤせば皆々大いゝ不思議の思ひを爲して見て居ましたが一休ゝ更らゝ不思議と思ふ氣色もなく最と平氣ゝも酒然として居られまするゆゑ山伏ゝ一休ゝ向ひ催促して云ふ 山『如何ゝ禪僧ゝ斯る時ゝ如何し給ふゝや』と迫れば一休答へて 一『左れば我等が奇特ゝてゝ身より水を出

して彼の火焔を放つ不動尊を消して見することである其方隨分共に祈りて消されぬやう用心あれ』と言ひつゝやをら法衣の前をかゝげ揚るよと見ましたが彼の不動の火焔に向ツてしたゝかに小便をしかけまするばアラ不思議や忽ち其火焔は不動の體と共に消え失せて山伏の法力全く盡きまするば船中の人皆な一休を禮拜して奇異の想ひを爲されました斯くて船は其指す方の目的地に着しまするば人々皆な上陸して行きまする所に折節遙か向ふより大いなる一疋の犬現はれ出で而かも山河に響き亘る程の大いなる聲にて吠えて來られまするば彼の山伏は是れ幸ひのことである

と一休に向ツて云ふやう　山『如何に御坊よ先きの奇特比べには負けたるが今彼の最と恐ろしの犬の怒を止め此處へ近寄する法力を現はさんと欲することであるが御坊の奇特は如何でござる』とあるに一休之を聞いて

一『汗は最と易きことである先づ其方祈りて見給はれよ』と云へば山伏　山好し如何にも合點と珠數おツ取りサラ〳〵と押し揉んで祈りましたが何

が偖て怒れる犬ゝ益々猛り狂ひ容易よ來る樣子もありませぬゆゑ山伏ゝ頻りよ焦慮て　山『あびらうんけんそわか〳〵』と繰けさまよ唱へて祈りましたが何うして彼の犬ゝ來りません一休ゝ傍らよ之を見て最と可笑しく思ツて云ふやうゝ　一『其方よ其處退き給ひよ我等ゝ僅か犬一疋のことよあびらうんけんそわかも何も入ッたものでゝあいイデ彼の犬の怒を止め此方へ呼び近づけて見せ申すことである』とやをら懷中より壹飯の燒飯を取り出されました遙かよ彼の犬よ一目見せて來へ〳〵と宣ひまするば彼の犬の怒始めの氣色何處へやら一目之を見ると忽ち尾を垂れ頻りよ左右に振り動かしつゝ來りまするば山伏ゝ大いよ驚き忽ち閉口して逃げて行かれまするば傍へよ見居たる衆人皆と聲を揚げ一休よ向ッてゝ大いよ賞贊し又今しも逃げ行く山伏の背影を見てゝ大いよ打ち笑ッて之を見送られました如何よも一休の法力ゝ手近き奇特でござります

○地獄極樂の活現

地獄極樂い敢て遠きよあらず近く眼前よあることでござる一休甞て甲斐國よ靈時逗留されましたが此國よい地獄あゞ云ふ高山もあり又古墳も多きことであればィデ一周して之を見ばやとて立出でられましたるよ此國の地頭よ何の某と云ふ者がありましたが聟て一休の頓才頗ぶる當話善きことを耳よして居り幸ひ此の際直ちよ其頓才當話の程を聞かまほしとて故らよ僅かある供廻りよ何知らぬ体にて一休和尚の身邊近くへ差寄られまして卒然問ひを起して云ふやう　地『卒爾あがら物問ひやさん如何よ法師よ地獄極樂と云ふものい果して何のやうあるものよか』とやせば一休如何致されましたか有無の答へもあく何とも別かず眼よ角を立て少し裳を襲げ尻を出して一言呼んで　一『糞を喰へと言ひ放ちますれば地頭い意外の挨拶よ大いよ腹を立て　地『怪くき坊主の惡口哉ものあ言いせゞ戒めよと下知致されますれば何かはもて堪りませうや若黨共　惹『畏まッてござる』とッと馳せ寄ッて散々よ打ちすへ噫あ無慘や高手小手よくゝし揚げて

地頭の前よ引き据ゑますれば一休いやをち頭を擡げ仰いで地頭よ云ふやう　一『地頭殿是れこそ面り眞の地獄でござると地頭い此の一言を聞きハッと心付かれまして急よあはたゞしく馬より下り手づから一休の戒め繩を解き謝して云ふやうい　地『是れい甚く無禮を仕りて何とも申譯けあきことでござる偖ても面り地獄の御示現難有仕合よでざります』と禮拜致され其己れの乘ッたる馬よ一休を乘せ參らせ我が邸宅え伴ひ歸り種々精進の珍味を盡して之を饗應致されますれば其處で一休地頭よ向ッて云ふやうい　一『偖ても是れこそ眞の極樂よてござると申せば地頭い面り極樂の御教化に益々敬服されましたさうでござる

○取變へ引換へ百萬遍敎盛の舞ひ

是れも亦一休甲斐の國よ逗留中のことでござりましたが偶々一人の浪人一休の許よ參られてヤすやうは　浪『如何よ和尚樣い活佛である』と專ら高く國中よ評判さるゝことでござるが我身今浪々の身とあつて遊

く他國より來りて困難をしも重ぬることで如何なりとも困却極まりたことでございますアハレ願くハ活佛のお情なりて此の困難をお救ひ下さるやう偏へに願ひ奉ります』と云ふ一休之を聞いて最と不憫に思はれて　一『汗ハ亦何とも困りたことである而て亦其方より何か一門親類はおきや』と尋ぬれば彼の浪人答へて云ふよハ　浪『左れバでございます私より一門の親類がございまして殊に大身紳士にてございまするが私事少しく面伏のことあッて參られ惡く且つハチト遠路にて路銀もおく如何なりとも困却仕ることでございますれバアハレ和尚樣のお蔭にて何とも一身糊口の道にあり付くことでありますれバ何れとも宜しく賴上げまするとに只管に懇願しますれバ一体も亦這ハ是非おきことであると思召されて更らに尋ね問ふやうハ

一『其方より身に覺えたる藝能ハおきや　浪『何も是れぞと申す藝能もおく總て不調法不器用にてございます是れより殆々困却されました　一『否や〳〵其方も紳士の成り果てと見受けらる何ぞ一藝のおき筈もおからう

禮樂射御書數の六藝の中何か一ッ身に覺えたるものハおきや』と一々指折り數ひて問尋ぬれバ彼の浪人之を聞いて一々之を存ぜぬ知らぬと答へまするに有繋の一休も殆んど拂子を投げられて云ふやうハ　一『ハヽア左樣であるか偖ても困ッたことである浪人とおッたも無理おらぬことである種のおき手品ハ遣ハれぬ如何にとも閉口したことである』と苦笑して愛時思案に呉れて居りまするとこの時彼の浪人の申しまするやうハ　浪『和尚樣に私事別に是れぞと申す藝能ハ一ッも覺え申さぬことでありまするが少々故あッて唯だ敦盛の舞ひのみ一番聊か存じ申してござるが是れにてハ如何工夫ハでござらぬか』と云へバ一休之を聞いてハタと横手を拍ッて

一『夫れ〳〵其れにて手品は遣ハれると始めて天に登る階子も出來たことであると夫れより此の浪人を不憫と思ふ者にて鼓おどの打てる者を語らひ集めて遠か能舞の狂言を催されましたが一休先づ廣告吹聽ハ大きいのが善いと天晴高札を建てられました其文句に

一此度上方より幸若罷下勸進能仕る勸進元ゝ日本老和尚

と斯くおん書載られますれゞ這ゝ珍らしきことゝ上ゝ申すゝ及ばず所も百姓ゝ至るまで五里或ゝ七里の里程を厭ゝず貴賤老若群聚して差しもゝ廣き芝居小屋もメリ〳〵破れも裂んばかりの大入ゝて最と盛大の樣子を極めました左れゞ黑山の如き見物ゝ今ぞ天晴の能舞始らんと頻りゝ瞳を延し眼を張りて視て居りますると嬾て彼の浪人ゝ裝束を着け最とも氣高く身つくろひして舞臺へ立出でられますれゞ千萬の見物人ゝ素破こそ出でたれと云ふ彼の浪人敦盛を一番舞ひ濟まして樂屋へ入りますると是れと引違ひゝ一人の男が出で來りて口上陳まするやうゝ　男『口方の沙汰〳〵樣沙入り沙見物の段樂屋一同ゝ有難存じ奉ります』と厚く一禮を陳べて

男『偖て此の次ぎゝ何をか舞せ申しませうか御好み申述べられたうお望みゝ從ひまつります』と云へゞ見物の客ゝ口々ゝ大職官が善い否や何ゝ高館が善い否や〳〵清繁が善いと各々思ひ〳〵のことを言ひはやして注文し

て居りますると豫て言ひ合せたる五七人の惡漢共此處彼處より躍出でゝ叫ぶやうゝ　惡『否や何ゝ外の舞ゝ見たくおい矢張り今の敦盛を舞れよ』と云へゞ彼の樂屋より出で來れる男の云ふやう　男『同じ舞ひゝ或ゝ御退屈のことでがおじざりませう』とあるゝ彼の惡漢共又重ねて云ふゝ　惡『否や何んでも乃公等が敦盛が好きじゃ是非ゝ敦盛を再び舞ゝられよ若し敦盛を舞ゝぬとおらゞ此の芝居小屋を蹈み潰して仕舞ゝん敦盛を舞ゝぬか何うだ〳〵』とあれゞ彼の樂屋より出で來れる男已むを得ず　男『然らばお望みゝ任せ再び敦盛を舞せられませう』とて蠕て復た再び敦盛を舞ひまして斯くて舞ひ果てますれゞ前きの男又舞臺ゝ出で來りて口上を陳れますれゞ此時しも又前の惡漢共現ゝれ出でゝ云ふやう　惡『又々敦盛を舞ゝれよ左おくゞ芝居小屋を蹈み潰さんか如何ゝ』とあるまゝゝ是非おく續けさま四五番同じ敦盛を舞せられまして　男『偖て今日ゝ是れゝてお暇乞ひ』と見物人を追出されましたが木戸口にて大聲ゝ呼ゝッて云ふやうゝ　男

『明日ハ狂言取換ヘ浄瑠璃ヨ入れまする程ヨ又々浄瑠璃物下さりませ』『イヤ評判』と勧れますれバ愈々翌日とあると前日よりハ一層賑入で其見物の混亂ハ中々ヨ譬へんヨ物もおきことでござったが愈々幕が開けバ御定りの敦盛の舞ひヨて一番舞ひ終れバ又前日の如く豫て仕組んだることでありますれバ取變へ引換へ續けさま五六番の敦盛ヨて偖て其日も亦はねましたが又々翌日も相變らず敦盛ヨて此の如く前後七日まで同じ敦盛を舞ひましたれバ日ヨ五六番ヅヽヨして凡そ四十番前後も敦盛を舞ッたことで彼の浪人も之れが爲めヨ一廉の資金をも作ッたさうであるが此事途ヨ地頭の耳ヨ入りましたれど一休の爲したる業おれバとて別段御咎もおくッて濟みましてござる

○一休風の神と爲る

一休和尚ハ屈伸自在の躰で時ヨ由ッてハ風とも爲う又風ともおることでござります一休管て關東へ赴かれまする時供人おど手足纏綿あるを最と

五月蠅きことヨ思ハれ其身ハズッと變化して普化僧と爲られ尺八を吹いて道行かれましたるヨ或る一日の事途中ヨて豫て見知れる山伏ヨ逢いましたる山伏ハチラリ一休を見まするヨ此の躰でござれバ何ヨ知らぬ顔ヨて一休ヨ向ひ問ひ掛くるやうハ　山『如何ヨ普化僧殿何方へ參られまするか』と云ふヨ一休答へて申すやうハ　一『左れバでござる素より普化僧の躰の何方と定めおきことでござれバ唯だ風ヨ任せて何れおりとも風の吹ま行くことでござる　山『ハヽア左樣でござるか然らバ若しも風おき時ハ如何おさるヽことでござるか　一『左れバ其時ハ是れ此のやうヨ自ら吹いて行くことでござると其儘腰おる尺八を取ッて吹き東國を指してサッサと行かれますれバ彼の山伏も亦此の躰を見て呆然として其背姿を打眺め西と東ヨ別れ西國指して行かれたさうでござる何さま電光の如き頓智でござります

○一休の慈悲猿猴を感動す

一休嘗て伊豆の國へ參られ只ある山家の近邊を通られまするに或る處に一疋の猿を捕へ柱に之を縛り付け噫な無慘や頻りに之を打ち敲き既にうち殺さんず勢ひに猿は最と憐れなる聲を放ツてヒヽと泣き叫んで居りました折節一休和尚此の處を通り掛られましたが今しも此の啼聲を聞いて最とも不憫に思召され懇にも山人に乞ふて猿を貰ひ受けて山に之を放ち遣りましたるに猿は大いに打ち喜んで山又山を指して走り行きました左(三四)れば一休は今日は善い功德をしたと獨り自ら喜び其近邊に両三日逗留して居りましたが折節夏のことで或る一日の夕方前きの救ひ扶けし猿苺を蕗の葉に包みて持ち來り恭しくも一休の前へ差出されました如何さま前日の恩を覺えて居り獸類ながらも聊か其恩を報ひ返さんとて斯くは時候の物已が住所より持ち來ッて献じたことであります左れば一休も最と可愛く思召され有合せの布袋に豆を入れて聊か返禮の意に與へられまするれば猿は頻りに推戴いて歸へられましたが彼猿の又重ねて其袋に栗を入れて來り一休の前へ恭しく棒げて歸へられまするれば一休も殆々感に入ッて後ちに或る旦那の許に行きて深く感じて物語られましたさうでござるが如何にも感心なことでございます

○一休極大宇宙の笠を被る

一休關東より上方指して歸るさに道すがら或る大名と後になり前になりて上られましたが頃しも舊六月の末つ方にて恰も宇宙火焔の爐にあるが如く殆々暑氣の堪へ難くありましたるに噫な强や鐵にても造られし身体(三五)にや一休笠をも被らず最と平然として日の下を歩かれまするにぞ彼の大名遙かに之を見て嗚呼可愛相なことであると忽ちに惻隱の心を起し元來チト心のやさしき大名でございましたれば早々に使者をもて申越れまするやうは「大笠被りてすら堪へ難き此の炎天に御坊はなぜて笠をめさゞるか幸ひに此方に持合せたる笠之れあるまゝチト古くはあれど先づ是れなと被らせられよ」と一蓋の笠贈られまするれば一休も禮を正うして申さ

まするやうに　一『是れに〳〵御志の程近頃最と忝おきことよに候へ侍りまするが此の愚僧に青天を笠よ被り居りますれば別段よ差して暑いことも寒いこともござらぬ宜しく御主君よ返事して給へれよ』と使ひの者之を聞いて一時呆然としておきれましたが何に兎もあれ疾く主君よ復命せんと其儘取ッて返して是れ〳〵斯うと主君よ言上しますれば其主人ある大名の君も之を聞いて宣ひますやうに　大『ハヽア左樣であッたか左樣あれば其れよて善し如何さま此の坊主に唯人よてにあきぞ必ず馬のけわげも掛けぬやう日蔭を通り過させよと猶ほも後よあり前よあり段々と西を指して參られまするよ嬬てには西山よ傾きて或る旅宿よ着きましたが彼の大名に又使者をもて申越れまするやうに　大『彼坊にお構へおく御隨意よ同宿めされよとあります れば一休點頭きて嬬て程おく暮方よ及びて同じ旅宿よ泊られましたるよ其夜又彼の大名の方より使者をもて一休の方へ申越れまするやうに　大『貴の程笠を參らせんと申したる者よて候が旅行に

物憂きものでござるよ此頃の暑さよ左こそ疲れたることでござらう程よ彼酒一献參らせたくとの寸志厭にしからずば此方へ御越し下されたしとあれば一休も恭しく禮を返し　一『是れに過分の彼事よてござる左らば彼言葉よ從ひ推參仕ることであらう』とて直ちよ其使者の案内よ連れて彼の大名の君の居らるゝ奥の間へ通られまするれば大名に一目之を見ると直ちよ聲を掛けて云ふやうに　大『如何よ彼坊よ日本國の習慣人よ逢ふ時よに笠を脱ぐとこそ承るよ何とて笠に脱ぎ給にざるよやと其言葉の下よ一休直ちよ　一『左れば脱ぎても置くべき所でざらぬ因ッて已むを得ず笠被りしまゝよて推參失禮御免下されたし』と答ふれば大名の君に之を聞いて偖てこそ浮説よ聞く一休よてあらんと推し愈々種々の珍味を盡して饗應されましてござる又其席よ於て樣々の面白き問答おどもあッたさうでござるが所に竟よ之を聞き漏らしました如何よも殘念のことでございます

○長野銀助の金覆輪

爰ゝ越前の府中ゝ長野銀助と申す馬乘の名人でございましたが一休昔て福井より上り此の府中ゝ兩三日逗留して彼是と萬の用事を執り行ッて居りましたるゝ彼の銀助此事を聞き及べれ使をもて御齋申上げたき旨一休の許へ申遣はされまするゝ一休も亦早速と其招きゝ應じて參られ齋も濟んで四方八方の物語りゝ時を移されてありまするゝ此時或方より非常の荒馬を曳きもて來られまして　或『甚だお手數の儀ゝ之れありませうが此の馬只今一馬場御乘り試み下されたしと申すゝ銀助答へて　銀『委細承知してござる』と直ちゝ馬引寄せて飛乘れましたが抑も此の銀助と申すゝ元來痼氣とて脱腸の病ゝて陰嚢が瓢簞の如く腫れて鞍の前輪ゝつかへて事の外乘り惡さうゝ見えました一休此の躰を見て最と可笑しく思れ忽ち一首の狂歌を詠ぜられまするやうゝ

はね馬の前輪ゝかゝる大ふぐり
金覆輪と之を云ふらん

と斯くゝん仕られますれべ銀助も亦馬上ゝ之を聞いて大いゝ笑ひ興せられたさうでござる如何さまゝも面白く可笑しき狂歌でございます

○一休の洒落長途旅行の舞ひ

一休の言行ゝ一生涯奇を以て成ッたることでありまするが今將さゝお話し仕らんとすることの如きゝ其最も奇中の奇と申すべきことでございます一休嘗て此國より京都へ上りまする時一日敦賀の宿を打ち立ちて貝津の山中に一宿致しましたるに何者が吹聽しましたか今宵此の宿にとまッたのゝ都にて最とも名高き舞まひの大頭にて今ゝ世を忍ぶ入道と爲ッて諸國を打巡りて專々佛法を修行すると承るが如何ゝ人々ゝ是れより共々參りて一番何ぞ舞を所望するゝ何うであらうか』と云へべ皆ゝ之を聞いて是れゝ〳〵一段と面白いことであるイデ然らべ是れより同道して行かう』と大勢打ち連れ立ちて彼の旅宿へと押し掛けました躰て一休に對面致されましたが开が中の口利きとも覺しき一休に向ッて申すやうゝ　或『承り

りますれば御坊は都より舞の大頭殿の山此の遠國までも其取沙汰は隱れ
ないことでござる左るに今宵此の旅宿に一宿しましたるこそ幸ひ後ち後
ちの語草にも爲したくでざれば何かあ一番舞ふて見せ給へれよ』と一人が
云へば他の者も側らより合槌を打ち是非頼むと周圍ぢうより迫り乞ひま
すれば一休之を聞いて大いに當惑して云ふやう　一『是れは〳〵思ひも寄
けぬ仰せでござる哉皆々見らるゝ通り坊主でざれば經陀羅尼こそ少し
は存じ申せ其舞と云ふものは如何あるものにや更らに存じ申さぬことで
ある所は定めて人違ひでござらう』と斷りまするも聞ず大勢ある在所の者
共は皆あ口を揃へて　衆『否や〳〵何と宣ふとも其れは隱すと申すもの是
非〳〵只管よ一番の舞ひ懇望でござる若し御舞ひあきに於ては已むを得
ず今宵當所の宿は叶ひ申さぬことである如何よ〳〵と迫りつ責めつ所望
しますれば一休益々困じ果てゝ云ふやう　一『是れは〳〵迷惑千萬のこと
である哉大いあある人違である免させ給へ』と只管に陳謝しましたが皆あ邊

鄙の里人でござれば更らに合點せず何でも蚊でも是非〳〵と所望します
るよど有繋の一休も今は大いよ困じ果て如何とも詮術あく稍々愛嬌
小首を傾けて考へるよと見ましたが既よして里人等よ向ッて云ふやう
は　一『偖て愚僧は決して素と舞子あど云ふものよは之れあけれども何か
一ふし舞はねば此の里の宿も泊めずとありては是非よ及ばず就きまして
は愚僧若き時よ高館と云ふ舞を少し見覺にて候まゝチト豐束あきこと
はありまするが一さし舞ふて見申さんよ先づ鈴木三郎が紀州藤白より奥
州衣川まで行き着く所を少し舞ひ申すべきことであるとあるよ彼の里人
等は高館か何か其ンあ事は毫も知らぬが　衆『何でも早く〳〵』との所望よ
今は一休もやをら座を改めて起ち右手よ扇子を執ッて左手を丁と拍ち
一『去る程よ鈴木の三郎繁家は旅の裝束めされつゝ藤白を立出て奥州指し
て下られける程ゝ下られける程よ〳〵〳〵と凡そ二三十遍も下られける
程にを繰返し〳〵申されますれば里人等は最と不審かしくも不思議の思

念をおされて云ふやうゝ　『是れゝ抑も御坊様如何としたことでござりますす先刻より承ッて居りますれバ御坊様にゝ同じ事を繰返し〳〵申されまするゝ何ンと致したことでござるイデ疾く舞をまッて見せられませと申せバ一休左あらぬ体よて云ふやう　『左れバ其事よてござる三郎が紀州より遙々奥州まで行くことよて其日数七十五日を要して始めて衣川へ着れたことであれバ其下られけ.る程よを百萬遍も唱へ今日より二ケ月半申し續けた後ちでござられバ衣川へゝ着かず衣川へ着かねバ如何よ見物があきたとて衣川へ着いた所の舞ゝ實際よ違ふゆゑ舞れぬことであれバ先づ〳〵緩々御見物ありませよ孰れ其うち下られける程よを七十五日申し續けた後ちよゝ其先きの舞を舞ッてお目よ掛ることである左れバ各々方も亦此の宿よ八九十日も逗留して衣川の處を見て行き給へ』と申せバ何れも呆然として大いよあきれて必よ思ふやう唯だ儘かの問よてさへ下られける程よて最と退屈せるよ何とて七十五日が間之れが聞かれやう

『其れ之れするうちよ又續けて下られける程よを聞かされてゝ堪らぬと皆お閉口して我家よ歸ッたさうでござる左れバ一休も一時の頓智で其人達の難を免れました如何よとも可笑しき話でありますす

○一休の輕口咄嗟の答辭

一休嘗て甲斐の國へ下られまする時土地の何某と云ふ者豫てしも一休座即の答話神妙なる趣き聞き及んでおッたることでござりましたれバ一谷の當國へ下向と聞いて這ゝ序で宜しい時であるイデヤ此時を機會よ一休頓才の答話面りよ聞かんものと心算既よ定まッて一人の童子を呼び近づけて云ふやうゝ　『今よもあれ一休和尚此處を通らバ生恁麼のとき如何と申されよ其時和尚何とか言ゝ直ちよ喝と云ッて立去られよ』と斯う言ひ含めて致へましたが常よ聞き慣れぬ言葉でありましたれバ童子よゝ一寸覺に難く小首を傾けて〳〵考行かぬ体であれバ然ゝ重ねて論し云ふやうゝ　『葛夫紀生の字ゝナヤと云ふ字であるぞ面倒　慮ゝ彼の日頃汝ぢの

好きある事をインとはねたるものと覺えよ斯う物よ依りて覺えて居らるが善いことであるわと最と懇よも敎へて置き一休の通り今ぞ遲しと待つて居りました只も知らぬ一休ん何心おく不圖しも此處へ差しかゝりまするとと豫て待ち設けたる童子彼の事言いんとて走り出でましたが生憎や生恁麼の本事ンスッカリ忘れて仕舞ひ唯だ其記憶の助けよとて物よ依せたるもゝのみを覺えて居り何とも別かず一休を見て『童いもの時何如』と問ひ掛くれば一休取敢へず『袁ても善し燒いても善しと答ふ彼の童子ん之を聞いて敎への如く『喝』と云ふよ一休透さず『えぐひか』と申しますれば何某ん傍らよあッて此の始終の問答を聞き童子の間違可笑しくも左りとん亦一休の頓才最と〳〵敬服のことであると深く感ぜられましたさうでありますと

○黴毒治療の狂歌

愛よ大和國翠の藥師と云ふん靈驗最ともあらたある御佛とて願あるも願

おきも常よ參詣の人群聚して皆て人の絶えしことんおいことでありました或時の事黴毒とて惡しき瘡毒の病よ惱める者がありましたが此の藥師よ七々四十九日の間跣足詣の願を立て日々怠慢おく詣で既よ四十有餘日ともおり最早願果よも間近くおりましたが何とも少しの靈驗もおく身の瘡ん依然として離れずありましたる程よ大いよ如來を恨んで散々よ惡口して居りました所へ折節一休和尚都より此處へ下向ありと聞いて這ん序で宜しい所であると急ぎ迎びよ出で一休よ對面して云ふやうん『或如何よ都おる一休和向よ聞いて下さりませ私が黴毒よ惱み此の藥師如來よ願を掛けること七々四十九日而かも最早四十餘日願明よも間もおきよ今よ少しの靈驗もおいのん如何おる故でござるか和尚樣ん豫てしも當代の活佛と承るアハレ願くん此の瘡直る工夫御敎へ給へりたし』と申す一休之を聞いて云ふやうん『否やとよ如來の靈驗がおいのでんおい未だ汝が身よ足らぬ所があるからのことである佛を怨まず汝が身を恨まれよ去りお

がら我れ一ッ祈る工夫のあれば汝更らよ如來よ祈られよ开ん外よてもあい我れ今一首の狂歌を認め遣ンす程よ汝今宵藥師堂よ詣でゝ此の狂歌を讀まれよ急度靈驗あることである』と申せば彼の者大いよ打ち喜んで急ぎ取ッて返して藥師堂よ詣でましたるよ頃しも五月中の二日のことよて貴賤群衆の开が中よン或ン現世安穩後生極樂と祈るもあり或ン南無藥師瑠璃光如來彼れを助け給へ是れを救い給へおどゝ頻りよ口々よ言ひ祈りて物騷がしく心も定かおらねば彼の黴毒病る者愛時内院よ入ッて人の靜まるを待ッて居りました後是れするうち漸々よ夜も深更よ及びますれば皆おの皆下向して燈明の法師と其黴毒病める人とばかりよおりました左れば彼の者茲ぞと一休の與へられし狂歌を取り出し最と物靜かよも謹んで謹み上げました其狂歌

南無藥師諸病悉除の願おれば
身より佛の名とそをしけれ

と斯くおん讀まれました是れン藥師と云ふ名ン藥と云ふ字を書いて病人の爲めふン其身よりン寧そ其名がをしきことであるとの意で彼の病人之を讀み上げますると此時内院より最と清かよも氣高き湧聲よて

村雨ンただ一時のものぞかし
己がみのかさそてこよ脱ぎ置け

と返歌されますれば彼の病人ン嘻々難有の佛勅やと雲時禮拜して立ちッて見ますれば曖不思議や身の痛ン落ちて跡かたもおくおッたさうでざる這ン餘りお不思議の話で開明の今日でンチト受取悪きことでござるが其佛勅と云ふ一迄歌の意ン簑笠ン村雨の時よこそ入れ晴れて後ちン入ぬものである左るよ村雨と云ふものン唯だ一時の間のものであれば曖て追ッつけ簑笠も入らぬことゝおることであると云ふよおッて而して其簑笠と云ふを身の痛と云よかけて云ッたもので一時の村雨が濟めば曖て身の痛も不用にて其處よ脱ぎ置け身ン輕くおッて全く黴毒も治すると云ふの

意を述べたことであります如何よも一寸面白き歌でありまするが是れを或ハ一休が彼の燈明の法師よ内々言ひ含め置いて斯くハ佛勅の返歌として詠ませたことでがおざりませう

○下より上よ下れる難問

或時のことでございました京都紫野大徳寺の和尚或人より一ッの難問を起されて『或下から上よ下るものハ何であるか』と問ハれましたるよ有驚大徳寺の老和尚も是れよハ大いよ閉口されまして兎さま斯うさま種々と考へましたが遂よ其答案も出ですず頻りと苦慮の末憐れ果敢おや黄泉の客と爲られました然るよ此の和尚殿の其答案を得ざるを如何よも遺憾よ思ハれまして死んでも浮べれず毎夜々々其寺の後住職の枕邊よ朦朧と立ち現ハれまして何とも別かず『下から上よ下るもの』と云ひて何方ともおく消え失せます此の如きことと毎夜でございますれバ後住も之を解きかね且つハ毎夜のことよ五月蠅く堪り得ず大徳寺を辞し去るものが多きことで

ございましたが茲よ有名おる一休和尚が遂よ此の大徳寺の後住職と爲られましたところ又例よ由りて其夜から枕邊よ立ち現ハれて『下から上よ下るもの』と云ひますれバ一休之を聞いて云ふよハ『是りゃ幽魂よ卿ハ下から上よ下るものが解らぬで浮べぬか去らバ我れ之を示して浮バせんとて一首の和歌を詠ませられました

藤棚の水よ寫りし花の影
下より上に下るものかな

と斯くおん詠ぜられますれバ彼の先住の幽靈も莞爾として大いよ笑まれ安心の体よて消に失せられましたが其翌夜よりハ再び出でおくおッたさうでございます何さま面白き和歌で龜井戸おどへ行きますれバ此の下から上よ下る花の影ハ見らるゝことでございます

○一休別號命名の所以

一休と云ひまするハ此の禪師の別號でございまするが一日或人來ッて問

ひまするよゝ　或『抑も和尚殿の一休と名づけ給へるゝ如何ある御意よて
ござりまするか』と尋ねますれば一休答へて申すよゝ　一『是れゝ能くこそ
の渉尋ねでござるが併し是れよゝ敢て深き意もおきことであれば別段よ
話し聞かすべきやうもおきとである』とて一首の和歌を讀まれました

有漏路より無漏路へ返へる一休

雨降らばふれ風吹かばふけ

と斯樣よ仕れば彼の問ひつる者　或『偖ても面白さうある和歌であるが其
有漏無漏とゝ如何ある事でござるか』と重ねて尋ねますれば何とも別かず
一休和尚よゝ拂子を取ッて彼者の顏をヅロ〳〵と撫でますれば　或『イヤ
這ゝ何事を爲さるゝことでござるか何とも心得ぬことである』と大いに打
ち驚かれますれば一休徐ろよ謂ッて申しまするよゝ　一『其何とも心得ぬ
所が即ち無漏路である又其ハッと打ち驚きし所が即ち有漏路であると斯
う悟されますれば彼の者大いよ感ぜられまして　或『是れゝ〳〵即時よ大

事を授かり最と忝おきことでござる偖て其和歌の一やすみとの趣きゝ心
得ましたが其雨降らばふれ風吹かばふけとゝ如何ある意よて候か』と問ひ
ますれば一休答へて　一『左ればよ固と僅かの道のことであれば雨も風も
厭ふことでゝおい別段よ深い意味のあるよてもおい唯だ是れだけのこと
である』と申す彼者又重ねて　或『偖ても難有き浮歌よてあるかお試みよ只
今授かり申せし心を一首詠みて見ん』とて

うろじむろじ一休ぞと聞くときゝ
十萬億土すくさきとしる

と斯樣よ仕りますれば一休之を聞いて善哉々々とてドウと尻を突いて樂
み喜ばれました

○蜷川新左衞門の參禪

太白があれば杜甫があり東坡があれば山谷があり又三馬があれば一九が
あるの習ひで同じ時代よ一人の瓢きんものがあれば又之れよ對する一人

の洒落ものがあッて二人の間は最と面白い話しもあることでございます
るが茲は一休の相手なる蜷川新左衛門尉親當と云へる頓才家があッて此
の兩人の間なる常は面白い話しが數多くあることでございます抑も此の
新左衛門と云へるる久しく禪學は身を寄せ日頃頻りに心を苦めて之を研
究して居られましたが當時紫野大德寺の一休和尚る禪道は於て二おきも
のと聞き傳へまして或る一日の事一休の草庵を尋ねて參られ柴の扉をコ
ッ〳〵敲れますれば打節一休なる庵室は居られましたがやをら身を
起して出で來られまして　一『我が庵室を訪ふ者る抑も何れの人にて候ぞ
新『否や苦うも候るず佛法修業の大俗參りたることはてある』と申されま
すれば一休も還る奇妙ある男と思ひますれば何かの寒巻詠る偖て置き短
刀直入は問ひを起して

問ふ汝る何方の人ぞ　　答ふ和尚と同國

問ふ國は何事も侍らぬか　　答ふ烏るガア〳〵雀るチウ〳〵

問ふ此處る何方とか知るや　　答ふ紫は染めたる野邊

問ふ如何として染めけるや　　答ふ尾花朝顔紅菊紫蘭

問ふ散りて後ちる何如　　答ふ宮城野が原

問ふ原は何事か侍る　　答ふ水る流れて沈々風る吹て颯々

と斯樣は水の流るゝが如き問答は一休も殆々感は入りて新左衛門を請じ
小坊主は命じ　一『茶を參らせよ』とて一首の和歌を詠せられました其和歌
は

何をがお參らせたくる思へども
達摩宗は一物もおし

と仕られましたるは新左衛門も左るもの忽ち返歌をして詠じまするやう
る

一物もおきを賜る心こそ
本來空の妙味おりけり

と申されますれば　一『是れハ〳〵　蜷川殿より聟て聞き及びしより中々の道心者よてござる』と大いよ感ぜられましたが夫れより四方山の談話を爲されましたるよ時よ新左衛門の申されまするハ　新『和尚殿少々問ひ參らせたきことがござる　一『委細承知してござる何おと御問ひあれ　新『然らば御問ひ申さん邪正一如とハ是れ果して如何おる意よ候や　一『左れば おり』と答へて

生れてハ死ぬるおりけりおしおべて
釋迦も達摩も女子も杓子も

又問ふ空即是色とハ何如答へて

白露の己が姿ハ其まゝよ
紅葉よおけばくれおゐの玉

又問ふ色即是空とハ何如答へて

花を見よ色香も共よ散り果て

心おくても春ハ來よけり

又問ふ世法ハ何如答へて

世の中ぞ食ふて糞して寢て起きて
さて其後ちハ死ぬるばかりおり

又問ふ佛法とハ何如答へて

佛法とハおべのさかやき石の髭
繪に書く竹のとゝもずれの聲

と斯くおん一々問ふ言葉の下に而かも咄嗟の問よ和歌もて答へられまする〳〵新左衛門ハ舌を捲いて大いよ驚かれまして　新『偖ても和尚殿よハ聞きしよ優る活僧よてござる哉最と頼母しく存ずることでござる左れば此の後ちとても愈々道を御示し下されたく希望致します左りおがら今日ハ何時まで語るも濱の眞砂の數々よて盡きせぬことであれば先づお暇ま申ます』とて垣の邊まで歸られましたが遽かよ手をハッと拍たれまして

新『是れはしたり一大事の安心を忘れました偖て佛には如何して成られまするぞ』と問ひますれば一休は心中窃かに彼奴はくはせものであるわいと思はれましたが左あらぬ體で　一『开は最と易きことであると申しながら空向きてふんぞり返り目口をひろげまして　一『斯うしてこそ佛には成られる事であると示されますれば新左衛門大いに打ち驚かれまして　新『嘻是れは和尚殿には誠に活大禪師にてござると深く感じて歸へられました　さうでござります

○蜷川新左衛門大風雨の見舞

蜷川新左衛門尉親當と申すは素と能州蜷川村の郷士でござりましたが一休和尚と懇親を結びし後ち故ありて京都に住されましたるに或る一年の秋八月の下旬に偶々大風雨がありまして洛中洛外の家屋堂塔は皆な多少の損害を被らぬはなきことでござりましたれば茲に蜷川新左衛門は這は大變である斯くては紫野大德寺も心許なきことであると取る物をも取り

敢ず一人の下僕を連れ飛ぶが如くよ一休和尚の許へ見舞よ參られまして申しますやうゝ　新『和尚殿よゝお内よ御座るかナント殊の外ある大風雨よて御寺ゝ何處も損傷ゝでざりませぬか』と訪ゝれますれば一休折節在宅にて早速出で來りて　一『是れゝ誰人かと思ひますれば蜷川殿よてござりまする誠よ秘れある大風雨よてござるよ態々の御尋ね忝おく存じます幸ひよ當寺ゝ何事も之れおきことであれば先づ〳〵御安心下され』と申しながら忽ち咄嗟の間よ一首を口吟せられました其和歌よ

我宿ゝ柱も建てず葺きもせず
雨よも濡れず風よも當らず

と仕られますれば新左衛門之を聞いて　新『和尚殿其御庵ゝ何方よかとゞる』と問ひますれば一休莞爾として笑れし』とて又一首の和歌をもて答へられました

我庵ゝ都の巽しかぞすむ

よを宇治山と人いいふあり

と斯様ゑ仕られますれば新左衛門も亦莞爾として笑れおがら　新『偖ては和尚殿ゑゝ喜撰法師と共ゑ相住みおされまするかと戯れますれば一休答へて　一『否やとよ拙僧ゝ喜撰法師より借り居ることとてござる　新『ハヽア左様でござるか然らば和尚ゑゝ借家殿ゑておいしまするか』と笑いれたゝ

すれば一休又一首の和歌を詠ぜられました其和歌ゑ

假りの世ゑ貸したる主も借り主も
貸すと思ゝず借ると想ゝず

と斯くおん讀まれますれば新左衛門大いゑ感ぜられまして是れを其扇面ゑ書き留められましたが又更らゑ云ふやうゝ　新『一寸ゑ參りましても得道の德があることで誠ゑ忝おいことでござる』と大いゑ喜び躍て別れを告げて門外ゑ立ち出でられましたが何思ゝれましたか急ゑ取ッて返へされ突して云ふゑゝ　新『偖ても先刻より種々と面白く可笑しき戯言おゞ伺ひ

竟迂か〳〵と問ひ奉るべきと思ひし事もスッカリと打ち忘れてござるが此の思ふ事を忘れて歸らんとする意は如何心得て宜しきものに候へます

ぞ承りたきことでござると一首の和歌を詠みて問はれました其和歌に

吹くときはもの騒がしき風なるが
吹かぬときにはいづちなるらん

と仕りますれば一休之を問いて直ちに返歌せられまするには

吹くときはうべ騒がしき山風も
吹かぬときには吹かぬなりけり

と仰せられますれば新左衛門は驚嘆極りて一言の言葉もなく唯だ霎時一休を禮拜して歸られましてござる

○蜷川新左衛門筍の手打

其後ち蜷川新左衛門の邸宅と一休和尚の庵室たる大德寺とは並んで相接して居りましたが或年三四月の頃でありました大德寺の藪の筍が垣を潛

りて新左衛門の庭中ゑ突如と生ひ出でましたが而かも二本まで大いゐるものが出でましたゆゑ新左衛門ゝ之を見て莞爾として笑まれつゝ傍らの下僕を顧みて云ふゑゝ　新『今我れ此の筍を取ッて呉りやうと思ふが何うだ　僕『其れゝ宜しうございます隨分と面白いことです小僕が拔きませうか　新『否や待て霎時隣家の主人が主人で夫の奇人であれゞ若しも尋常の事して掘取らゞ必ず彼是れと面倒も生ずることであれゞ姑らく我が爲さんやうをこそ見れ』と云ひながら軈て太刀提げて庭ゑ下りましたが彼の筍ゑ向ッて云ふやうゝ　新『其方儀武士の庭内をも憚からず無斷ゑて入込む段不屈千萬無禮者め只今主人の手を下して手打ちゑ致して呉んとスラリ一刀を拔くよと見えましたが軈て二本の筍ゝ根本よりパサリ斬り取られました一休此事を聞いて家人ゑ向ッて云ふゑゝ　一『有繋ゝ新左衛門である能くも計れたことである併し我れ彼れを驚かして呉れることである』と使者をもて申越されまするやうゝ　一『仄ゑ聞く所ゑ據れゞ只今罪人お手

打ちの由承りましたが最と不憫ゑ候まゝ役目ゑ任せ死骸ゝ此の出家ゑ渡し下されたし』と斯樣に申遣ゝされました所新左衛門も去るもの中々ゑ其手ゝくゝず透さず彼の使者ゑ返事して云ふやうゝ『左れゞ其死骸の事であるが實ゝお手數も如何と存じまして死骸の儀ゝ早や既ゑ臺所ゑ於て火葬致し候まゝ和尚殿折角の思召ゑ任せ彼れが着たる衣服ありとも遺族の人ゑ參らせん』とて彼の筍の皮のみを送り遣ゝしますれゞ一休之を見て大いゑ笑ッて申さるゝやうゝ　一『偖てゝ　新左の頓智も近頃ゝ大いゑ進んだことである』と深く感ぜられましたさうでございます

○蜷川新左衛門の角池を一休丸く見る

或時のことでございました蜷川新左衛門何か心ありげに四角ゐる池を掘り穿たれました如何さま金魚ゐど入れ置くものと見えました左るゑ一日升が友一休和尚來られまして此の池を見て何か懷紙を取出されサウ〳〵と一筆書いて池の傍らゑ建てられました其文ゑ曰く『此の池丸池』と斯樣ゑ

書れましたれば新左衛門之を見て甚だ不審し詰り問ふて云ふやうゝ『是れゝ和尚殿よゝ奇怪あことを書き建てらるゝものでゝござりませぬか此の池ゝ見らるゝ通り誰れが見ても面り現よ角池でゝござらぬか左るよ丸池とゝ心得ぬこと這ゝ抑も如何ある所以でござるか其所以承りたいことでござる』と申されましたるよ一休答へて云ふやうゝ『左れば」である此の池如何よも能く清んで居ることで實よ清みきッて居る既よ隅みきれば角あき丸池でゝござらぬかと一本くはされ有繋の新左衛門も何ンと返す言葉もあく其儘閉口されましたが其後の事或る一日大夕立があッて之れが爲めよ池の水ゝ全く濁水と爲ッて底も別かずありましたれば新左衛門是れゝ幸ひの事であると早々人を遣ゝして一休を迎へ之を指し示して云ふやうゝ和尚殿先日ゝ此の池清みきッたよ付き丸池であると仰せられましたが今日ゝ全く濁ッて少しも清みけがござらねば何ンと是れゝ角池よてゝござらぬか』と申せば一休又ぬからず即座よ答へて云ふやうゝ『否や〳〵未

だ中々角池にてはござらぬ矢張り依然の如く丸池にてござる何故なれば斯う濁ッて居ては清まないことである既に隅まのないのは取りも直さず丸池ではござらぬか」と申されますれば新左衛門呆然一驚を喫し何ンと復た返す言葉なく其儘閉口されてござります

○蜷川一休念佛奇談

蜷川新左衛門親當或る一日一休の庵室を訪ひ四方八方の話に時を移しましたが毎度新左衛門は一休の爲めに言ひへこまされ如何にも殘念に思はれ今日は一番和尚を困らせて呉んとて問ふて云ふやうは「和尚殿貧にも合點行かぬは彼の念佛の稱號でござるが其唱へ方には色々あッて「ナムアミダブツ」とも唱へ又ナンマイダーとも唱へ或はナム〳〵とも唱へることでござるが斯く色々に唱へて利益に變りのないものでござるか若し變りがあるものとすれば僅か一口の言葉の相違で役益が薄くては誰れしも其利益の薄い方の念佛を唱へるもの

ぞおいことである若し又別よ其利益よ變りがおいとすれゞ其やうよ色々の念佛の言葉を作らぬとも善いことでござらうと思れます孰れとも合點の參らぬ念佛の唱へ方で這ん抑も如何ある所以でござるか和尚殿の知識の教へを仰ぎます』と詰るが如くよ問ひまするよ一休よん何等の答へもおく卒爾よ　一『蜷川殿』と呼ぶ新左衛門　新『ハヽ何んでござる』と云ふよ何とも別かず一休又　一『新左衛門殿　新『ハヽ何んでござる　一『否や何よ親當殿　新『ハヽ是れん又屢々のお名呼び何んとしたことでござる』と新左衛門ん最と〻不審の眉を顰めますれゞ一休ん莞爾として笑まれつゝ左おらぬ躰よて他の事を話し出しまするよゞ新左衛門ん愈々不審よ得堪へず一休よ向ッて云ふやうん和尚殿先刻より屢々お呼びおされたが何の御用でござりますか其れよ何ぞ御用の仰せもおく拙者の返辞を聞きしのみ他の談話よお移りおさるゝか是れも抑も合點の行かぬこと其れ將た何ぞ深き御趣意よてもあることであるか承りたきことでござるとあれゞ一休云

ふやう『是れんしたり御返辞ん疾くよ申上げてござるよ未だ御合點がおきん其不審ん返ッて此方よこそあることでござる左るよ猶お解りおしとあらゞ貴君先づ蜷川殿と新左衛門殿と親當殿とよん何れ丈けの差異がござるか御示し下され』と申せゞ新左衛門始めて愛り大いに閉口しました

○蜷川一休五戒問答

或時のことでござりました蜷川新左衛門が大德寺よ來られまして一休と佛法の話しおどをして居られましたが一休の申さるゝよん　一『ナント新左衛門殿歎んしいことでんでざらぬか近時の出家ん兎角よ志薄く昔し御佛は五百戒をさへも保ち給へりと聞くからん責めてん其數とりの五戒だけも能く保ちたきことである　新『成程左樣で誠よ沙門ん申すよ及ばぬことでござるが俗の上よても責めてん此の五戒だけん保ちたきことでござる　一『否おの何よ俗ん是非もおきことであるが役目柄出家よん保せたきことであるが併し廣く見渡し深く察するよ天下よありとしあらゆる物皆お

一ッして其五戒を保つものゝあいことである今手近く此の僅か一尺程の扇子さへも五戒を破ることであります況して僧俗生きとし生けるものとして五戒を保つことのあらぬゝ尤もの事亦是非もあいことでござる

新『是れゝ申されたり此の扇子も五戒を破るとナ申さるゝが中々ゝ奇妙あることを云ゝるゝもの哉是れゝ又例の和尚の輕き出來口ゝて候ゝんィデ然らば扇子の五戒破りを一々問ひ參るべければ和尚答へて聞かしめ給れよ何時もの御頓作の輕口承りませう　二『左あらば一々問ひ給へ答へて見申しませう　新『然らば問ひ申すべし』とて

問ひ申さん如何あるものか是れ扇子の殺生戒の破戒ゝて候や

答へて云ふ竹截りて骨とゝ爲さゝるゝや

問ひ申さん如何あるものか是れ扇子の偷盗戒の破戒ゝて候や

答へて云ふ虛空の風を偷まぬや

問ひ申さん如何あるものか是れ扇子の邪淫戒の破戒ゝて候や

答へて云ふ要と〳〵合ゝせざるや

問ひ申さん如何あるものか是れ扇子の妄語戒の破戒ゝて候や

答へて云ふ書虛言を書かざるゝや

問ひ申さん如何あるものか是れ扇子の飲酒戒の破戒ゝて候や

答へて云ふ開いてざらんざ言ゝざるゝや

五戒の問答首尾結了しまして　二『ナント新左衛門殿是れゝ扇子の五戒を破れるものゝてゝざらぬか　新『是ゝ今ゝ始めぬ御明答でござるが又一入面白き御答へ如何ゝも感服致しました但し其の五戒のうち偷盗戒の御答へゝ對し聊さか不審申したきことがござる　二『開ゝ亦た如何ある不審ゝて候へまするか　新『否や何ゝ開ゝ外ゝてもござらぬが古語ゝ扇是日本扇風不二日本風一とか申されまするが今此の語ゝ據ッて考へますれば扇子ゝは是れ日本の扇子を動しましても風ゝ日本ばかりでゝおく所謂千里同風を申しますれば其盗ひと申すゝ抑も如何ある所以ゝか最と不審のことゝ

候』と滑稽半分に申しますれば一休何とも別かず突然　一『新左衛門殿』と呼びかけるに　新『あッ』と答へまする口の下より一休に直ちに一首

春もおく香もおき人の心こそ
呼べば答ふる主

と詠ぜられますれば新左衛門大いに感に入って　新『奇妙即座の御口かあはれ願くは先刻より始終の問答一筆書付けて賜はりたしと請はれました るに一休も早速承諾して一筆走らせて書いて與へますれば新左衛門は大いに打ち喜ばれまして之を表具して掛物と爲され深く之を秘藏せられたとか申します實に咳唾も珠玉とありて輾轉立板をまろぶが如き即妙の辯へで如何にとも敬服の至りでございます

○蜷川新左衛門の臨終一休の引導

蜷川新左衛門は性來萬人に優りたる才智あるものと云ひ殊に此の年頃長く一休の許に參禪に來られしことでもございますれば遂に佛法の正

法眼藏をも窮めたことでありましたが茲に定業盡きましたるは人力の如何ともすることは能はざることで久しく疾病の床に臥しましたが終に氣息も絶々になり一門の人々皆お馳せ集りまして今は限りに名殘りを惜みて歔欷して鼻うちかむもあり或はヨヽと聲揚げて泣くもありまして除の見る目も最と憐れにて知らぬ袖さへ濡しました然るに此の一家愁嘆の打節青々たる西の空より俄かに紫雲靉靆きましたが見る〳〵空中一面に藹ひ嚠喨たる音樂さへも聞えまして靈香藹として三尊二十五菩薩赫々たる聖衆を引き連れて最と間近くまで來迎致されました中々に奇しく妙へおる瑞相にて實に疑ひもなく新左衛門は西方十萬億土の極樂世界に往生して紅蓮の臺にしも到らんとせることは明さまに知られたことでありました左れば人々此の体を見て皆お喜びの泣をさへも浮べられましたが中には片足棺中に投じたる老人又は物慣れぬ若輩おとは何の思慮もおく今しも眼前面りに此の体を見て天に仰き地に傍して共に死おんとぞ狂ひまし

たが此時嫡子新右衛門ハ父新左衛門の膝下ニ寄り添ひ涙を袖ニ包みおがらニ申すやうハ　子『アレ御覽候へ難有くも彼の瑞相實ニ頼母しき次第ニて父上の極樂往生亦疑ひおきことでござる』と斯く聞くより新左衛門ハ眠れる眼を潤と見開き我子をハタと睨みて云ふニハ　父『人として弓馬の家ニ生れし者の假令安養淨刹ニ到り九品蓮臺ニ座すとても何ぞか弓箭を忘れて可おらんや汝其れ書院の床ニ立てたる重藤の弓ニ箭を添へて持ち來られよ』と命じますれバ聞く人皆おゝ感かぬハおきことで這ハ如何ニすることかと見ておりますれバ其うち嫡子新右衛門心おらずも弓箭を取揃へて父新左衛門の前ニ持ち來たりますれバ新左衛門ハ病体ニも弓箭を執りてハ一騎當千ゝて弓ニ箭を雙ひ滿月ニ引きしぼり雲時狙を擬して居りましたがヤと掛聲諸共兵ときッて放ちますれバ其箭ハ誤たず三躰の中尊光瓶を放ッて立ち給ふ阿彌陀の胸板を射貫きましたれバ傍へニ見て居ました る人々皆おアッと思ふ間ニ彼の紫雲の靉靆るものハ諸々の聖衆と見にま

したものも皆おゝ忽ちニ消え失せて蔭も留めずおくおりました餘り不思議のことニ能く〳〵穿鑿しますれバ豈ニ圖らんや這ハ是れ處ニ久しく年經る狢の化けたるのでおッたさうでござるが眞ニ稀有おる次第ニて新左衛門ニハ終ニ一首の辞世を詠ぜられました其句ニ

生れぬる其曉きニ死ぬれバ
今日のゆふべハ秋風ぞ吹く

と斯樣ニ辞世を仕られましたが軈て寂寞の域ニ入られました斯くて既ニ絶息致されましたれバ引導ニハ一休をとて之れニ頼まれましたるニ一休も日頃此の新左衛門とハ意氣相投ずる別懇の中ゆひでもあり旁々もて奇才子の死去おれバ何がお一節變はりたる引導をおさばやと心中窃かニ思ひを構ひて居られましたが軈て埋葬の時刻ともおり新左衛門が亡骸を輿に乘せて大德寺ニ來られましたれバ一休にハ美々しき裝ひをおして立出で給ひまして新左衛門が乘ッたる籠を敲かれましたるニ噫お不思議や既

又死したと思ッた新左衛門棺中よりて聲高々と一首の歌を一休に詠みかけました其歌は

獨り來て獨り歸るも我れなるを
道教へんといふぞ可笑しき

と其詞の未だ終らざるに一休直ちに返歌して云ふまい

獨り來て獨り歸るも迷ひなり
來らず去らぬ道を教へん

との宣ひますれば新左衛門も實に思はれましたか其後ちい音もせず全く成佛致されました此の趣きを傳へ聞いたる世間の人い皆な一休の即妙の返歌に感じ誠に人間あらぬ活菩薩なりと云合ひました

○難問の返報

或處に最とこびたる一人の男がありましたが一日一休の許へ不圖來られまして手に一羽の雀を持ち之を一休に示して云ふまい　『如何に法坊よ

此の掌中の雀い生てあるか將た死であるか　一『無である』と斯樣に答へまするとと彼の者此の一答へに閉口したと見えまして復た一言の言葉もなく其儘逃ぐるが如く立ち去られましたが如何さま彼の者の心だくみい若しも一休が生なりと云ないば直ちに之を握り殺さんと致せることに成し若し又死なりと云ないば直ちに放ッて遣ふと兩天秤を掛けたることでありますが其れ故えに一休い就れとも就かず唯だ無と答へたことでありますが其後ち一休彼れが家に行かれ門口の敷居を踏み跨ぎまして　一『是りやく』亭主に今我れ此の敷居を出づるか入るか之を言ひ當てゝ見られよ』と申しまし亭主れば亭主い南無三寶這い前日の返報かと胸にギックり應へ何とも言い方唯だ手を拍ッて茫爾として笑れました如何さま閉口したことゝ見えます

○一休の活論理推測

象の牙を見ますれば未だ其全体を見ませぬとも是れ必ず牛より大いなるものであると云ふことが知られます又虎の尾を見ますれば未だ其全体を

ませぬとも是れ必ず狸より大いあるものであると云ふことが知られます是れ所謂一節見れて百節を知ると云ふもので茲よ上京よ糸屋由右衛門と云ふ者がありましたが豫々一休の頓才人の問いづることよ對し之れよ答ふるの迅速あるゝ古今無双の由承り居り何時ぞゝ一たび對面して之を試みて遣らふと心中竊かよ思ひ設けて居りましたるよ折節一休ゝ檀那歸りと見にまして途中よて不圖しも邂逅ましたれゞ由右衛門ゝ這ゝ幸ひのことゝ一休よ向ツて申しまするやうゝ　一『偖ても和尚殿よゝ一段の處よて御目にかゝり序でおがら御願ひ申したきゝ餘の儀よも候へませぬが明日少し志す日に差當りますれゞ和尚様へ聊か御齋進せたく存じますれゞ御足勞おがら御來臨下されたく願ひます就きましてゝ豫々御寺へ伺候致して御願ひ申したくと存じました所今此處よて御目よかゝりしこそ幸ひ略儀おがら御願ひ申す儀でございます　一『ハヽア左様でございるか其れゝ何より奇特のことでございる委細承知しました而て又其宿所ゝ何れよて

ありまするか　由左れゞでございる宿所ゝ外よてもございませぬ室町通よて御存じの處でございます參られますれゞ直様お別りよおります』と申し葉てたるまゝ由右衛門ゝ直ちよ別れて立ち去られましたが此時由右衛門ゝ未だ其姓名をも告げぬことであります御したれゞ大概のものおれゞ何とも判斷が付かぬことでありまするが頓才の一休ゝ直ちよ合點せられて點頭れましたが翌日におりまするとと早朝より大德寺を立出でられまして室町通へと差掛りましたが固より何處と約束したる目標のあるよてもございませぬが或る一軒の店頭に何とも別かず小さき鉈の釣り下げてある家がありました是よ於て一休ゝ忽ち判斷して是れゝ此方と云ふことであらうと點頭きまして其家の内へ這入られまするとと又何とも別かず家の入口よ犬の皮が敷いてありました一休又之れをも合點致されまして奥へ通られますれゞ由右衛門出で來られて　由『偖て〳〵今日ゝ道路も惡しきよて御太儀でございました定めて御足も汚れ候ことでございませう洗足を差

上申しませう　一『否や〳〵只今カハを越えて參られし程ゑ敢て其れゑん及よバぬことでござる』と申せバ由右衛門ん心中大いゑ打ち驚かれまして頓才の和尚ゑ一本やられたりと思ふ心ん外ゑも出さず其場の挨拶も濟みますれバ暫らくゑして由右衛門ん膳部を調へて出されますれバ一休ん

一『然らバ頂戴仕る』と申して飯より吸物と順々ゑ蓋を取ッて見まするとこれんしたり何れも皆ゑ悉く小糠でござりますれバ左あらぬ体ゑて居りまするとこれ由右衛門座敷へ出で來られまして　由『何んゑおくとも徐々と御あが(六七)り下れたし』と申しますれバ一休直ちゑ　一『是れん〳〵今日の御志ん三七(七七)日でござるか』と申しますれバ由右衛門愈々驚嘆して感ぜられました此時一休ん座を立たんと致しますれバ由右衛門ん猶はも試みんものと錢百文を取出されまして一休ゑ向ッて申すゑん　由『今日ん段々との御讀經難有き仕合ゑでござりますす左れバ此の百文ん最と僅かゑる志ゑ今日の布施として差上參らせまする程ゑ和尚殿ゑん是れへ身を寄せず其方ゑ居ゑながら御請けあられませ』と難題を申しかけますれバ一休ん聞きも終らず直ちゑ答へて云ふやうん　一『其御志委細心得ました左すれバ拙僧ん此方ゑて請け申しまする程ゑ卿ん亦身を我れゑ寄せず又投げずして賜んりたし』と申しますれバ由右衛門ん驚嘆極りて言句おく霎時ゑして申さるゝやうん　由『偖て〳〵和尚殿ん聞きしゑ優る御頓才の御即答ゑん殆々敬服致たしました小生の如き復た再び開く口だゑでござりますす

○赤飯手形の通行

或時のことでござりました一休和尚親しき在家へ參られましたるゑ折節此の家へ赤飯の到來物がある由ゑて之を一休ゑ進ぜられました一休ん

一『是れん何よりの好物忝おきことでござる然らバ遠慮おく早速頂戴仕る』とて何の會釋もあらバこそ己れ手づから握りてん食し堅めてん食し夥しく食されました此の家の主人ん此の体を見て豫て一休の答話を試みんと

思ふ折りからでござりましたれバ是れ能き時であると一休より向ッて云ふよハ　或『是れハ和尚殿よハ赤飯でござれバ容易くハ胸を通るまじきと存ぜられまするよ其やうよしたものよ食せられまするハ如何あることよてござりまするか』と問ハれまするも一休和尚よハ毫も耳よも入れませんで無暗と引續けて食しまする程よ主人ハ頻りよ焦ちまして　成『和尚殿其やうよ無言よて食さるゝハ如何よとも心得難きことでござる何とか一句仕られたしイデ早う疾々と』責掛けましたが此時一休よハ漸く答へて申しまするハ　一『否や何よ決して大事おいことでござる是れ見られませよ此通りせき飯とでざれバ一々握り固めて手形を付けて通りまする程よ何程よても差支おく皆サッサと通られます』と云ひも敢ず又々之を食しなすれバ主人ハ大いよ驚かれまして閉口し復ハ一言の言葉もおかッたさうでござります

○濁酒和歌の問答

是れハ一休和尚の山居して居る時のことでござりましたが此頃親しく出入する者或る一年の冬寒中見舞よとて一体の庵室よ參られなしたるよ折節和尚よハ寒さ凌ぎよとて濁酒を飲んで居られましたが彼の者此の体を見て一首詠まれまするハ

山居して心すますと聞きぬるよ
　濁酒をバいかで飲むらん

と斯くおん打ち戯れまされバ一休も透さず

山居して飲むべきものを濁酒
　とても浮世よ住む身でもおし

と仕られまされバ彼の者も感よ入りて歸へられましたさうでござります

○化物ハ飄々の問よ在り

或人一休よ問ふて申しまするハ　或『ナント和尚様よ世の中よ化物ハ云ふものハ眞よ之れ有るものでござりまするか若し又之れありとしますれ

果して世ゑ云ふが如き不思議あるものでござりまするかアハレ和尚樣の知識で御諭し下さりませ』と望まれましたるゑ一休ゝ何とも別かず　一『嗚呼化物であるか其れあれゞ別段六ケ敷いことでもおい唯だ中間ゑ飄々である』と斯樣ゑ答へられましてござる彼の者ゝ之を聞いて大いゑ腹を立てゝ申すやうゝ　或『是れゝ云たり一休禪師殿とも覺え申さぬことを宣ゝする ことでゝござりませぬか凡そ人の物を問ふゑ之れゑ答ふるゑゝ其禮法のござらふゑ何とも別らず唯だ中間ゑ飄々と云ふ挨拶ゝ無禮も程こそあれ餘りとゝ云へゞ無禮の挨拶心得ぬことゑこそ這ゝ人を嬲ると云ふものゑて出家ゑゝチト似合ゝしからぬことでござる去來此の上ゝ是非ゑ其仔細を承りたうござる若し其說おくゝ禪師とゝ申すまじきことで又他人ゑも和尚おゑとゝ申させまじきことでござる諏訪八幡も御示現あられ給ゝれよ』と烈火の如くおりて怒られますれゞ一休敢て騷ぐの氣色おく徐ろゑ申されまするやうゝ　一『嗚呼偖ても其方ゝ短氣おゑ男にてゝござらぬか斯

う怒られて見てゝ其方のやうおる者とゝ一寸の談話もおらぬことである其方能く考へてお見やれよ世ゑ幽靈化物おゑ云ふものゝ有りと思へゞ有ることであるが無いと想へゞ又無いことである其有りと云ふも無しと云ふも總て我が一心の趣けやうで不思議と云ふも亦同じことで有りと思へゞ有り無しと想へゞ又無いことで實ゝと申せゞ化物不思議ゝ有るゑても おく無きゑてもおく其有ると無きとの中間の飄々である我れ是れも前きゑ其方が化物不思議と云ふものゝ有るか無きかとの問ひゑ對し中間の飄々であると答へたることであるナント是れゝ即ち中間の飄々でゝござらぬか』と示されますれゞ彼の者ゝ横手を拍ッて大ゑ感ぜられまして　或『成程和尚樣の御了簡ゝ別である』と前きの過言を謝して歸られたさうでござる何さま面白き諭しでござります

○一休禪師弟子を敎ふるの妙道

玆ゑ一休の檀那ゑ一人至極愚直おる者がありまして折々ゝ大德寺ゑ參り

て一休の物語りおぢを聞るゝことであります　したが或時のことでございます　した一人の小兒を連れて一休の草庵へ參られて申さるゝやうに　或『豫て法語へ承りまするへに一子が出家すれば九族が天へ登るとか聞き及べれましたが就ては今此處へ連れ參りましたるに獨り子でございまするが何うぞ此の小兒を汚弟子へおし下されたし』と望まれましたるへ一休へ早速承知致されまして　一『ハヽア左樣でござるか其れに何へしても汚奇特おことと委細承知してござる』と直樣綠の黑髮をクリ〳〵と剃り落されまして最と愛らしき小坊主と爲されましたが一休へ御手をもて其剃立ての坊主天窓をサラリ〳〵と撫で廻されましたれば其親に這に何ぞ必ず難有き御引導へてもあらうと耳を清まして待ッて居りまするとと嗾て一休和尚に妙おの聲を發して　一『陰囊へおれ〳〵』と三遍まで繰返して宣ひますれば之を聽き居たる親に驚くまいか大いへ打ち驚かれましたが遂へ大いへ腹を立てられて云ふへに　或『是れに偖て和尚殿へに途

方もおいことを申さるゝものでにござらぬか好し假令佛へまでに得あられませぬとも責めてに菩薩へおれかしとでも申さるゝことかと思ひましたるへ案外へも牛の陰囊へおれとに出放題も亦太甚しいことでござる抑も牛の陰囊へおッて如何おる利益がござるへや心得ぬことでござると頻りへ一休を白眼みつけて居られますれば一休に此の躰を見て莞爾として笑にれましたが偖て申さるゝやうに　一『末法の出家に兎角へ行ひ難くして落ち易きことであるが之れへ反して彼の牛の陰囊と云ふものに常へブラ〳〵として動もすれば落ちさうへ見ゆるが偖て一生落ちたと云ふ話もおいことである故へ出家も亦此の牛の陰囊のやうへありたきものである因ッて今此の小坊へ對し牛の陰囊へおれと申したることである果して合點が參られましたかと仰せられますれば彼の檀那へに大いへ感ぜられて　或『偖てに委しく承ッて見れば面白くも又有難きことでござる此の上に何分宜しく侍み上げます』とて其儘一子を托して歸られましてござる

○釋迦達摩の故郷より一休禮拜す

一休和尚ハ隨分とぼけた人物で能くも悟りを開いたことでござるが或時のことでござりました一休和尚偶々或る川邊を通られましたるよ折節夏のことで一人の婦人が赤裸々よおッて居られましたが一休ハ不圖しも之を見て何思ひましたか彼の裸體婦人の陰部よ向ッて最と叮嚀よも一度おらず二度おらず三度までも禮拜して通られましたが此時又遙か傍らよ此の躰を見て居たる人々口々よさゝやきまするやうハ夫れ彼の僧ハ狂氣して居るか出家の身として女の皮膚を見て而かも陰部よ向ひ三度までも禮拜して行かるゝハ如何ある事であるか如何さま狂氣のことであらうが何ハ兎もあれ最と珍らしきことであれば疾く追ひ近づきて其仔細を尋ねて見やうでハおいかィヤ其れハ面白いことであると皆お人々走り行き纏て追付いて彼の墨染の袖を引かれて問ハれまするやうハ　或僧ても坊ハ奇妙ある人である只今女の皮膚を見て最と叮嚀よ禮拜したるハ這ハ抑も

如何ある所以よてござるか佛道修行よ斯ることのありまするよか如何とも不審よ候まゝ是れまで追ひ來ッたことであるが願くハ其所以を聞いたいことでござる』と迫りまするれば一休ハ有無の答辞もおく唯だ何とおく

女をば法の淵くらといふぞ實よ

釋迦も達摩もひよい〳〵と生る

と斯くぶゝん口吟せられたるまゝ疾く〳〵行き去られました左れば跡よ殘りし人々ハ口々よ評し合ふやうハ彼れハ抑も何人であるか左りとハ又らしき和歌を口吟せらるゝもの哉と申しまするうち一人僧て之ハ是如る人がおッて夫れこそ紫野大徳寺の一休禪師であると申されまするれば人々皆お愕然として大いよ打ち驚かれ如何さま一休でがおござらふ一休おらで斯ること云ふ者ありとしも覺ぬことである實よ殊勝のことで婦人の胎内よりハ貴人高位の人も又ハ諸宗の高僧もひよい〳〵と出でらるゝことである之を思召して禮拜されたるハ原因を忘れぬとゞ申しませうか如

何さまなも敬服おことであると皆お深く感心せられて退散せられたさう
でござる

○一休の變化天淵月鼈の相違

茲に都に一人の金滿家がございましたが最と大事の葬に際しまして導師
に如何おる人をか請ずべきと種々と家内の相談を致されましたところ
當時名高き聖僧知識も數多くあることであるが中にも紫野大德寺の一休
和尚に若くにおいことであると内談既に定った上に佛事に愈々明日のこ
とであれば茨く人を遣にせとて早速人を以て一休を頼みに遣にせました
る折節一休に庵室の塵埃を拂ひ庭おど掃除しておられましたが固より
人に隔てのおい坊おれば心安く傾承致されました斯くて彼の使ひの者
が歸られて後ち一休如何思召されましたか嚮きに使ひの者の口先として
一寸金滿家の由承りましたれば急に賤しくも淺間しき乞食に身をやつさ
しまして手足に墨を塗り付け鎖薦を身に纏ひられまして宛然海藻の中

から這出でたやうにおッてやをら杖に扶けられて彼の某とおん云へる金
滿長者の門口に立たれ世の乞食の罵る如くに　『何うぞはや佛事の供
養に慈悲の志を下され』と繰返々々申されまするに此時しも他の二
三人の乞食も亦來られましてとり〳〵に施行下されとせがまれました
るに此の家の主人邪見にも腹を立てられまして　主『醜き奴輩おッ拂へ』と
下知致されましたが其言葉の下より二三人の壯丁手に手に棒をおッ取ッ
て走り出で　壯『供養に明日のことおるに早くも今日來ておめくとに何事
である去來此の棒を喰ッて行け』と片端よりおッ拂いんと致しますれば足
早き乞食共に皆お雲を霞と逃げ去りましたるに跡に殘りしに一休唯だ一
人足の遲きが爲め無慘や散々に打ちおぐられ剩へ壯丁等の土足で蹈倒さ
れましたが漸く辛き生命を拾ひ喘へぎ〳〵呆々の体にて紫野まで逃げ歸
られましたが一休心中竊かに左りとに餘りと云へば餘りに無慈悲のこと
であると思いれましたるに鱗て其日も暮れ果て明日にもおりますれば

休ハ昨日の狀態より引替へたる今日の服裝ハ俄かよ天地一變致され新たよ
沐浴を致されまして大德寺よ藏する法衣を振はれ美を盡して着されまし
たが七丈の御袈裟ハ裾長よ引き掛けられ金襴交りよ取裝はれ近邊赫灼ま
で天晴盛裝の出立よて彼の金滿家の許へ到られますれば檀那大いよ打ち
喜ばれまして去來是れへと佛前へ請じましたが一休如何してか謙遜して
進み給ハず宣ひまするやうハ 一『否や其れまでハ參りますまい愚僧ハ此
處よて事足り申すことである』と石臼の如く蟠まりまして尻よ根が生へま
したか少しも搖動ぎませぬゆゑ旦那ハ頻りと悶へられまして 旦『是れハ
抑も和尚殿よハ何事よておはしまするかアラ忌はしや此處ハ下郎の蹤よ
てござる去來疾く此方へ通られ候へ』と手を取ッて引かれますれバ一休申
しまするやうハ 一『左樣强ひて御齋賜ふとあらば願くハ此の法衣よ料供
賜はりたきことで愚僧が賜はるべき理由はおきことでござる』とて一首の
狂歌を詠まれましたが其狂歌よ

わらばくの三十棒を當てられて
身よ晴れ若かたる蟬の脫け殼

と斯くおん仕られまして其法衣を脫ぎ棄てゝ歸へられました是れハ昨日
の乞食も今日の愚僧も同じ火と水で作られし一人の人間であるよ昨日ハ
棒を喰へ今日ハ齋を賜はると云ふことと是れ偏へよ此の法衣の彩色が光る
からであるとの意でござりますが世の中の事ハ大概是んなものでござり
ます

○一休秘密の玉手箱を開く

一休ハ大慈大悲の江海心を有されたことでござりましたが茲よ都よ口癖
の妙藥を覺えて最と秘密よ致されて居りました此事遂よ一休和尚の聞く
所とおられましたが如何よもして聞きたきことであると思召されまして
或る一日の事其家よ尋ね行かれ主人よ面會して申されまするやうハ 一
偖て愚僧のお尋ね申上げましたるハ餘の儀よてもござりませぬが承りま

すれば此の家よりの口痹の妙藥がござる由其れゆえ遙々是れまでの尋ね公
りし次第でありまするがアハレ願くは此の愚僧よ御相傳下されたく偏へ
よ懇願りますと述べますれば主人の委細承って云やう　主『是れも亦
何かと思へば彼の妙藥のことでござるか此の妙藥は我家代々一子相傳の
秘法よてひされば他よ漏らさんことは思ひも寄らぬことでござるが御僧
とござらばさうも否び難きことよてあれば深き御執心よてわたらせ給へ
ば敎へ申さん程よ口傳せまじき趣き起請を書かせられよ』と一休は之を聞
いて更らよ申しまするやうは　一『誓文とありては我身の一世一代のこと

よて中々よ重きことよてござるが愚僧よ敎へて下さるとあらば委細心得
てござると墨黑々と認めて遣はされましたが左らばとて主人も其妙藥の
秘法を授けられました一休は能くも之を覽にて歸られましたが我が庵室
よ歸りて後ち冷笑ッて獨り自ら謂ッて言ひまするやうは嗚呼斯る人の扶
桑よ藥とあるものを秘藏して獨りのみ其効能よ與からんとするは偖て〜

慈悲の薄きことである若し之を世間に公にするならば开は必らず大いな
る功益を與ふることである开は寧ろ其人一人の誓文に背くとも世上の爲
めとしならば我が望みは足れることである左らば札を書き立てゝ知らせ
んと聽て左の如く書いて立られました

一口痹の藥の事　若し口痹を病む者あれば必ず密柑の核を黑燒にして
飲むべし治ること速かにして再び起る事なし是れ奇代の妙藥なり

斯樣に明々地に打ちまけて世間へ知らせまするとの之を聞いたる傳授者
腹立つまいか腹立つまいものか口を尖らし肩を聳やかし烈火の如くなッ
て怒られ早々紫野に走り行かれ一休和尚を尋ね出して云ふやうは　或『如
何に御坊よ御坊は破戒無慚の賣僧にてはござらぬか何とて堅く誓言を立
て口傳せまじと誓はれたる我が大事の大事の秘藥を漏らせしぞ剩へ高札
まで立てられて萬人の目に觸るゝことは是れ抑も如何なる所以にてあるか
言語同斷のことである如何に申解あるか如何に〜』と責め付けますれば

差しもの一休も彼の人の勢ひが烈しければ這ん取ッていも喰るゝことかと思ひましたが有繋ん一休で少しも驚かず左あらぬ躰よて申すやうん

一『アラ事々しや何事を申さるゝかと思へば彼の妙薬の事でござるか就てん起請を書いたるも誠であるが又札を立てしも慥かよ我が爲せし業よ相違あいことでござる去りあがら彼の起請文よ口傳せまじき趣きを書きたれば开ん堅く守りて何人よも口づから傳へしことん絶にてせぬことであるが併し其起請よ札を立てしとん書かず此の札の趣きよ於てん誓し覺に更ら〳〵あければ札を書て立てたるよてござる是れ我が誤ちか否や〳〵決して我が誤ちよてんあい我れん少しも起請よ背きしことあければ決して神佛の罰も恐ろしくんあいことである』と空嘯いて居られますれば彼の者怒氣心頭よ達し攫みもかゝらんとしましたるが一休の申す言理の當然でありますれば如何ともあし難く遂よ茫然として立ち歸へられましたが如何さま一休よ一杯くんせられたることでござる

○一休の頓悟文字の解釋

胃弱の爲めでもござりませうか一休和尚常よ養生よとて粥を食して居りましたが或る一日の事長谷川與吉とて小賢しき男參り合せて彷相伴致されましたが其者一休よ向ッて問ふやうん　與『偖て和尚様よ聊かお尋ね申したきん只今彷徨走よ與かッて居る粥のことでござるが此のカユと申す文字ん兩脇よ弓を書き眞中よ米といふ字を書くん如何ある所以でござりまするか仔細もあることでござりませうが私の考へでん如何よとも不審のことでござる抑もカユと申すものん水の中へ米を入れゆるく柔かよ焚きたるものでござれば水篇よ米とか或ん食篇よ湯あどこそ書くべきものよて侍るに如何ある故よ兩弓の眞中へ米を書くものよてござるか其所以彷示しあれ』と云ふよ一休答へて云ふやうん　一『這ん亦何事のお尋ねかと思へば粥の字の御不審よてござるか抑も是れよん聊か所以のあることで昔し漢土よ伏羲神農の頃までん文字も充分よ定まらず米食あどの文字ん

ありましたが來た粥と云ふ文字のあらぬを如何にとも遺憾に思はれ或る一日の事伏起神農を始め諸聖賢が會せられまして偖てカユと云ふ文字は如何やうに作ッて宜しきやと何れも頭を傾けさま〳〵に思案をして見ましたが如何にとも考へ付かづ皆々困じ果て先づ〳〵カユにても焚いて食ふが宜しからんと之を焚いて食ひながら又更らに兎さま斯うさまに考へて見ましたが善い工夫も付かず中にも神農は困却の餘り手に持つ所の箸を戛哩器物の上に取落すが如くに置かれましたが噫な不思議や其椀の上に置いたる箸が丁度弓張月の如く眞中處にあッて二ッの弓を雙方から置いたやうに見ゑましたが其中には米がありまするゆゑ神農も偖てこそと雙の眉を開かれ両脇に弓を書き眞中に米を書いてカユとは讀ませたることで茲に始めて粥と云ふ文字は出來たことでござる』と申せば輿吉ハタと横手を拍ッて偖て云ふやうは　輿『偖も善き御解釋天晴の御辨でござります實は牽强附會のものとは思ひまするが何さま面白く可笑しきことで

其場頓才の程よい感心致します而たが待て雲時よ和尚樓其可笑しきよ付き又一ッの不審がござります其れい外でもござらぬ彼の笑ふと云ふ文字でござるが竹冠よ犬と云ふ字を書くい如何よとも不審のことでござる私の考へでいワフと云ふ文字い口篇よ廣るとか或い目篇よ皺おどゝこそ書くべきものと思ふよ左おくて竹冠よ犬と云ふ字を書くい這い抑も如何ある所以でござるかアハレ和尚樣の知識で御示し下されたし』と申せば一休莞爾として笑まれつゝ答へて申しまするよい　一『是れい又色々との質問是れも亦矢張り其時作くられたことでござるが諸聖賢寄り集ッて兎さま斯うさま考へ居まする所へ最と小さき犬が突然出で來られましたが而かも頭よ籠を冠り來ッて頻りとおどけ狂ひまするれば人々思いずドット笑ひ出されました是よ於てワフと云ふ文字い其籠の竹冠を取ッて之を犬の上よ冠らするが善いと偖ても笑と云ふ字が出來たことでござる』と云ふを聞き輿吉い大いよ感心て云ふやうい　輿『偖ても段々と所以を承れば最

と面白いことでござる』とあれば一休は此の機に乘じて更らに申すやうは

一『總じて文字と云ふものは一々能くも理に適へるものにてござるぞ今又其一例を擧げて示せば彼の日用に屢々遣ふ金と云ふ文字は殊に能く作られたるもので觀音經にも金銀瑠璃車琥珀などゝ七ツの寶を云ひ並べたる中にも第一番に金銀とある程の最と貴き寶であるが若しも之を持つべき人がおければ左程貴き寶とはおらぬことでござる因ッて人の云ふ字の下に主と云ふ字を書いて金と云ふ字に讀ませたることである何ンと驚服おことでのおいか』とあれば彼の與吉尤もと言ひ掛けたしたが此の男何か一本參りたく思ッて居る所でござりましたれば茲ぞと一休に向ッて云ふやうは『成程草書か行書で書くに人冠の下に主と云ふ字を書いてキンと讀まするこことでござりまするが眞書で書くと金とは斯樣に書きますれば主と云ふ字とは少し違ッて居りまするが這は抑も如何ある所以でござりまするかお說もあらば承りたいことでござる』と先づ一本和尙

を遣り込めたつもりで申しますること一休之を聞いて云ふやうは一『左れば其事であるが其不審は是非になくて叶はぬことである是れ第一の意の着け所である夫れ見られに世に一日もなくて叶はぬ最と大切の金である が若し之を主る人がシンでは身に附かず何の益にも立たぬことである偖て合點が參られたかナ』と申せば與『偖ても〳〵最と淺はかなる問ひを起して最とも深き一生の寶を得てござる』と大いに打ち喜びて我家に歸へられたと申します

○觀面の教誨

或日の事でありました早川治郎太夫と申す武士而かも少年血氣の勢ひをもて暴論をも吐く者一休の庵に參られて云ふやうは　治『和尙樣に人はどして善きものであるか將た惡しきものであるか开は其趣意にも出ることであらうと思はれます故に若し殺すの理なければ好し假令一人たりとも殺してはならぬことで之を殺さば惡逆無道の名は得こそ免かれぬことで

あるが若し之を殺して差支なき道理あれば好し假令千萬人を屠り殺しするとも敢て怪しうはないことでござらうと思はれますが和尚殿此の理如何でござるか』とあれば一休之れを聞いて云ふやうは 一『是れは亦何かと思へば殺生のことであるか既に殺生とありては御佛も五戒の一ッに置かれて深く戒められたことで抑も殺生と云ふものは諸々の罪の根本であれば其之を殺すの道理があらうとなからうと其れには關係らず何れとも之を殺さゝるの仁あるに若くはないことである又此の世の中に人を殺して善いと云ふ道理があらう筈もないことである凡そ生きとし生けるもの其生命を惜まぬはないとで好しや蚤や虱又は蟻螻の如き微々昆蟲と雖ども其生命の貴き心は敢て人と異なることはないことであれば先づ〳〵も生物は殺さぬが宜しいことであると最と懇切に說いて聞かせましたが彼の男未だ中々合點せず更らに云ひまするやうは 治『否や〳〵さう區別のないは却て惡いこと斯くては牛の糞も味噌も一所になッてしまふこ

とでござる若し之を殺しても善き條理のあらば人を殺すも決して差支のないことである例へば主人の命もあり或は知己朋友等より頼まれて是非おく人を殺すこともあり此等の場合より於て若しも人を殺すのが惡くんば其人より命じ人を頼みたる者こそ罪もあれ咎もあれ我れは全く罪咎はないことであると利口振りよも鼻うごめかして申しますれば一休聞きも敢ず其言葉の未た終らざるより 一『其方彼の柳より最と〳〵う雪の積りて枝も重げなるまじくや』と依頼すれば彼の男 或『委細かしこまッてござる』と直ちにやをら立ち行き柳の小蔭より立寄るよと見にましたが柳の樹より手を掛け二振り三振り之を振ッて見ましたるより這は抑も如何より其落る雪は斑々として衣服の上より懸り孔明おらぬ身の遽かより鶴の裳を着され襟下おどより這入る雪は最と〻物冷かよして身より粟を生じましたれば是れは思ひ袖打ち拂ひ襟搔き落しおどして居りまするとと一休和尚透さず申しますやうは 一

『其方何とて雪を拂らいるゝよや其雪ハ素と拙僧が依頼申したるおれバ拙僧よこそ懸るべきよ左ハおく却て其方よ掛れるハ抑も如何なる所以であるか這ハ亦一ッの不審である』と云へバ彼の男ハタと行當り復た兎斯の言葉もおく是れまで動もすれバ殺生を事としましたが是れより殺生の事もフッと止みました如何さま一休和尚親面の教誨よ服して斯くハ善人よおッたことでございます

○一休の妙讃他僧を驚かす

茲よ一休和尚と均しき沙門のございましたが聊か給を畫くことも拙から で自ら我が畫像を書き寫されましたが己が慾目よ如何よも善く出來たことであると最と嬉しく思ハれ或る一日の事一休の庵室よ持ち行きて見せばやと思ひ急き紫野よ行かれ一休よ對面して之を見せました定めて一休も之を見て感心することであらうと思ッて居りましたるよ案よ相違して一休一目之を見ると 一『噫おゝ醜しや』と言ひつゝ目を閉ぢて大いよ嘲けりますれバ彼の僧大いよ腹を立てゝ 或『是れハしたり一休和尚とも覺え申さぬことでハございらぬか何等の言葉もおく唯だ嘲み笑ふとハ如何よも無禮のことでハございらぬか』と一休之を聞いて兎斯の挨拶もおく彼の畫像を取ッて庭の上よ投げ付け軈て庭草履を穿ち行かれましたが散々よ之を蹂躙られまして揚句の果てよ一筆サラ〳〵と書かれました文句よ

世を捨てゝ形を捨てず鬚髮を切りて煩惱を切らず假りよ畫像を書きて
己が惡業をかづけ置く畫像大きなる迷惑なり

と墨黑々と賛を書いて渡されますれバ彼の沙門も熟々と感じたと見にして軈て懐中してスゴ〳〵と歸へられました

○虎の威を假る狐の智恵

是れハ伊蘇普物語おゝもある話でありますが一休の話にも之れありと見えまして長く話し傳へられてありまする或日の事一人不圖しも一休の草庵へ尋ね來られまして云ふやうハ 或『我等ことハ全くの無學文盲で

ござれば少し六ヶ敷きことゝ聞いても耳よ留り居らず何方よか煙の如く消失せてしまふことでござれば何があチト面白く可笑しく耳の底よ留り居りさうなお話もござらば一ッ話して下さりませ』と請ひますれば一休申すよゝ　『ハヽア左樣でござるか并ゝ亦最と易きことである昔し唐土よて一日虎が勢ひ猛く狐を追掛け到々之を追詰め將さよ利爪を引ッ掛け之を啖ゝんと致しますると此時狐ゝ忽ち一計を運らし虎よ向ッて云ふやうゝオイ〳〵虎公々々我れに對して無禮をするおよ先づ能く聞かれよ今日より遠かよ天命が下ッて乃公を百獸の王よおれと最と嚴かある仰付けがあッたことである故よ汝今日よりゝ却て我が命よ服すべきことであるよ若しも我れに對して無禮もあらば忽ち天罰當り汝が命も滅することである若し猶ほ之を疑ゝゝ汝我が尻より附いて供して來り見よ諸々の獸我れを見て必ず恐れおのゝき逃げ隱るゝことである如何よ虎公よ我が供して來るつもりゝあいか』と最と横柄よも一生の膽力を振ッて勇ましくも言ひ

放たれますれば虎は是れは不思議なことであると思ひ左らば行かうよとて狐の尻に附いてノソ〳〵行きまするとと成程奇妙や諸々の獸今しも此の狐の先きに立ッて來るを見て皆な散り〳〵に逃げ隱れ恐れおのゝき平れ伏してありますれば虎は誠に諸々の獸が狐に恐れを爲すと思ひ偖ても不思議のことであると天命を重んじ是れより狐に隨ッたさうでござるが是れは敢て諸々の獸が狐を恐れたのではない尻から來る虎を怖れたので是れが狐の狡猾智意でござる實に大いなる化けやうでござる而て亦此の狐は世に最も多きものでござれば其方なども化されぬやう用心あるべきことである』との物語に彼の者も亦面白がりて立歸られました

○幽靈問答　一休三寸舌頭に釋迦を弄す

一日或人一休に問ふて申するやうは　或『聞く役に據れば人は死して躰はなくなり果つるとも魂は此の世に留る由でござるが若しも左ることならば假令其躰はなくとも魂だにあらば其人は其儘此の娑婆に遺り居て物語

りなどもあるべき筈でござる何故なれば人として魂は其本領でござれば此の本領の遺ッたる人の物語りなどあるべきは固より其所でござる起るに魂の尋常の物語りなど聞いたことなきは一ッの不思議でござる且つ又一方より考へて見まするとと人は地獄或は極樂へ行いて來世の苦樂がある一と云ふが若しも魂が行かねば其苦樂も感せぬことでござらう躰は葬りたる墓地に何時までもあるものにて嘗て地獄極樂へ行いたと云ふ話も聞かぬことであるとすれば地獄極樂へ行くと云ふは魂の願ひで躰の謂ひでは

ござらぬ然らば此の婆婆に魂の留り居る筈もないことである若し猶は婆婆に留り居るとしますれば汗は魂が二ッなければならぬことでござる一人の魂が二ッあらう筈もないとである既に一ッとすれば又疑かあることでござる汗は亦何故と申すに彼の極樂に行いて佛に成ッたる者は其極樂の蓮の臺の快樂が數々多くて此の塵埃の婆婆に來やうなどゝは露毛程も思はぬことモウ歸りなどは全く打ち忘れてしまふことでございませう又彼

の地獄へ行きし者おどゝ日夜の呵責よ魂の骨身ゝ碎かれ手足ゝ疲れ果て申々此の婆婆よ來る間隙おどゝおきてことでござらうよ世よ幽靈おどゝして死したる者の來りて樣々の事を言ひ並べて怨ずる等の事を聚るが這ゝ抑も如何おる故よや和尚殿の知識で伺示し下され』と云へゞ一休之を聞いて申すやうゝ　『左れゝ其事よて候へ我れ未だ死して見ねゞ其事ゝ委しくも存じ申さぬことでござる我れも若き時チト談義おど聞きたることの侍るが眞か僞か知らぬ魂と云ふものがあッて佛とも成り鬼とも成るげよ候が其くせものが閻魔王とやらんの前よて公事奉行の手よ渡り婆婆よて作りし罪を鐵とか銅とかの帳とやらんよ附けて置き之を牛頭馬頭等の獄卒どもの鬼よ見せて誰れ〳〵ゝ是れ〳〵の犯罪であれゞ急ぎ此の帳簿よ由りて呵責せよと云ふ命が下るとか申すことで是れから赤青等色々の鬼共が之を受取りて樣々の責めよ逢ゝすのであるさうでがおござる而して其婆よて犯せし數々の罪ほど之を責ると云のでござるが汗ゝ亦何うして之

を責むるか中々よ責め盡されやうとも思へぬことである先づ聞き給へ
れよ拙僧此頃一首遣つて除けました其狂歌へ斯樣でござる

作り置く罪が須彌ほどあるあらば
閻魔の帳よ附けどころあし

と斯う作つた狂歌で見れば鬼と云ふ者も實へ鈍物である釋迦が一の經文
へ皆お嘘八百をも打越え嘘八萬の皮をもてかためたものでござる而して
有るかと云へば無しと說き又無きかと云へば有ると說く實よ顏憎くの俘
坊でござる拙僧又一首ござる

釋迦と云ふいたづら者が世よ出でゝ

多くの人を迷へするかお

と斯く出來ましてござる如何でござるかと云へば彼の者も亦大いに感よ
よりましたさうでござる如何さま能く悟り開ける問答でございます

○四百四病外貧病の治療

或處よ能勢小作と云ふ者がありましたが至つて狡黠ある男でありました
併し狡黠ある者も時よ取れば困ることもあるもので此の狡黠男或る年の
十二月廿七八日と云ふ愈々暮れの推詰りよありて是までの借金の口々よ
り追々と責め掛けられ如何よとも首も廻ぬやうよありました左れば此の
小作如何よとかして此の暮の火の車を廻し巧みよ切つて除けたいと色々
と工夫して又新らたなる借口を尋ね廻りましたが何がさて暮の推詰りお
れば何人も皆お同じく金の足の急がしき時でありましたれば誰れあつて
我れ貸さうと云ふ者もおく有繋狡黠的の小作も殆々困じ果て如何へせよ
じと兎さか斯さま考へて見ましたが善い考へも付かおんだことでありま
したが不圖しも思へば粟田口邊よ彦八とて甚だ富み榮えたる町人のある
ことを思ひ付きましたれば先づ是れへと尋ね行き段々と事情を述べ此の
暮の急場を救ひ下さるやう一時金借りたき趣きを述べましたるよ此彦八
と云へるゝ大の客嗇家で己れが口よ食ふものですら勿体おくて思ふやう

よゝ食ふことも出來ぬもので親類よさへ一文も貸したことのおきものゝ
れゞ況してや他の小作よ金貸さうおもゝゝゝ夢よも思はれぬことで小作如
何よ口説くとも彦八頑乎として少しも取合ひませぬゆゑ小作も今ゝ早や
是れまでゝあると开が歸るさよ一首の狂歌を口吟まれて行きました

寶ともおらぬ財ゝ彦八が
持ちたる金ゝ我身きん玉

と斯くおん詠み遺されて歸へられましたが此時或人小作よ向ッて云ふや
うゝ　或『是れ〳〵小作殿其やうよお困りおらゞ何ゝ兎もあれ一休和尚の
許へ參ッて願ッて見たらゞ何うであるか和尚ゝ最と〳〵慈悲深き者であ
れゞ少しゝ用立ッても呉れることであらう殊よ其方の善き時ゝ和尚の爲
めよ相應の用事も適へ置きたる事で其方の事ゝ和尚も亦蔭おから懇ろよ
仰せられて居たことでもあれゞ先づ〳〵和尚の草庵へ行いて見るが宜し
いことである』と頻りに勸むれゞ小作も亦　小『成程其れゝ宜しからう仰せ

に從ひ和尚の許へ行きて見ませう』とて軈て和尚の許へ行かれましたる折
り能く居合せて早速と對面されて先づ四方の話二ッ三ッ致されましたが
小作は談話の潮合を見計ひまして云ふやうは　小『如何に和尚樣よ私が豫
ての持病和尚樣にも御存の事でございませうが此頃は又頻りに差起りま
したれば醫者の診察を請ひましたるに醫者の申すには开は是れ四百四病
外の病氣で醫者にも見えねば我等の手際には行かぬことである多分是れ
は貧の病と云ふもので其藥は金銀丸と云ふ丸藥を服すれば即時に治する
ことであるが其金銀丸は拙者の藥室にはなき程に他へ行きて求められよ
と斯樣に申されました和尚樣其妙藥御所持ならば一包御報謝與かりたい
ものでございるが如何でありませうか鬼の目に涙をハラ〳〵とこぼして申
されますれば一休之を聞いて云ふやうは　一『是れは亦何かと思へば四百
四病外の病氣でございるが其疾病は年々二度ヅヽ起る者で先づ秋は七月の
中旬に起りて遠國にまで流行ることである次ぎは丁度十二月の今頃流行

ることであるが其方も亦其流行病に傳染れましたと夫れは〳〵さぞ難儀のことでござらう就ては其妙藥患僧澤山も所持致さぬが聊か所持もあれば進せませうとてやをら身を起して奥に入り銀一包取出されまして斉が上紙に養命補身丸と書いて與られましたが一休更らに云ふやうは病氣若し再發のことありとも其時は愚僧最早知り申さず疾く歸へられ候へとあれば小作莞爾として笑れつゝ推戴いて歸へられました

○正月元日一休闍黎の年賀

一休と云ふ和尚も隨分ひよろげた人物であります抑も正月元日より二日三日と此の三日は元三と唱へて歳の始め月の始め日の始めでござれば一天四海の人々其貴きも賤きも將た賢きも愚かなるも皆な一盃の屠蘇をもて春を迎へ喜び祝はざるはなきことでござる誠に昨日に變りたるにはでざりますまいか空天の氣色も何となう長閑にして霞わたりてござる又家家の門には松竹を樹て並べ〆縄を引廻らしてござる顧みますれば昨日の

夜半過ぐる頃までは人々の門なぞ打ち叩かれまして何事にかあらんと思はるゝ程事々しくも足を空にして馳廻られましたるに一夜明けますれば俄然天地一變して昨日に引替へたる人の心は皆な閑々として門に樹て並べたる松竹の間にはチウ〳〵雀の初物語りもあり又童男の打揚る紙鳶は靜けき空氣の中に飄々として空に揚りてウナりますれば童女の玩弄ぶ羽根の音はカチリ〳〵と耳に清み聞ゑて復た再び大晦日なぞの來べしとは露思はぬことで人々皆な野邊の小松に千代萬世を祝ひ初めまして今時死ぬべしとも知らず萬の事を忌み恐れ朝の露に名利を貪り夕の陽に子孫を愛し宛然蟻が茶臼を打廻る如くに同じ事をグル〳〵と五百七十年七曲りと祝ひまして世を秋風の心は露ちりほぞもなきは總ての人の常態でござりますす或る一年の元日一休此の躰を見て心甚だ可笑しく思召され誠に愚かなる朝顔の日陰待つ間も盛り久しき花と眺め日影の青天に羽を振ひて樂ひ間もなき世の中に糞に箔塗る正月とは唯だ時の間の煙となること

である左るを知らで野邊の小松よ千代萬世を祝ひ壽くとゝ返すく〳〵も愚かあることであるイデヤ人々よ一驚を喫せしめ呉んものと纏て墓地へ行いて一ツの髑髏を拾ひ來られましたが之を程喜き竹の先きよ貫きまして而かも正月元日の早朝よ洛中よ出でられまして彼の髑髏を家々の門の口へ差出され　一『ソラ〳〵油斷ゝあるまいぞおッつけ此の如くであらうぞと言ひつゝ又大路へ出でましてゝ　一『皆々遠からず是れ此の通り浮用心〳〵と歩き廻りますれゞ人々之を見て是れゝ元日早々忌ゝしきことであると往來の人ゝ走り逃げ又家々よてゝ門の戸差し込めて居られました今日よ至るまで正月元日門の戸差込め置きまするゝ之れが爲めであるさうでござる所ゝ偖て『此日或人一休の今しも髑髏を持ッて歩き巡るよ逢ゝれて云ふやうゝ　或『是れゝ〳〵和尚殿よゝ最と珍らしき浮年始よてでざる成程浮用心とゝ思ふのことでござる左れど髑髏ゝナト合點參らぬことでござる所し假令此の髑髏ゝお持ちよあらぬとも人々皆あ終よ此の如

くあることゝゝ今更ら言ゝずもがあ疾よ知られて居ることで今此の髑髏を見たが爲めよ新たよ知る事よてもでざらぬ左るを人々の祝ふ元日よ人情よ違ひ習慣よ背きて忌々しき髑髏を持ち歩くとゝ如何よとも合點行かぬことでござる』と申せゞ一休之を聞いて云ふやうゝ　一『否やとよ我れも亦此の元日を祝ふて此の髑髏をゞ持ち來れることである世よ目出度きものが數多くあるとも此の髑髏ほど目出度きものゝあきことである寶よや昔し天照太神岩戸の開き給ひしより世よも斯程目出度きものゝあいことでござる先づ一首聞き給へ

僧くびあき此髑髏穴賢しこ
　目出度くかしこと是れよりゝあし

との一首ゝ如何でござる人々の目出たる穴のみ殘りし髑髏ゝ是れ豈よ目出度きことよてゝでざらぬか是れ即ち目が出たるよて目出度きことである』と申せゞ其間ひつる者ゝ勿論の事开が傍へ聽きせし者も皆あ之を聞き

偖ても賢き聖かな活禪師とゝ此の和尚樣のことであると感じ入ッたと申しまする又此時の事でありましたが左まてもあらぬか开ゝ定かありませぬが茲ま一休和尚の和歌として一首有名なるものがあります序でながら一寸お話し申します其和歌ま

門松ゝ迷途の旅の一里塚　目出度くもあり目出度くもあし

と斯くなん詠ぜられてござる如何さま深くも悟れる和歌で最とも尊くてござります

○一休破戒の頓智

一休和尚ゝ其身僧侶の精淨の體を持ちながら性來蛸が至ッて好物でござりましたが或一日最と徒然の餘り小介ま命じて蛸を買ひま遣ゝされましたるま折節心ざす魚屋ま蛸がござりませぬゆゑ彼の小介此處彼處と尋ね廻り甚く時が遲れましたる程ま一休ゝ最と待ちわびたるまゝ

此たびゝ急ぐと云ふま長袖の

蛸の入道みちの遲さよ

と斯くなん仕りて今かく〳〵と踵を引いて待ち居たる所へ彼の小介蛸四五はい買ひもて來られますれば一休之を見て大いま打ち喜べれ直ちま料理ま着手致さうと思ひましたが否や待て暇時此の蛸此儘ムザ〳〵食んも最と無慘の事である我れゝ出家の職分イデヤ引導をわたして呉んずと

千手觀音蛸手多　斬懸ニ袖酢一拜ニ如何一
作州一味天然別　他禁戒任ニ老釋迦一

と斯くなん引導が濟みますれば一休ゝヤレ引導ゝ濟みたるぞイデ此の上ゝ火葬ま せんか將た土葬にせんか否やく〳〵水葬ま せよと手取り足取り八本の手に〳〵ま沐浴させて袖酢を掛けまして是れゝ入道坊主の共食ひ近頃珍らし甘やとひたものま食されましたが軈て食ひ終ッて口を拭ひ何食ゝぬ顏して或る旦那方へ參られましたるま酒を薦められ餘り多く飲みま

したので處あらぬ小間物見世を明けました明けて悔しき腹の玉手箱より出でたるものも皆あ蛸で猶は未だ小猪口の附いたる足あるあ蛸ゝ消化せずよゾロ〳〵と出で來りましたれば何がさて驚くまいものか愕くまいか旦那を始め家人皆々愕然として大いよ打ち驚かれましたが中よも旦那ゝ一休よ向ッて云ふやうゝ　旦『是れゝ〳〵和尚樣よゝ日頃佛のやうよ思ひましたるよ品もあらうよ蛸を食され候と見にてござる偖ても〳〵人ゝ見掛けよ由らぬ腥坊でゝござらぬかィャハヤ言語同斷のことである』と打ち笑ひますれば家人も共々之を笑ひましたれども一休毫も騷ぐの氣色おく從容左りげあく申しまするやうゝ　一『否や何よ我れゝ蛸を食ッた覺にゝ更ら〳〵あいことである今現よ斯う出て見れば這も亦詮方あいやうであるが併し食ゝぬものゝ何處までも食ゝぬことである』とあるに旦那更らよ莞爾として云ふやうゝ　旦『否や是れゝ執拗あ法坊である哉今現よ面り是れ此の通り吐出したる蛸を食ゝぬとゝ偖て〳〵聞えぬ法坊である』と

愈々笑ひますれば一休更らよ云ひまするやうゝ　一『卿等ゝ物の道理を辨へぬものである哉好し假令今口より蛸が出でたりとも決して食ゝぬと云ふ證據を見せて遣らうと申しあがら人々を引連れて百萬遍の處よ行き善導法然の畫像を見せて云ふよゝ　一『アレ〳〵見られよ善導敢て阿彌陀を食ひしことゝあきことであらうに口より三尊を吐出されてあるでゝあいか善導大師でさへ食ゝぬ物の口より出づるを制し難ければ況してや愚僧の如き者食ゝざる蛸の出づるも亦詮方あきことでゝあいか』と仰せられますれば皆あ横手を拍ちて偖ても頓智ある法返答であると大いよ感服せられましたさうでござる

○一休の頓才五百羅漢の名を言當つ

如何ある智者も不圖した所で窮することでありするが一休の頓才ゝ中々よ窮せぬことでございました或寺で新たよ五百羅漢を作られ堂供養を致されましたるよ貴賤老若男女の見物ゝ八方より群聚しまして其賑ひゝ中

中より大層おことでござりました斯くて法事も止みて後ち其寺の僧彼の羅漢の前より香花おゝ取りいけ居りましたるより此時最とこびたる二三人の俗客羅漢を見物して居りましたが他の見物人ゝ追々と退き歸られました此の二三人ゝ中々より歸らず中より也一人ゝ熟々と羅漢を眺め居ましたが傍らの僧より向ッて問へるやうゝ　或『卒爾おがら傍問ひ參らするが素と五百羅漢より一々名こそござりませうより拙者未だ之を知り申さず御僧ゝお職掌がら定めて御存のことでがおござりませうチト數多くてお氣の毒より侍りまするが何うか御示しの程願ひたいことである』と最と懇ろ申しますれゝ生憎や此の僧ゝ正面おる三尊の外ゝ一佛をも名を知らぬことでありましたが僧侶の身として之を知らぬとも言ひ兼ね這ゝ大變お質問を受けたことである僧侶の生耻堪らぬことであると何とも言ゝず唯だ赤面したるまゝ方丈の方指してスタコラ逃げ行きました是れ如何おる僧と雖ども五百羅漢の名を悉く皆お知ッて居る者ゝおいことでござれゝ強ち此の僧の

みの耻辱よていおいことでござるが偖てゝ僧侶の身として三尊の外ゝ其名を知ぬとも言ひ兼ねて逃出したるも人情左ることでがおござりませう然るより幸ひおるゝ折節一休和尚此の寺より來て居られましたが今しも一人の僧の慌しく逃げ來るを見て　一『何事よてかある』と問へゝ彼の僧答へて　僧『實ゝ是れ〳〵斯う只今或る俗の爲めより五百羅漢の名を一々問ひたてられましたるより耻かしや愚僧三尊の外ゝ一も之を知り申さず因ッて斯くゝ逃げ來りしことである』と申すより一休之を聞いて更らより云ふやうゝ　一　入らざる凡俗の咎め立てゝある哉差して藝よもおらぬ五百羅漢の名誰れか之を覺に居るべきや左れど望みとあらゝ言ッて聞かさう』と直ちより羅漢堂へ參られ彼の嚮きより五百羅漢の名を問ひつる者を捕へて云ふやう　一　其方ゝ今五百羅漢の名をもて是れおる僧を苦めたさうよでござるが汝ゝ近頃小賢しき質問であるイデ其儀おらゝ我れ之を言ひ聞かさん程より一々問ふて見給ゝれよ』とあれゝ彼の俗　或『然らゝ御問ひ申しませう先づ其中央

なるは誰れにてござるか　一「釋迦牟尼」　或「左傍は何と申さるゝか」　一「加葉」　或「右は如何なる佛ぞ」　一「阿難」　或「偖て其次ぎは如何」　一「南無さなんど」　或「然らば其亞ぎは如何」　一「すきやとや」　或「其又次ぎは如何」　一「ならこちた」と恰も立板に水を流すが如く毫も澁滯なく滔々一瀉千里の勢ひをもて凡よそ百羅漢はどの名を答ひ言ひましたれば彼の俗人大いに打ち驚かれまして此の分にては五百羅漢は偖て置き千萬の羅漢ありとも必ず答へることであらうと舌を捲いて閉口され一休に向ッて云ふやうは　或「是れは〳〵和尚殿には御記臆の強きこと閉口の至りでござる去るにても五百羅漢の御名御知り覺ゑの段敬服の至りでござりますと大閉口致されましたが何ぞ知らん一休とても五百羅漢の名一々知りたるにはありませぬが是れは一休の才で蓮華呪の文句をもて一々答へたるものならんとは左れど彼の俗人素より五百羅漢の名を知りたるにはありませぬゆゑ开は全く眞の名と覺えて敬服したことでござる左れば此時一休和尚には莞爾

として笑はせ給へて申しまするやうは　一「我れ幼少の時より蓮華經の一卷ばかりは暗誦してあれば更らに困難とも覺ゑぬことである其方復た再び其次ぎを問はんや如何であるかと云へば彼の俗人始めて氣が着き今更ら我身の不學を耻入り早々に逃げ去りましてござる跡にても皆な此事を語り合ひて偖ても一休禪師には苟めの質問にも窮せず時に取ッての頓才敬服のことであると皆々深く感じたそうでござります

○見猿聞猿言猿の三猿奇談

或寺の門の破風に三疋の猿を作り付けてありましたが一疋の猿は両手をもて目を塞ぎ居り又一疋の猿は両手をもて耳を塞ぎ居ました偖て又一疋の猿は両手をもて口を掩ふて居りました或時の事でござりました三人連れの男が此の門前に參られまして此の見まい聞くまい語るまいの三猿を見て开は抑も如何なる所以であらうかと兎さま斯さまに考へて居りましたが何がさて素となき智慧は如何に絞ッても其智惠の出づべき所以はな

きことで終よ何とも合點行かず唯だ茫然として佇立して居りまするとて度折りも折りとて一休和尚が通り掛って同じく立ち寄りて之を見られまし たが何とも別かず唯だ莞爾と笑ひ點頭きて行き過ぎられました之を見たる三人の中丌が一人の申すやう『我等先刻より段々と此の三疋の猿の事を評議して來たが何とも合點行かず如何よも遺憾よ思ふ折節只今此處よ來時ありて打ち過ぎられた出家の何とも別かず點頭きて行かれたるを定めて合點したることであらうイデ是れより追蒐け行き其仔細を尋ね見んことい如何であらう』と云へば餘の二人『其れも至極宜しからん』とて三人直よ追蒐け行き一休の法衣の袖を扣へて云ふやう『若し〳〵御坊よ聊か物尋ね申さん丌い外よてもござりませぬが只今彼の門前よある猿を御坊一覽ありて其儘點頭き笑ふて通られたるを定めて其見猿聞猿言猿の所以御承知のことであるまでござりませう斯う申す我々を無學文盲よて何の辨へもおき者でござれば丌アハレ願くは其仔細語り聞かされたしと請ひますれ

ば一休答へて云ふやうは　一『左ればである其猿の所以は拙僧も能くは知らぬことであるが去りながら何れも若き男子三人までも打ち揃ふてお尋ねあるを唯だ知らぬと云ふも餘り愛相のないことでござれば聊か愚僧の存じよりを申さんに先づ一首の和歌を聞き給はれよ斯うでござる

何事も見ざる言はざる聞かざるは
唯だ佛にも優るなりけり

と云ふ一首であるが如何でござると申し捨てゝ立去りますれば三人の者各々言ひ合へるやうは　三『偖ても〳〵御尤なる歌の意かな是れは我々の心得になくて叶はぬことである左るにても今の御坊は何者にてあるか定めて佛神の化現にてもあらう』と皆な一同に感じ入りて歸へられましたが丌が中に一人の云ふやうは『如何に各々方よ此歌の意をもて三人茲に今日より始め見ざる聞かざる言はざるの願を立ゝては如何でござると申せば皆な『是れは一段の思付きである至極贊成である』と直ちに其願の實行に

着手致されました折節遠寺の晩鐘がゴーンとかすかに鳴響ましたるに彼の聞かざるの願立てたる者之を聞いて思ひ出でられましたか忽ち一首の古歌を詠まれました

今日の日も命のうちに暮れにけり
明日もや聞かん入相の鐘

と斯くなん口吟まれますれば傍らに言はざるの願立てたる者の云ひまするやうは『如何に其方に其方は今聞かざるの願立てたるにあらずや左るに今しも晩鐘が鳴りて晩鐘の古歌を詠むと是れ其晩鐘を聞いたるにあらずや既に之を聞いたるとあらば其方は直ちに其願を破りたることではないか噫淺ましきことであると手を拍ちて笑ひまするとは彼の見ざるの願立てたる者熟々と二人の有様を見て云ふやうは『偖て〳〵両人は何をか聞き何をか言へるのである其方達はともに聞かざる見ざるの願立てたる者にてはなきか左るを其願立てたる舌の根未だ乾かざるに早くも之を破るとは

言語同断とや言はん將た笑止千萬とや云はん實に愚か極まッたことである』と言ひ咎めましたが何ぞ知らん此の者も亦畢竟前二人の有様を見たから之を言ひ咎めたるもので矢張り同じく其願を破ッたことでありまず蕊に至りて顧みれば彼の見ざる聞かざる言はざるの願を立たる三人は皆なを忽ちにして之を破ッて仕舞ッたことで如何にとも抱腹絶倒の話でありまず

今是れに就いて一條の話がございます或月の事山王の猿共集りて庚申待を致されましたが時に親猿の云ふやうは『汝等今夜は藝盡をして遊ぶが善いことである併し何時もの如く猿の木登り輕捷も古めかしきことであれば何がな面白き品を替へたる事をして樂むが善いことである』と云へば一疋の小猿倏ち両手をもて眼を塞ぎて見猿となりますれば他の一疋の小猿は又倏ち雙手にて耳を塞ぎて聞猿となられましたるに其餘の一疋の小猿又々両手をもて口を掩ひて言猿となられました親猿之を見て云やふ

うは　親『偖て〳〵能くも庚申待には出來たることである因ッて按ずるに世に云ふ所の庚申は神道にては猿田彦命を齋き祭るとし又佛法にては青面金剛とすることである抑も猿田彦と云ふ其名の緣に由ッて猿を使うることであるか开は兎まれ角まれ素と是れ神道のものにも佛法のものにもあらず即ち道家のものにて其所以は人の身には素と三尺蟲と云ふ虫があッて此の虫常に人の腹中にあッて能くも其善惡を知り庚申の夜には天帝へ告ぐ若しも之を告げられては天帝より咎めをも受け畢竟其人の不爲となることであれば庚申待をして寐ざれば此の虫も开を告ぐるに由なく其儘默下することであればとて是をもて庚申待をすることであるが开は別の事先づ甲兒汝が見猿と爲れるは何如』と問へば見猿が答へて申しまするやうは　見『左ればでござります抑も眼と云ふものは諸々の慾の媒で他の金銀寶贈を見ましては倏ち貪慾の念をも起し又仇女の艶色を見ましては倏ち淫慾の念をも起し遂には不義不道の究にも陷いることでござる實に

n身を誤つの基で常ゑ目ゑ觸るもの毎に惡念萌すゆゑ唯だ何事も見ざると爲ることである左れバ老子も五色ハ人の目を盲すとハ申されました是れ兒が見猿と爲る意でござります』と申せバ親猿之を聞き了ッて云ふやうn　親『偖て次ぎゑ乙兒汝が聞猿と爲れる意n何如』と問ひますれバ聞猿が答へて云ふやうn　聞『左れバ今兒が聞猿と爲る意と云ふn外でもござりませぬ物の聲耳ゑ入れバ忽ち心ゑ應ずることで我れを褒むる詞を聞いてn喜べしく思ひ我れを譏る言葉を聞いてn心ゑ怒りを生じ遂ゑ人を恨み他を咎め一朝の怒毒ゑ由ッて身を誤ることである又他人の好事を聞いてn何とあう羨ましくも思ふことで常ゑ無根無形の聲の爲めゑ惑さるゝと多きことでありまする其れゆゑ唯だ何事も聞かざるとおッて是非善惡の事總て之を耳へ入れざることである左れバ五音ハ人の耳を聾すると是れ亦老子の言でござる今兒が聞猿とおッたるn全く之れが爲めでござりまする』と申しました親猿又之を聞き更らゑ又云ひまするやうn　親『左らバ丙

兒汝が言猿と爲れる意ハ何如』と問ひますれバ言猿が答へて云ふやうハ『左れバ口ハ是れ禍の門で又舌ハ是れ身を斬るの刀でありますず抑も人の是非善惡を批評しますれバ惡しき者よハ忌憎まれ又善言とても其善を盡さゝれバ却て人の譏りハ得免れぬことで畢竟多言すれバ多敗することである左れバ昔し孔子が金人の背よ銘をし給ひし三緘の旨よも言を謹むことと申しますれバ世上の是非善惡の事に於て唯だ何事も言ハざるが善きと思ひ今兒ハ此の言猿よ爲ッたことでござります』と申せバ親猿一々皆お聞き了ッて更らよ申すやうハ『親』今汝等が言ふ所誠よ世よ處して人と交ハるの要道であるが併し未だ至極善を盡したものとハ云ハれぬことである成程一應眼ハ物を見るが職分又耳ハ聲を聞くが職分又口ハ言ふが其職分であるが併し其實ハ目よて見るよあらず又耳よて聞くよあらず又口よて言ふよあらず其目耳口ハホンノ借物で其本ハと云へバ其見るも聞くも又言ふも皆お心である左るを今汝等ハ唯だ其外よある目耳口の三ッのも

のゝみを塞いで却て其見聞言ふ心の大根を塞がざるハ實よ内を守る要道よ暗きことである若し能く此の見聞言ふ心の大根だよ塞ぎ意馬心猿を守らバ好し假令外よあるの目耳口ハ塞がぬとも所謂視れども見えず聽けども聞えぬことで又決して言ふの憂ひおきことである故よ堅く心の路を斷ッて其心の見猿聞猿言猿よ爲るが肝要のことである左るを唯だ徒らよ其外面よある目耳口のみを塞ぐとも其肝腎要おる心が開放しよてハ唯だ形ちばかり見猿聞猿言猿の狀よおッても眞の見ざる聞かざる言ハざるよハ爲られぬことで心の大路より見聞言ふ氣ハ通ふことである昔し或人平生學文したる書物を庭よ積んで軈て之を焚捨てんとしたるよ偶々一人の禪僧が通りかゝッて云ふやうハ其方ハ何として書物を焚捨んとハすることであるぞと問へバ彼人の答へて左れバ佛書ハ不淨を拭ふの紙屑で又儒書ハ聖人の詞の糟である我れ今までハ徒らよ文字の上よ於て道を求めたが顧みれバ是れ大いおる僻が事で今よ於て始めて覺むれバ文字の上よ道おき

ことを自得し玆ゝ之を焚捨んとする所であると云ふを聞き禪僧の云ふやうゝ是れゝ亦迂遠のことである其樣ゝ物荒々しく書物を焚捨てぬとも其方の腹中の書物を忘るが善いことである是れ豈ゝ近道でゝあいかと申したとか云ふが此等の意味を深く甘ひ知らゞ目耳口も敢て塞ぐゝしも及ぶぬことである何ゝと兒猿共此の意が合點行かれたかと最とも懇ゝ說き諭されますれゞ三疋の兒猿共言葉均しく云ふやうゝ　衆『然らゞ親猿殿ゝゝ何猿ゝ爲られ給ふことでございますか　親『左れゞである我れゝ何事も不思猿ゝあらうことである目ゝ節穴の如く耳ゝ木耳の如く口ゝ鰐口の如く皆あ其功用を失ッて始めて世を安穩ゝ渡らるゝことである』と云へゞ兒猿共皆あ感服されたさうでございます如何さま面白き話で彼の見まい聞くまい語るまいの三猿の意ゝ一休の歌でゝ猶ほ未だ能くゝ解らず今此の一條の話で始めて能く解ッたことでございませう因ッて聊か序での口頭で此の物語を致したことでございます

○金剛の正體一發の放屁の如し

一日或人一休和尙の庵室ゝ尋ね來られてさんとくの望を申しますれゞ一休ゝ之を聞いて云ふやう　一『汗ゝ最と易きことであるが其望みとあらゞ先づ金剛の正體を案じ出すが肝要あることである』とあるゝ彼の者の云ふやうゝ　或『ハヽア左樣でございるか其金剛の正體あらゞ敢て案ずるゝしも及ぶぬことでございる其金剛の正體とゝ取りも直さず我等の身體である何故とあらゞ我等の身體ゝ最と太く逞しく强壯であれゞ是れが即ち金剛の正體でゝございらぬか』と出放題ゝも口から出任せに申しますれゞ一休之を聞いて最と可笑しく思召され莞爾として笑れつゝ云ふやうゝ　一『否や〳〵左樣のものゝとてゝございらぬ抑も金剛の正體と申すゝ音あつて目ゝも見え ず手ゝも取らず火ゝも燒けず切つても切れず水ゝも濡れず又色ゝも染まず殆々何とも別らぬものであるが偖て然らゞ全くおきものかと云へゞ左るゝとてもおく其時ゝ觸れて亦あるものである是れを之れ金剛の正體とゝ

云ふことである合點が參つたかナ』とあれば彼の者之を聞いて云ふやうゝ

『偖ても六ヶ敷きものであるかあ斯う六ヶ敷くてゝ金剛の正体ゝ中々ゝ我等ゝゝ案じ出せぬことである』と一休ゝ別れを告げて門を出でられたが俄かゝ思付ける面色ゝてハタと手を拍ち門の邊より取ッて歸され一休ゝ向ッて云ふやう　『和尚様ゝ只今渺示されし金剛の正体漸く解りましてござる門前ゝて篤と合點して候ゝ其金剛の正体と云ふゝ外ゝてもおし开ゝ屁ゝてござると考へました何故と云ふゝ元來屁と云ふものゝ音ゝありあがらも目ゝも見えず手ゝも取られず火ゝも燒けず水ゝも溺れず刀ゝも切れず又色ゝも染まず如何ゝとも釋の解らぬものであるが偖て全くおいものであるかと云へば腹の加減でブー〳〵と幾ッでもあッて出るものでござる何ゝと和尚様是れが金剛の正体でゝござりませぬか』と最と自慢顔に申せば一休も最と可笑しく思ゝれて云ふやうゝ　『左れば夫れ〳〵其れが金剛の正体であるぞ其金剛の正体忘れまいぞよ』と申して復た大い

に笑はれたさうでござる如何さまにも面白き悟りでござります

○堪忍の方法

爰に或る初心の男がありましたが屢々一休の草庵に來られ色々と一休の話を聞いて行かれましたが一休は此の男を見る度毎に　『其方は兎角に短氣ものにて動もすれば間違を仕出し勝ちなれば隨分共に勘忍せられよと申に彼の男答へて云ふやうは　或『是れは〳〵　和尚様毎々御念の入ッた御諫言骨身に應へて覺え申してござる然る上は御諫言に從ひ堅く勘忍仕ることでござる左れば私無異無事に罷りありまするとき突然不意に惡漢が來ッて我が面に唾吐き掛けまするとも私は決して怒りませぬ唯だ其儘唾推拭ひて勘忍仕ることでござります和尚様御安心下さりませ』と申す

一休之を聞いて云ふやう　『否や其れは惡き勘忍のしやうである返す〳〵も其唾は決して拭ふてはならぬことであるぞ其方能く考へても見られよ素と人が唾を吐き掛けると云ふは何か怒る所があるからである左るを之

を推拭へゞ其唾吐き掛けたる者ゝ必ず思ふことである此奴乃公が吐き掛けた唾を拭ふと云ふことやある生意氣な奴であると又更らゞ怒ッて再び唾吐き掛けることである故ゞ其唾ゝ決して之を拭ふことなく唯だ自然のまゝゞ之を乾しつけ置き莞爾として笑み甘んじて之を受くるが宜しい左すれゞ彼の惡漢も張合抜けがして遂ゞゝ何となく立去るものである之を譬へて申さゞ人の謗を聞いても怒らず唾なぞ吐き掛けられても其儘拭ゝずゞ自然ゞ乾し付けて置くのゝ丁度原野で火を燃すやうなもので好し假令一時ゝ天を焦すの勢ひがあッても何も夫れから夫れと云ふ關係の物がなく火炎ゝ自然立消にゞなッて仕舞ふことでありまするぞ左るを人の謗を聞いて怒り之ゝ人の吐き掛けし唾を拭ひなぞするゝ丁度彼の春の蠶が繭を作るやうなもので自ら其絲ゞから纏れて开を避けんとすれゞ愈々益々身ゞ纏綿りて終ゞゝ其絲の爲めゞ身も害さるゝやうなものでござる茲の道理が解らゞ人の吐き掛けた唾ゝ先づ〳〵もて拭ゝぬが宜しいことで

ある且つや我れ何もせぬのに突然不意に來ッて唾なぞ吐き掛くる者は是れ決して尋常の者にてはない愚痴か狂人の寧そ蠅蟲も同樣な奴である彼の蠅と云ふ蟲は如何なる高位貴人の頭へも留りて糞なぞをひり掛くることと實に言語同斷の蟲であるが之れが爲め誰れも怒り狂ふ者もないことである左れば彼の故なく唾吐き掛くる者なぞは實に此の蠅である既に蠅とあらば何も怒ることもなく又其唾も拭はで其儘乾し付け置くも常のこととして勘忍せば腹も立たぬことでござると最と懇切に諭されますれば彼の者大いに感じて歸へられましてござる是れは素と唐の世に婁師德と云ふ人があつたが一日其弟に忍耐の事を敎へましたるに弟の云ふには　弟『若し人あつて我が面に唾吐き掛くることあるも我れは唯だ之を拭いて置くことである』と申したるに开が兄婁師德の云ふには　兄否や其れは否けぬ人汝が面に唾するは汝に怒る所あればこそ斯くは唾をも吐き掛けたることで若しも之を拭へば却て其意に逆らへ其怒を增すことであれば其唾

ん拭んず其儘自然ゑ乾かし置き唯だ何とおく笑ッて之を受くるが宜しいことである』と斯樣ゑ敎へられましてござるが今一休和尙の諫言ん此の慧師德の故事を知ッて應用されたことゝ見にられます又古歌ゑも

勘忍のある勘忍ん誰れもする
あらぬ堪忍するが堪忍

と斯くおん詠まれてあります如何さま善き心得の歌でありますが因ッて序でおがら婁師德の事と共ゑ併せて之をお話申すことでござります

○一休の洒落長大文字の揮毫

一休嘗て一日叡山ゑ登り山內の堂社を段々と打巡りつゝ拜み歩きましたるゑ山法師ども之を聞いて各々言合へるやうん一休ん隱れおき能書である今此處ゑ來りしこそ幸ひの事であれパィデ何がお書いて貰んんとて手ゑ〳〵硯紙おどを持ち來ッて賴みましたるゑ一休唯だ善し〳〵と首肯きて何とも割かぬ書を頻りゑスラ〳〵と書いて與へましたが一向ゑ解せぬ

ゑん一山の僧徒殆々閉口されてありました時ゑ一人が云ふゑん『一休和尙の書いたるものん必ず後々の寶と爲るものであるが併し斯う何とも解らぬ文句でん寶も亦寶と爲らぬことであれパ何がお最と解り易き文字を書いて貰んんん如何ゑ』とありましたるゑ开ん至極善き分別であると相談一決して开が中の老僧一人一休の前へ進み出でゝ申すやうん　僧『先刻より段々と書いて賜んりし書ん何れも一字も讀まれぬこと又餘りゑ語句も短くて何か物足らぬ心地も致されますれパ願くん此山の末代までの寶とおしたきことでござれパ最も讀み易き字を筆太ゑ大きく長く御書き下さるやう偏へゑ願ひます』と一休之を聞いて开ん最と易きことであるが併し其大文字を書く紙と筆んでざるか　僧『でざりますとも〳〵筆ん古へ大師の用ゐられたる七八尺の大筆がでざる又紙ん一山ゑ大勢居ることでざれパ遽かゑ何程ゑても繼ぎ申しませう程ゑ何分宜しく願ひ上げます』と申せパ　一『然らパ紙繼れよお望みの通り長々と大文字を書き且つ能く認め

るものを揮毫致すことであらう』　之を肯ひ侍つま程なく墨も摺れ紙も繼けましたが其紙の長きことは山の金堂の前より坂上の人家まで最と長々と繼がれましたる程に一休は　一『左れば夫れにて善し一筆揮ひ染ん』とて墨染の法衣を最と高々と褰げ彼の燕人張飛が使へる丈八の蛇矛にも均しき七八尺の大筆に墨をたッぷりと含ませやをら之を引ッ擔ぎ紙の頭に向ッて筆を落ずよと見えましたが其儘筆を引いて逸散に馳け走り不動坂まで一筋に墨を引かれて　一『如何に法師達よ讀めましたか』『僧否や何とも讀まれぬことでござる』とあるに此時一休は猶ほも筆に墨を繼れまして又不動坂より坂本までである紙の上を唯だ一筋に走り引きて引ッ張りながら

一『何うでござる法師達讀めたか〳〵』と頻に叫びますれば一山の僧徒驚くまいか〳〵皆な膽を潰して呆然れて云ふには　僧『是れは何うしても讀めぬことでござるが抑も是れは何と申す字でござりますかとあるに一休莞爾として笑れつゝ云ふやうは　一『是れは其樣に讀め難きものにてはご

さらぬ即ちあさきゆめみしのしの字である何ンと是れが法師達のお望みなる筆太に長々として且つ能く讀るものにてはござらぬか』とあれば皆な一同に夢を醒して偖ても和尚殿は聞きしに優る諧謔人でござる哉と咄ッと笑ひ興せられ其しの字の揮毫長く叡山の寶物として秘藏されたさうであるが今は果して如何になられましたか开を知るに由なきことでござる

○成佛問答　遁世者の閉口

都に或る一人の遁世者がありましたが一日一休の草庵へ尋ね行き初めてお目に懸りたき旨を申しましたるに折節一休は病氣にて此の間は何人にもお目に懸れぬことであれば兎角御用の事も重ねて御出下されたしと斷りますれば彼の遁世の法師重ねて申しまするやうは　法『御病氣の由开は御尤のことでござります併し一寸立ちながらにてもお目に懸りたきことでござれば何分宜しく御取次ぎ下されたし』と述べまする程に　小『小介委細かしこまッてござる』と早速と其旨を主人に告げますれば一休固より氣

の輕き者あれバ病氣を押して對面致されましたるゑ彼の法師の云ふやうハ　法『愚僧ハ都ゑある沙門ゑてござるが天台の法門をもかたの如とくゑハ一通り學びてござるゑ和尚殿ゑ對し聊か不審のあゞて問ひまつりたきことのござる　一『汗ハ如何ある不審ゑてござるか拙僧ハ至ッて無學短才の者ゑて實ハいろはの講釋もチト六ケ敷き程のべら坊と申す坊主ゑてござれバ其不審の御問ひゑ答へんことハ中々ゑ思ひも寄らぬことでござる　法『汗ハ亦餘り御謙遜の事でござる愚僧が問ひまつりたきハ餘の儀ゑてハも候ハず如何ある折りゑ草木ハ成佛さるゝものゑてござるか　一『草木成佛よりハ先づ汝が成佛を知らるゝか　法『然らバ其人の成佛と云ふハ如何ある所ゑかござるゑや　一『敢て他ゑ問ふを要せず汝が心ゑ問ハれよ蓋し釋然たるものあらう』と云へバ彼の法師何と一言の言葉なく閉口して立歸られました

○一休地獄問答歌合

嘗て一休和尚堺の浦ゑ參られましたるゑ一軒の旅人宿ゑ地獄と云へる遊女がありましたが豫て一休和尚の名高いことを聞いて這ハ善い折りのことであると一首の歌を詠じて示されました

山居せバ深山の奥ゑ住むよかし
此處ハ浮世の堺近きゑ

と一休之を聞いて直ちゑ返歌して云ふゑハ

一休が身をバ身ほどゑ思ハねバ
市も山家も同じ住家ゑ

と斯くあん返歌されましたが心ゑ思ふやうハ此の女唯物ゑてハあきぞと傍らの人ゑ問ふて這ハ如何ある女ゑてあるかと尋ねまするゑ其人の答へて云ふゑハ　或『彼れとそハ音に聞こし地獄と申す遊女ゑてござる』と一休之を聞いて其儘點頭きて地獄の所ゑ到り

聞きしより見ておそろしき地獄哉

と上の句を戯れて口吟まれますれば地獄ある遊女も亦取敢へず直ちに其下の句を附けて

えゝ來る人の落ちざるゝおし

と斯くぞ答へたと申します如何さま面白き對でございます今日東京あゞて陰賣遊女を稱して地獄と云ふも其れ此等の故事に基くことでがおざりませう

○一休の酒興浮れ遊び

昔し七月の十五六日に入ゝ何れの村里も若者大勢打ち集ひまして所謂盆踊あるものを爲すことでございますが或る一年の七月十五日の夜若者の飛上りの前後知らずの男一人申すやうゝ　甲『如何に其方よ今宵ゝ紫野の大德寺の一休方へ參り夜すがら慰み遊べんことゝ何うであるか』と云ふに又一人の申すやうゝ　乙『是れゝ〳〵善い思ひつきである實ゝ我等も先刻より さう思ッたことである彼の一休と云ふ坊主ゝ中々に諧謔た浮れ者で殊に

今宵ゝ七月盆の十五日の夜のことでもあれば是れから行いて彼の坊主を浮らかして呉らうぜ』と二人打連れ立ちて紫野大德寺へ押掛けました るに折りも善く一休和尚も草庵に居られ此の若衆の入來れるを見て　一『是れゝ〳〵何れも能くこそ參られましたぞ去來先づ祝儀を參らせんとて早や酒盃を出されて飲みつ食ひつ舞ひつ躍りつ歌ふもありて中々に面白く可笑しく遂に一休も浮されて立ッて踊り出されましたが和尚破れ扇子の拍子を取ッて歌ゝれまするやうゝ

竹の切世の溜水清まず濁らず出ず入らず人と契らば薄く契りて末まで
遂げよ紅葉ばを見よ淡いが散るか濃きぞ先づ散るもので候踊れや〳〵
人々よ若いが再びある身かや只だ何事もかことも若き時に入ゝ誰もかも
いたづら狂ひゝあるものよ夫れも苦いものでもおじやらぬ毒藥變じて
藥とあり候何を歎くぞ川端柳水の出ばあを歎き候夫れ歎かゞなげかう
までよ麗か身に入かゝる事に入てあらばこそ牛ゝ牛連れ馬ゝ馬連れ空に浮

世ゝ何んおものじや歌ゝ歌へ舞ゝ舞へ釋迦のお母ゝやしゆたまぐ
〳〵佳い人よ

と半ゞ解りて半ゞ解らぬ歌を歌ひつゝ舞ゝれまするゝ人々之を見て云ふやうゝ　衆『偖て〳〵御坊の踊を久しぶりで見ました殊ゝ歌の文句が一段と面白くございました』と皆お一度ゝ咄ッと笑ひ興ぜられました時ゝ一人が云ふやうゝ『去來々々此の面白さゝ町へ押出して踊らんことゝ如何である御坊も同道致されよ　一『善し〳〵心得たることである年ゝ寄ッても おでふ若衆ゝ劣らうや』と太郎次郎と申す一人の下僕を召し連れ都合四人の人々思ひ〳〵の出立をおしましたが先づ一休和尚の奇裝ゝかつたいかきのおおげ頭巾紙子の袖無し羽織を着されましたが腰ゝゝ九尺五分ほどゝ瓢箪をブラリシャラリと下げられ偖て脇差ゝゝ門前の彦六が一子竹松が菖蒲刀を兼平差ゝひらめきわたして出でられましたが偖て踊りゝ五條の橋より四五丁西ゝありと聞えて此處ぞ屈强の踊り場であるイデ疾く行

いて踊らんと四人ゝ走り行き軈て其が中ゝ打ち交りて茲を先途と頻りゝ跳ね廻りて踊られましたが一休酒興ゝ乘じて餘り甚く狂ひ廻たので遂ゝゝ彼の二人の浮れ友達も見失ひ唯だ主從二人とおりましたが此時早や一休ゝゝ足も四土路ゝおッて跟々蹌々として一歩ゝ高く一歩ゝ低く天を地と視地を天と見若き女の肩へおぶ片亂と頓倒かゝりましたるゝ女も共ゝ頓倒て土擽みまするゝ其が夫傍へゝ之を見て　或『是れゝしたり卒爾ある曲者であるかおイデ其分ゝゝおし置くまじ』と大聲を揚げて誰れとゝ知らず一休目掛けて走り掛りまするゝ此方ゝ一休今ゝとて酒氣も十二分ゝ廻り一種の狂塊と爲ッたることであれゞ此方も亦心得たりと云ふまゝゝ大屬を扱き大手を擴げて蹴られましたが三人或ゝ五人取り付き彼方へむらむら此方へむら〳〵と押返してゝ復た押戻し霎時揉ち合ひましたが其うちゝ早や頭巾ゝ破れて飛び紙子ゝ背後の裾より襟邊まで引き破り前後も別かず鬪爭ひました此時太郎次郎ゝ遙かゝ此の体を見て這ゝ生への一大

事と馳せ寄り雙肩推脱ぎ敵手の脛と見違ひ却て和尚の脛を六手と取り曳
やと云ッて引きますれバ何かはもて堪りせう無慘や和尚ハトンボウを打
ッてドウと倒れた拍子ヨ瓢箪ハ飛んで石ヨ當りて數片とあり殘酒ハ溢れ
て往來に流れますれバ彼是の喧嘩騒動ヨ人ハ益々群り來りまするヨゼ一
休も是れハ堪らじと東を指して逃げ出さるゝ途端ヨ下帶外れ之を蹈ひて
躓き頓れましたがやをら起き上りて走らんとしますれバ生憎や又候小石
ヨ躓いて倒る起きつ頓びつ漸く辛うじて紫野まで逃歸ッたと申すが面白
しとも可笑しとも實ヨ抱腹絶倒の話でござります實ヨ大德寺の大和尚ヨ
ハあるまじきヒヨロヅタ事でありますす其れ將た一休の一休たる所以でが
おでざりませうか

○一休公然の僞言衆人の疑惑を覺す

世ヨ普通理化學の外ヨ別ヨ不思議と云ふものハあいことでござりまする
が兎角世の人ハ道理の外の不思議を信じたがることでござります茲ヨ一

休の世ヨ立優りたることハ今ヨ始めぬことでござりまするが或時の事で
ありました洛中の人一休を信向のあまり誰れ言ふとなく『一休和尚ハ生佛
にて魚を食して水中へ吐出せバアラ不思議や其魚ハ忽ち固どの如く生き
返へりて泳ぎ出すことである何ンと亦奇妙なことでハあいか』と洛中專ら
此事を申し傳へて皆な不思議がッて居りますること此事遂ヨ一休傳へ聞い
て甚だ可笑しがりイデ其儀あらバ洛中の人ヨ一驚を喫せしめ呉んずと觸
て洛中の辻々へ高札を建てられました其文句ヨ

來る何日の日盛り松の邊紫野ヨ於て魚を喰ひて其儘元の魚ヨ吐出しい
中ヨ跳らしむる事也御望の方々御見物ヨ御出待ち奉る

月　日　　太夫ハ天下老和尚一休大禪師

と斯くあん書れてゞ建られました洛中の人ハ之を見て大いヨ打ち驚れま
して人々とり〳〵ヨ浮説評判し合ひまするやうハ『偖ても〳〵一休和尚ヨ
ハ世ヨも稀なる高札を建てたることでハあいか既に嚙み碎いて腹へまで

行いたものを再び元の活魚に復するといい如何にとも眞しからず今[illegible]
ぬことであるが左りといい亦正しく自筆にて高札を建てられたるい何か其
効驗おくて叶いぬことで孰れ僞か眞か定だかならぬことであるが何い兎
まれ愈々當日にいい見物して後ちく〳〵の話の種にすべきことである』と其日
の來るを待ッて居りました聽て其日にもおりまするに紫野大徳寺の門前
にいい老若男女市の如く群集して各々是れ見漏らしていおらじと延上りて
見て居りましたるに漸くにして其時刻ともおりますれば大徳寺の下僕い
大盥に清水を浪々とたゝへ魚を能く料理して彼の盥の邊に食卓を据ゑま
した斯くて其準備が整へますれば一休やをら出で來られました千萬の見
物人い素破和尚こそ出でたれと皆おの大眼濶と皿のやうに見開いて之を見
ますれば一休彼の魚をひたものに喰いれましたが之を喰ッて後ち彼の盥
に向ッて喝々と宣ひまして霎時目おぢを閉ぢて祈念をするよと見にまし
たれば見物の群衆い傍目も觸れずシーと一休の面貌を打ち守り居て生き

たる魚を口から吐き出すい今かく〳〵と待ッて居ましたるに霎時にして宣
ひまするやうい諸君に諸君い最と遙々との御出でにてござる程に愚僧も
亦常よりい一層手際に吐き出して見せ申さんとて種々と思案してござる
に今日い如何にしてか何うも吐れさうもおいことであれば是非に及ばず
蠢にありとひりて棄て申さん程に諸君も早々立歸られませ』と言ひ棄てゝ
内へ入られましたれば見物の衆皆おの愕然として喫驚し呆然としておきれ
偖ても諧謔たる御坊であるかおと與をさまして歸へられましたが其が中
にも心ある者の申すやうい『正法に奇特おしと聞きつるに如何に一休おれ
ばとて既に食して腹中に葬りたる魚のおぢか再び生きて淵に返るの道理
あらうや左るを世の人の不思議を傳ふるい却て世を惑いすの種であるイ
デ其迷の夢を覺して呉んずと一休和尚の故らに此等の諧謔をおし世に道
理の外の不思議おきことを示されたことである實に貴き敎へである』と云
へ[illegible]之を悟りて大いに感じて歸へられましてござる如何にも

面白きことでござります

○一休嘘八百の寓意

是れも亦前講と同じやうある話よてござります或時の事でござりましたが一休和尚ハ活佛であると世上よ風聞高く取り沙汰類りでござりましたが所が中よ一人の申すやうハ『我等此頃一休の草庵へ參ッたよ和尚の云ふよハ能くこそ來たことであると虛空よ座したかと思へバ庭の松の小枝よ腰を掛くるおど最と不思議のことが多くて實よ人間とハ思ハれぬ即ち活佛である』と云へバ人皆おゝ之を聞いて云ふやう『所ハ眞しからぬことであるが何よしても不思議の話であると衢の風説とり〳〵よ遂よ此れ等一休の耶よ這入りまするとと一休之を聞いて最と可笑しく思ハれ一條の辻よ高札を建てましたが其文句よ

佛法の修行までよ天眼通を得たり虛空に座せんとすれバ則ち座し座すまじと思へバ則ち座せず通力自在を得たり若し疑ふ人あらバ見物すべ

し

月　日

と斯くなん書れますれば人々之を見て云ふやうは此の間より風聞に一休和尚虛空に座すとか聞いたが今此の高札を建つるを見ては偖ては疑ひもなく此の不思議の事を爲すと見えたことである併し過ぎつる頃既に腹中に葬り食したる魚を生きたるまゝ吐き出すとか言ッたことも赤かな嘘であッたが復た或は左ることではないか』と疑ふ者が多かッたことでござる

天下老和尚一休大禪師

が中には『否や〳〵其れとは事變りたれば全くの嘘にてもあるまい何か其自在力のあることであらうと稍々之を信ずる者もありました茲に二三人のこびたる者一休の草庵へ尋ね行きて申すやうは　甲『這回建てられたる高札の表面に敢て疑はなき事でござりまするが直々に拜み申したくと思ひ我等是れまで參りてござります』と一休之を聞いて宣ひまするやうは『左れば拙僧近來疑ひもなく天眼通を得たことでござる』とあれば中にも一人

層物にこびたる者最と近々と進み出でゝ申すやうゝ　乙『否や是れゝ僞りよてござらう此の羽翼おき人間が虛空よ座すると云ふこと所ゝ思ひも寄らぬこと到底人間よ爲し得らるべきことよてゝござらぬ若しも虛空よ座することが出來るとすれゞ此の扇子の上おどゝ最と易きことであらせう程よ虛空と云ゝず先づ斯う手よ持つ此の扇子の上へよのぼり坐りて御覽ありませ』と云へゞ一休の云ふやう　一『左れゞ其事おれ其扇子の上よても乘らんと思ふときゝ之れよ乘らんことも最と易きことであるが併し今日ゝ生憎と扇子の上よも虛空へものぼらんと思ふ心更らよおきことであれゞ重ねてお出あれよ拙僧登らんと思ふときゝ必ず登りて見することである』とあれゞ皆々之を聞いて大いよ呆れて雲時ゝものも得言はでありましたが所が中よも一人學識ある者の言ふやうゝ　丙『是れゝ〳〵和尚殿のお言葉大いよ感服仕りました是れゝ餘り世間の人があられもしおいてとを彼是と云ふを可笑しく思召されて手近く誡め給へることゝ察し入り

賞してござると申せば皆お成程と感じて立歸られましてござる

○瓢簞顚倒の手品

世間無智の者が兎角一休を活佛と信仰の餘りあられもしおいてとを彼是と吹聽しまする程よ一休之を聞いて常に可笑しく思召され折々世間の人をだしぬいて一盞をしも喫せしむることでござりまするが或る頃一休お手前チト拂底の時又候一條もどり橋の辻よ高札を建てられました其文句よ

一此度日本老和尚一休三明六通を得て瓢簞を顚倒す望みの方々見物可有之者也　但し今月今日より始め申候

と斯くおん書れましたが遣回ゝ是れまでとゝ違ひ稍々芝居仕掛よ搆へました程よ京童子老若男女貴賤貧富の別ちおく評判とり〳〵よして曳到々々と紫野へ群衆をおして押し掛けましたるよ驚て程經て一休準備整へましてやをら出で來られましたが法衣の前よ大いおる瓢簞をブラリ〳〵と

下げられ兩手ゑ撥を持ッて東より西或ハ南より北と彼方此方と飛巡り跳返りおどして幾回か舞臺を打ち廻られましたが漸くゑ大音を擧げて云ふゑハ　一『たんへう〳〵』と唱へつゝ凡そ二十間ばかりも跳廻りまして其儘樂屋へ引込んで一休自身ゑ太鼓を打ち鳴らして又樂屋より叫び云ふやうは　一『先様おかわり〳〵』と皆お殘らず追出して又更らゑ他の新らしき見物客を招き大分ゑ一時の餘を儲けたさうでござる而て其たんへうたんへうと云へるが即ちへうたんを頓倒したのであるさうでござるが何んと抱腹絶倒お話ゑていでざりませぬか一休の不思議と云へるハ大概是んおものであります

○一休の色情他し女房の袖引き

此等をや色情哲學とでも申しませうか春も彌生の半ゞ天氣麗らかゑ輕風嫋々として花ハ笑ひ鳥ハ囀り乾坤將さゑ醉んとしまする時ハ彼の無心おる木も勃々たる色氣を生じて芽をも吹くことで況してや固と岩木おら

ぬ有情の人間などが浮き立つことのなかりませうや此時最と見目佳き婦女を見ますれば心の動くは固よりの事亦差して異しむにも足らぬことでざります茲に活佛と云はれたる一休或る一年の春の半ば庭面に花を眺めチト酒など參りて中々に若々しうなッて居りまする所へ或る旦那の奥方參られますれば一休大いに打ち喜ばれまして　一『是は〳〵善くてそ參られたることである去來先づ是れへと請じ手に持つ盃を指し酒など薦め殊に一層面白く可笑しき物語などを致されて最としめやかに樂み遊んで居りましたが夫れ是れするうち日も早や西山に沈み軈て燈も點けられましたるに此時美人の燈影一層朧朦として美しく得も言はれぬ艶色は恰も露も垂んばかりでざりましたれば有繋活佛と云はれたる一休和尚もむら〳〵と其心の動きましたと見えて彼の旦那の女房に向ッて云ふやうは

一『今宵は最早時も遲れたればお宿りあれ』と申せば彼の女房稍々氣色を變へて云ふやう　女『苟に參り唯だ一寸遊び候さへ何とやら世評も如何と

思ひ侍りましたるよ一夜宿り申さゞ無ぞかし浮名も立ち侍ることでござります且つや夫ある身の如何で長居致すことの出來ませうや去來お暇申しまする』とやをら立ちかゝりましたるよ一休如何よ堪へ難く思ひましたか开が袖よすがられまして　一『今宵ゝ是非よお宿りあれ此の和尚が一生の願ひである』と頻りよ引き留めますれゞ彼の女房ゝ大いよ打ち驚かれ氣色荒らだてゝ申すやうゝ　女『是れゝ偖て和尚樣としたことが何をおさるのでござるか出家の身よゝ甚だ似合しからぬ淫舉動嘗て和尚樣ゝ活佛と思ひましたるよ今此の始末這ゝ抑も如何あることでござるか淫坊よゝ物狂ゝせられましたか』と斜眼よ之を睨まへますれゞ一休ニコ〳〵として笑ゝれて云ふやうゝ　一『其許へ心を掛くれゞこそ愚僧も常よおき心を亂して是非よと止むることである心掛けぬ者が何とて留むる者のあらうぞゝ少しゝ察してお宿りあれ』と申せゞ彼の女房之を聞いて云ふ　女『是れゝ沙汰の限りである夫ある身のおゞか長居のおらうことぞや淫挨拶も最早

慾れどうである』と一休の持つ手を振り放ッて輿よ乘ッて我家よ立歸られましたが嬬て夫よ逢ッて訴へますやうゝ　女『マア此お且那お聞き下さりませよ彼の一休と云ふ御坊ゝ活佛のやう思ひましたが赤かお僞り至極のいたづら者でござりまする今日ゝ今日とて妾よ酒を强ひ薦め今まで引き留め剩へ今宵よゝ宿れおゞ途方途徹もおきことを申されてござりまする程よ且那樣も必ず〳〵夫の寺へゝ參り給ふお』と云へゞ夫ゝ中々よ左る者よて之を聞いてハタと横手を拍ッて微笑れつゝ云ふやうゝ　夫『ハヽア左樣であッたか左あッてこそ眞の佛である汝が情おく振り切り歸るも道理である』が左るよても能く思ひ見よ己れが旦那の女房よ最と慣れ〳〵しくも一夜宿れこゝ出家の身として何ぞか言ひ出すことの出來やうや左るを一休和尚あれゞこそ思ひしことを包まず藏さず其儘口外したことである有繋ゝ一休和尚である和尚も今宵ゝ能く〳〵情よ迫りしと見えたことである且つや一休和尚ゝ天下の老和尚今日本よ一人前きの世よも最と〳〵稀れお

る知識で後ちの世よも容易よ出づべきものよあらねば是れと枕を並べ
ことと今生の幸ひ又後世の一大くどくである是れ雷よ汝の光榮のみでんあ
い併せて我れの光榮又一家の光榮である若し深く我れを思ふとおらば疾
く急ぎ行いて一夜彼の寺よ宿りて綴々遊び來らるべし我れ亦何の嫉妬か
あらうや歸更ら〳〵嫉妬心おきことであるィデ疾く〳〵』と最ともさばけ
て促し立てますれば女房も　一『左あらばお言葉よ從ひィデ是れより引返
し申すことでござる』とあるよ夫又　夫『急ぎ參りて綴々と和尚を慰むるが
善いことである返す〳〵も厚くこゞてりと慰めて來るが善いことである』
と申せば女房も稍々耻かしさうよ面を外向け一間へ引退ぎ白粉口紅等コ
テ〳〵恰も狐の化けたるやうよ塗り付け衣裳を飾り襟門取り裝ひ再ひ輿
よ打ち乘りて一休の草庵へと急がせました蟄て紫野大徳寺へ參られまし
たるよ此時一休和尚よん早や寢たと見えまして門の戸堅く差し固めてご
ざる程よ彼の女房ん絲垂の柳最と細やかおる纖手よ門の戸コン〳〵打ち

叩かれますれば一休這ん何事やらん　一『誰そ參られたか何の用ぞ』と門の
戸押し開きて顔差し出しますれば豈よ圖らんや前きの女房よて最とも華
美おる服裝よ聲も一層柔和よ一休よ向ッて云ふやうん　女『前きにん是非
よ一夜宿れとの仰せでござりましたが夫の心も酌み兼ねて一段ん振り切
り立歸りましたが餘り湯坊のお情が殘り多くて夫よ暇を乞ひましたるよ
苦しからずとのことよ最と耻かしおがら宿りよ參たことで』と後ん聲も細
く最と絶々よ申しますれば一休之を聞いて云ふやう　一『ハヽア何かと思
へば痴情の事か夫れん最早忌やよおッたことである先きにん其樣ことも
あッたか知らんが今ん早や其樣おことと聞く耳も持たぬことである早よう
疾く〳〵湯歸りあれと最と情おくも復た門の戸ピシッヤり堅く差し固め
て其後ちん音もせぬゆゑ彼の女房　女『左りとてん和尚樣よんお嬲りおさ
るゝのでござるか』と申しましても更らよ音もしませぬゆゑ是非おく我家
よ立歸ッて夫よ云々と語りますれば夫ん之を聞き　夫『左こそあるらめ我

れも大方にさうであらうと思ッたことである實に天下の老和尚である其心の動く時に動くに從ひ動かぬ時に少しも動かさず最早忌まるッたとに偖てもく行く水の如き心で誠に屑きことである愈々もて活佛であると大いに敬服したさうでござる

○一休男色に心を動かす

世に活佛と云われし一休和尚も岩木あらぬ身の悲しさに女色男女を見て折節其心を動かしたることでござりまするが嘗て一休の駿河に行脚せられました時府中に小玉辨之助とて鄙に似げあき最と艶かある美少年がありました一休一目之を見て最と禁へ難くや思ひけん頻りと之を口説かれましたが辨之助中々に之れに從はず否まれまする程に一休遂に一首の狂歌を作り送られました

花に根に鳥に古巣にかへれども
人に若きにかへることなし

との一首に小辨殿まゐる都がたのづくにうと書いて遣はされまするれば彼の辨之助も此の狂歌の心に感じけん最と細まくとの返事を送りて其夜參りて辨御望みに隨ひ侍らんと申しまするれば一休點頭きて云ふやうに『是れは能くこそ來りたることである併し今朝までは左樣思ッたことであるが今は早や其念も去ッて用あきことであれば早々に立歸られとて之を歸したさうでござる何時もながら其心の動く時に之を動かし其心の動かぬ時に堅く之を動かさゞるは實に行く水の如くで最とく敬服のことでござります

○竹林寺住僧の戀病

是れは一休の戀病でないと他の住僧の戀病であるが爰に江州に竹林寺と云ふ寺があッたが此の住僧生來至ッて脊低く僅かに三尺ばかりしかござりませんでした偖て此の寺の近邊に深く思ひ入ッたる一人の美少年があッたが住僧竊かに之を語らひ折々寺へ呼び寄せて何か睦事をもあされと

したるよ其後ち何とかして打ち絶え久しく來られませぬゆゑ此の住僧大いよ氣をくさらかし何事も打ち捨て置き唯だ一室よ閉籠ッて打ち臥して居られました時も時とて下人少々の過失がありましたるを住僧之れを見て其の氣色のむしやくしやして居るときであッたれば大いよ腹打ち立ち咎おき枕おどを投げて散々よ惡口罵詈して居る所へ折節一休固より竹林寺ん親しき間柄とて圖らずも來られますれば今しも此の体よて一休も大よ打ち驚きて云ふやう　一『是れん抑も何事をか腹立ち給ふぞ先づ〳〵勘忍致されよ』と住僧之を聞き始めて夢の覺めたる心地して我れよ返り包む

よ由おく委細皆お物語りて云ふやうん　住『實ん恥かしおがら是れ〳〵斯うでござる就てん彼の美少年何としたことか一向よ來らず何とか方便を運らして呼び寄せたきことであるが仄よ聞けば親兄弟の前を忍ぶ由承るが何ぞ夫れとおくかとつけして久しく打ち絶え來らぬん如何おる事であるとの趣き言ひ遣りたく思ふが夫れと云ふ善い工夫もおく殆々困却して

居る所であるが彷坊よん豫て知られたる頓才家であれば何か善い工夫もあることでござらう何分宜しくお頼み申す』とあれば一休之を聞いて打ち笑んれて云ふやう　一『何かと思へば近頃彷僧よんお浮氣のことでござるか岩木おらぬ有情の人間這も亦是非もおきことでござる就てん彼れを呼び寄せんことん最と易きことでござる所ん外よてもおし此頃澤山よある菜と錢と小糠とを少しづゝ紙よ包みて遣り給へ是れよて夫れとおく其用事ん足ることである』とあれば竹林寺住僧之を聞いて云ふ　住『所ん亦如何ある所以でござるぞ　一『否や何よ外よてもおし菜と錢と小糠よてナセニ

コヌカと云ふ事である　住『ハヽア左樣でござるか是れん一段と面白きことである左あらば彷坊の敎へよ從ひ明日ん之を持せ遣らうことであるが今日ん雨中よて猶ほ更ら心淋し幸ひ阪本より美酒の貰ッたるものあり一休參られませよ我れも亦共よ酌んことであると互ひよ酌しつ酬れつ酒宴半ばよおりますれば一休やをら起ッて踊られましたが其舞ふ拍子の歌よ

君が來ぬとて枕が知るか、枕お投げぞ咎ゝおし、ちくりん〳〵ちんちくりん、さおちくりじや程よきのそんよお踊ゝおんよさで、ちやせんやッこらさ、

と歌ひ奏でゝ舞ひつ踊りつ興ぜられたさうでござる何時もおがら一休よゝ諧謔たぼ坊でござります

○一休の頓才艶書の讀變へ

一休と云ふぼ坊ゝ中々よゝ才物よゝて粹の道よゝも通の路よゝも最と拔目のおい人物でござります爰よゝ素と雲州大原の出生よゝてユルリ屋藤太夫と云ふ者がござりましたが後ち京都よゝ移り年久しく京都の生活をおして居りましたが元來出雲ゝ生國でござれゝ後ち復た本國よゝ歸りて住みましたが其歸國の折り妻も與共連れて歸へられました左るよゝ此の女京都よゝあるの日或る密夫をつくりて最と懇よゝも暗黑の世界でちゝくり合ッて居たことであれゝ實ゝもよゝ連れられて出雲よゝ歸るのゝ忌やでしたが併し夫の意見であ

ますれゝ是非おく歸國の程よゝ就いたことでありました左れゝ此の女出雲へ歸つて後ちも心ゝ常よゝ京都へ飛んで行いて出雲よゝあらぬことで彼の密夫と度々艶書の往復をおしたことでありました左るを开が夫ゝ素と是れ我が緣ゝ出雲の本場で結んだものであれゝ決して其夫婦の間よゝ秋風の吹きすさみて密夫おど作る憂ひゝおい先づ〳〵もて安心としたことであれゝ前よゝ京都よゝあるの日已が妻が密夫を作りしをも今又其艶書を往復するも一向よゝ知らでありましたが他よゝ竊かよゝ之を知る者があつて是れ是れ斯うと其艶書の往復の事を皆お开が夫よゝ密告しました夫ゝ之を聞いて大いよゝ怒られましたがイヤ待て雲時其密夫の事ゝしも其証據の艶書を得讀まぬうちゝ中々よゝ其眞情を知るよゝ由おくイデヤ之を讀んと致しまする生憎や此の藤太夫元來無筆文盲の悲しさよゝ一行も之を得讀む能ゝず最と大事の〳〵証據ゝ手よゝ入りおがらも何とも別らず殆々困却しましたが併し外の物と違ひ艶書とありてゝ矢鱈他人よゝも見て貰ひず何とか喜い見

て貰ふ人はないかと窃かに心尋に尋ねて居りました所へ折りも折りとて偶々一休和尚出雲の國へ下られ竟藤太夫の近所に逗留して居られましたるを藤太夫聞き付け這は善き折りである和尚は嘗て京都にて聊か知る人にもあり旁々もて彼の人なれば都ての都合善いことであると之を請じました一休も亦藤太夫とありては豫て知る所の人にもあれば直樣參られ互ひに京都以來絶えて久しき對面の口誼も濟み曬て齋も出されて四方八方の談話に稍々時も移りましたが藤太夫は其潮合を見斗ひて彼の艶書を取出し低聲一休に向ッて云ふやうは　藤『御坊樣よ內々御賴み申したき事がござります开は外にてもござりませぬが私事御坊樣にも御存の如く目は明いて居ましても文字に對しては盲目も同樣所謂明盲と申すものにてござりますれば是れ此の艶書聊か故あることにて是非に其所以を知りたくとは思ひますれど如何とも一字も別り申さず何うぞ願くは明さまに一字も洩さずにお讀み下されたし』と云ふに一休之を聞いて云ふやうは　一『开

ハ最と易きことであるドリヤ是れへお出しおされ』とやをら手よ取り開きて之を見れバ書かうことか書くまいことか絶にて久しき戀の情最と細々と書付け端他の見る目も見られぬ濡事までありましたが一休左あらぬ体よて尋常の書牘よ讀みおし唯だ暑し寒しの仁義あゝを述ぶるの外ハ毫も色情らしき事ハおく最とサラ〳〵と讀んでのけられますれバ藤太夫傍らよ耳を清して之を聽いて居ましたが偖て聽き了ッて後ち云ふやうハ　藤『偖てハ敢て苦うもおい書牘である若しも餘人よ讀んで貰つたのあらバ或ハ疑ひの節のおきよハでざらぬが活佛とも云ハるゝ御坊樣の讀んだことあれバ此の上ハ更ら〳〵疑ふ節もおいことである左るよても世間の人の言ふことハ信せられぬことである今ハ心中の雲霧も全く晴れ渡りました』と申しましたが爰よ又彼の女ハ竊かよ之を聞いて一休和尚の仁惠這ハ添おいことであると思ふものから竊かよ一休の許に禮書を遣ハされました加其紙の片よ一首の歌を書付けられました其歌よ

信濃なる木曾路よかけし丸木橋
ふみ見しときゝ危かりけり

と嬉しさの餘りよ一首を詠ぜられて遣ゝされました其所謂ふみ見しとき
と云ふふみゝ艶書のふみと丸木橋を足よて蹈みしふみとよ通ゝして最と
危かりしを和尚様のお蔭よて其危きを遁れたるとの意を寓して喜んだこ
とであります一休之を見て返歌しまするやうゝ

見しときゝ如何なる事ととう太夫
讀み終りてゝ心ゆるりや

と斯くなん讀み遣ゝされました其とう太夫と云ふとうを事を問ふとうと
藤太夫のとうとよ通ゝせ又心ゆるりやゝユルリ屋藤太夫のゆるりと心の
易くゆるんだとよ通ゝせたものであります左れゞ是れよりゝ彼の女も亦
大いよ身を慎んで密夫の事ゝふつよ思ひ絶ッたさうであります

○一休佛法よ戀慕す

深く學問に心を潜め或は一事の發明工夫などしまするには友達などの問
ひ來ることの最と五月蠅くて戸を閉ぢて專心一意に之を研究することで
竟には閉戸先生の綽號などを得た者があることですが爰に一休和尚或時
一大因緣の工夫をなさんとて一室に閉ぢ籠ッて居りましたが只も知らぬ
旦那や友達は日毎に訪ひ來て最とつまらぬ物語りなどして之を妨げまし
た左れば一休は之を最と五月蠅く思ひ斯くては我が工夫の邪魔であると
遂には虚病を遣ひ近頃はチト心地惡しと言ッて一向に問ひ來る人に逢は
ぬことでありましたが逢はねば逢ぬにて旦那衆や友達は是れは心許ない
ことである和尚近頃病氣とあるが如何なる病氣にてあるのか或は重き病
氣にてはないか左りとは又心に懸ることであると折々は見舞にとて訪ひ
尋ね行きて見まするに唯だ長髪のホウ〳〵と生ひ伸びたるばかりで差し
て面色も變らず左るを病氣と言ッて閉ぢ籠り居るは如何にも不審のこと
である旦那を始めとして智音衆に至るまで是れは〳〵何とも別らぬ氣遣

んしきことであると時の名醫を取變へ引換へ遣んして診察致させました
るよ醫師の申すのを聞くよ脈の樣子を見るよ如何よも平穩で敢て異狀も
あいことである偖ても診察しかぬる病氣であると皆あ〳〵醫者の申す所
同じ診察でざれば旦那知音衆益々疑ひ一日一場よ寄り集ッて相談しま
するやうん偖て這回和尙樣の御病氣の容体ん熱の樣子とん見えず因ッて
考ふるよ猶未だ年齡の若き事でもあれば若しや所謂戀煩と云ふものよて
んおきや左りとん又何方の女よ想を掛けたることであるかと口々よ申し
ましたが中よも少く小智惠のある人の言ふよん『斯大勢にて評議し此の事
多くの人の知りたりと知らば和尙も中々よ明し給んぬことであらう程よ
是れん日頃極々の別懇の者二三人夫れとおく見舞よ行き竊かよも密々よ
問ひ質さば和尙も或ん开を明し其名をしも語ることであらう』と申せば人
人之を聞いて是れん妙である偖て然らば其人々よん誰れが善からんとの
穿議よ誰れ〳〵こそ善かんと其人も定り三人打ち連れ立ッて一休の草庵

へ參られ和尙よ對面して先づ四方四方の談話を致て居りましたが其中一
人申出でまするやうん『此間より種々醫者を取換へて診察致させましたる
よ何れも醫者の申すよん脈の容体常よ變りしこともおいとのことでござ
りますが彷彿樣よん平生よ變りて何を苦よ煩らひ給ふことでありまする
か左りとん解せぬことと定めて何れの女よか戀煩よても爲され候ことよや
侍らん斯く我々が淨玻璃の鏡の眼で視たるん僻が目かよもや違ひんおき
ことでござらう我々日頃知音の者何ぞか包み藏すことのでざらうや包ま
ず有儘よ仰せられませ其心の願ひ適へて差上げ申しませう』と打ち付けよ
云ひますれば一休ん如何よも嬉しげある面色よて云ふやうん　一『斯くず
ばしよ御推察を被りました以上ん復た何をか包みませうや隱さずお話し
申しませうよ耻づかしおがら此の日頃戀わびて偖て此の如くやつれ果て
候始末でざるが能くこそお察し下されました何とやらん我等よんチト
以外んしからぬことでざりまするが各々方も日頃の好情よ何うか我等

が面伏の願ひ適へて下さりませ左ゝ去りおがら糸おらおくよ心乱れて耻かしきことでござれば各々方の面前で夫れと打ちつけにゝ述べ難きことでござれば一筆書いてお目よ掛けまする程よ各々方よゝ門外へ出でゝ後ち披いて御覧下され而して疾く〳〵其願ひを叶へて下され夫れでこそ此の日頃やつれし我等が生命も繼がれて延びることでござる左すれば其襞りよゝ我等各々方へゝ能き道を教へ申さん』と其儘奥の間へ入られました

が軈て一筆サラリ書いて开を引き結んで最と耻かしさうよ彼の三人の者よ渡しますれば三人ゝ口を揃へて　衆『何の耻かしがることのござらうや先づ〳〵心安く思召せ軈て追ッつけお望みの情適へて差上申すことであると門外へ出でられましたが疾く其名を知るが肝要であると軈て卦押切り披いて之を見ますれば何とゝ知らず中より二首の歌が出でました其歌よ

本來の面目坊がまち姿

一目見しより戀とこそ爲れ
我れのみか釋迦も達摩もあらがんも

此君ゆゑに身をやつしけり

となん詠せうれてござれば三人の者共之を見て歌の中には尋常の女の戀の名をも明してあるかと案の外豈に圖らんや佛法の深き道にも戀して开が奥義をも究めんとて專々其心をしも碎けることの趣き歌の面に現はれましたれば三人の者は驚くまいか愕くまいかひたと呆然るゝまでに打ち驚かれまして云ふやうは　衆『左りとは我々淺慮輩が深き御心をも知らで淺はかにも女の戀煩とのみ推測ッて开を打ち付けに問ふたることの耻かしさよ左りとは亦一休和尚には今に始めぬ深き御心にも亦一時諧謔て我我を玩弄にせることの我れながら可笑しさよ左るにても世に繪に寫し木にて刻める佛は數多くあれど生きたる佛は一休和尚であると再び一休の草庵に立戻りて忽卒の罪を謝しつ笑ひつ遂には曖々難有の御佛やとて皆

な均しと手を合せて拜みました如何にも諧謔なことでムります

○一休の破戒哲理問合

是れは一休が堅田の草庵に居た時の事でございましたが其草庵は海岸にあツたることでございたれば遊戯心半ばにや日毎に釣竿を持ち行き之を淵に垂れて小魚を釣りして喰はれますれば开が弟子の僧達或は一休と友たる僧徒之を見もしつ聞きもして這は沙門の身にあるまじきことである と皆な與共に一休を一室に招きて甚く之れに異見を加へましたるに一休の云ふには 一『是れは〳〵各々方の異見其志は最と忝なきことであるが併し其學識は餘り感心仕ッたことではございぬ抑も各々方は日頃學問するとて何事をか學ばるゝことにや各々方は極めて記臆悪しきと見そてざる我等は唯だ古への祖師の眞似をしたることである左れば是れは之れ又禪宗の一學問である我敢て例なきことは仕らず若し各々方古の例を知らずとあらばお見せ申さんとて一休素より繪畫くことは器用でございれば

蜆子の海老を釣りて喰ふ所のさまを最ともあり〳〵と畫れまして开が上に一首の歌を題せられました

古へのしかこき祖くは蜆を釣りし
我れはあみうて魚を釣り喰ふ

と斯くなん書付け右多くの僧達の前に差付け左あらぬ體にて居られます れば皆な〳〵其意は兎も角も先づ其繪を見て偖ても奇容なる繪である哉 左りとは又見事なる歌の書きぶりやと感じ縱さま横さまに見て居りましたが开が中に一人の老僧冷笑ッて云ふやうは 老『是れはしたり古への祖師が蜆を釣り參りしとて貴僧の年齡猶は若きに魚を釣り參らんこと中々に鵜の眞似する烏にや類することでございる偖て貴僧は此の蜆子和尚の蜆釣りて參りし其御心根を知ろしめさるゝか如何に』と詰問しますれば一休は少しも騷げる色もなく最と靜かに從容答へて申すには 一『偖て〳〵奇怪なる詰問を被ることでございる哉如何さま御僧の如き愚なる心にては蜆

子が海老を喰ひし心根ゝ合點まゐらぬことでござらう元來爲ゝ於てゝ年齡の老若ゝでござらぬ若しも年齡の老いたるが悟道するとあらば門前の肥滿犬も亦悟道すべきことであるが肥滿犬か悟道したと云ふことゝ未だ聞かぬことでござる好し假令其年齡ゝ若くとも其心の老けたる者ゝ早く悟道することでござる左れば世尊ゝ三十成道と承る又我等が祖達摩大師の幼き時般若多羅尊者の來られ光明最とも赫灼たる璧を持ち捧げ三人の皇子達ゝ見せ汝が心を試みんとて之れゝ謂ッて云ふやうゝ　般『如何ゝ各々方ゝ此の璧を寶とせられまするか』とあるゝ此時御兄子二人ゝ　二『左れば這ゝ良き璧である世に又とおき寶であらう』と申されましたるゝ當時達摩ゝ七歳ゝてましましたが最とも愛らしき櫻の苔の如く細やかおる口もて申さるゝやうゝ　達『否や〳〵此の璧ゝ世上普通の寶ゝて眞の寶ゝてゝざらぬ智光の珠こそ眞の寶ゝてゝざる』とて彼の璧を座上ゝ拋れましたれば彼の尊者ゝ大いゝ打ち驚かれて云ふ　般『斯る幼き身をもて此の如き金

玉の言を吐出さるゝゝ最とも不思議のことであるとて其名を達摩とゝ名づけられました是れより以前の名ゝ菩提多羅と申されたことでござるが偖て是れよりゝ其名を改めて達摩とゝ申されました抑も達摩とゝ萬事ゝ達し通じて見かき立ッたるやうおる人おりとの意でござる斯樣の例もあれば悟道ゝ強ち敢て年齡の老若にゝ由らぬことでござる若し老若ありとすれば傍僧の如き年齡ゝ老いても其心の幼き者をこそ若輩未悟道人とゝ申すことでござる』と却て老僧の學識の足らぬを笑ひますれば老僧も人中ゝて一本遣れて稍々赤面して云ふやうゝ　老『是れゝ一休殿貴僧ゝ日頃の輕口ゝ任せて申されたり如何ゝ口とてゝ云ふとも其心ゝてゝ左樣我ゝ張られぬことであらう何れとも貴僧ゝ眞實覘子の覘參りし御心根を知り給ふか恐らくゝ知らぬことであらうと申せば一休答へて云ふ　一『汝ゝ重ねて云ふまでもおく我等能くも之を知ッたることである』とあるゝ彼の老僧傍らの衆僧を顧みて云ふやう　老『各々方ゝ如何ゝ思召されまするか禪宗

ん素と以心傳心でござれば爭で蜆子の御心が知らるべき蜆子の心ん蜆子あらでん之を知ることん得あらず左るを端の見る目で之を知るとん最と淺果敢ないることである』と冷笑ひますれば衆僧皆尤もと同じカラ〳〵と打ち笑ひて云ふやう　衆『成程御老僧の申さるゝ通り蜆子の御心ん中々ゑ凡人の知る所でんござらぬ左るを一休殿ゑん之を知ると云ふ抑も一休ゑん蜆子ゑ爲つて見たことがあるゑやゑ這ん亦思ひも寄らぬことである』とある　一『偖ても〳〵各々方ん能くも揃つて愚あゑ一休之を聞いて云ふやうん　一『偖ても〳〵各々方ん能くも揃つて愚あることを申さるゝことでんござらぬか我等ん好し假令身蜆子ゑあらぬとも其蜆子の心ん能く知つたることである　衆『否や〳〵其れん肯へぬことである蜆子あらぬ者のあゞか蜆子の御心が知られうや　一『左れば其事あれ各々方ん此の一休が心に爲り給んねば我等が蜆子の心ゑありたるかあらざるかん實ん知り申さぬことでござらう』と云へば各々皆あ遂ゑ舌の根も動かず閉口して逃出されました如何ゑも一休ゑん達者あ辨舌でご

ざります

是れゑ就いて一條の物語がありまず开ん外ゑてもござりませぬ昔し漢土戰國の世ゑ莊子と云ふ人と惠子と云ふ人がありましたが此の二人ん最とも洒落ある道學者で日頃互ひゑ二あき友達で二人相會すれば談しもしつ矣ひもして面白く學問の道ゑ遊んだことでありました或る一日の事此の兩人只ある濠梁の上ゑ遊んで居りましたるゑ折節色儵き魚が水面ゑ浮みて從容とし彼方此方と泳ぎ廻つて居りました莊子之を見惠子を顧みて云ふやうん　莊『アレ〳〵惠子殿ゑ覽せられぬか彼の魚が從容として遊んで居るん何んと樂しさうでんござらぬか是れん取りも直さず魚の樂みでござらうよ　惠『否や是れんあたり何を予すかと思へば異類の樂を語るん性からぬことでござる子ん魚ゑてんでござらぬ魚ゑてあらぬ身の何とて魚の樂が知られませうや這ん思ひも寄らぬことである　莊『否やとゑ子ん我れでんあい何とて我が魚の樂きを知らぬと云ふことを知らうや　惠『成程

さう言へばさうである併しさう言へば猶ほ更ら子ゝ魚の樂みを知らぬことである所ゝ亦何故あれば我れゝ子でゝあい故ゝ固より子を知らぬことである左れど子も亦固より魚であければ子が魚の樂を知らぬと云ふことゝ亦明かあることでござる　甚『是れゝ〳〵際涯のあいことである請ふ子姑らく其本ゝ返られよ好し假りゝ我れ魚ゝあらねば魚の樂を知らぬとせうか然らば子も亦我れゝあらねば我が魚の樂きを知るか知らぬか所を知るゝ由あきことである左るを之を目して知らぬと斷言するゝ這も亦道理ゝ適ゝぬこと若し子が之を斷言し我れゝ決して魚の樂を知らう筈ゝあいと云ゝゝ我れも亦魚の樂を慥かゝ知ると斷言することである』と申されて爭ひましたが是れが眞の濠梁の上の水掛論でござります今顧みますれば彼の堅田の草庵ある一休他僧問答と其趣きゝ髣髴たることでござります何さま一考を要する哲理上の問答であります

○一休の判斷神通の推測

時ゝ維れ五月雨の降りみ降らずみ定めあく一休和尚も最と徒然ゝて柴の戸を差し籠め端然として居られまする所へ年齢の頃凡そ六十餘りと覺しき一人の男頭ゝゝ宛然風の芭蕉か蜘蛛の巣ゝも似たる一蓋の破笠を頂き又足ゝゝ恰も蜆蚫の如くゝ蹈破りたる草鞋を穿れまして如何ゝも物思いしげゝも憂ひ悲みたる面色ゝて來られ柴の扉をコン〳〵〳〵と叩れて云ふやう　或『如何ゝ御坊樣物申さんヂトお願ひのあッて參られました此處明けて下さりませ』と申せゞ一休之を聞いて內より應といらへをしやをら身を起して柴の扉を明け　一『何誰でござるか先づ〳〵是れへと請じます』れゞ彼の男　或『去來御免下されと云ひつゝ內ゝ入り更らゝ言葉を改めて申すやうゝ　或『私ゝ此の竟近き邊ゝ居る者でござりまするが明日ゝヂト志の日ゝも當りまするが就てゝ知識を頼みたく候へますれゞ恐れあがら和尚樣を請じ奉りておろそかある齋を參らせたく是れまでゝ參ッたことでござります』と云ふ一休之を聞いて云ふやう　一『所ゝ最と易きことであ

る固より出家の身であれば委細承知してござる而て又其處ゝ何方よてでざるか』と問へば彼の者答へて云ふやう　或『左れば我家と申すゝ外でもでざりませぬ濁川通り底抜柄杓町と申して隱れあき處でござる尋ねて御出で下さらば門よ目標を下げて置きます程よ必ず〳〵待ち入り奉ります』と申して其儘歸へられました一休跡よて熟々と思ふやう這ゝ亦奇妙ある道案内の敎へやうである哉一思案入りさうであると小首を傾けて兎さま斯さまよ考へて見ましたが軈て霎時よして莞爾として微笑れハタと横手を拍つて獨り自ら謂ッて云ふやうゝ　一『ハヽア讀めたワイ〳〵抑も濁川ゝ今出た水の濁れるに象り今出川と云ふことであらう偖て又底抜柄杓ゝ彼の井の皮の底あきゝ丁度底抜けの大柄杓の如くであると云ふよ象り井皮町と云ふことであらうィデ然らば我が推量の如くよ尋ね行きて見んとて翌日軈て其如くよ尋ね行きましたるよ果せる哉案よ違ゝず今出川の井皮町と云ふ處よ到り只見ますれば門よ杓子を釣下げたる家があります

するゆゑハヽア成程杓子の頭ゝ宛然掌を灣曲めて人を招くよ髣髴れば是れゝ人を招くの目標であるかスッカリ悟つて突と内よ這入りますれば昨日の男出で來られて云ふやうゝ　或『是れゝ〳〵和尚樣よゝ能くこそお出で下さりました我等聊か愚なる戯れを申し參らせましたるよ一々よ解分け道をも迷ゝず參られましたるゝ實よ驚き入つたる天眼通でござります當代の活佛と云ゝるゝも無理あらぬことでござります先づ〳〵此方へ』と座を請じましたが此の男一くせあるものよて何がお難問を仕掛けんと思ひ構へてありました軈て法事も濟みますれば彼の男膳を出されます るよ一休やをら膳よ向ゝれ亡者法味の爲め回向を爲して三界に手向と蓋を明けて見ますれば豈よ圓らんや呆然々〳〵々〳〵是れゝしたり飯よゝあらで小糠でありました左れば一休ゝ這ゝ不思議と汁の蓋を取ッて見ますれば亦是れも同じく小糠でありますれば一休ゝ益々〳〵不思議よ思ひ餘の椀坪等の蓋を開いて見ますれば皆お小糠で其他の食物とてゝ一物もござらぬ

ゆゑ一休ハタと横手を拍ッて云ふやう　一『ハヽァ是れハ三七日よりてござるか偖ても歎かハしいことでござる』と申せば彼の男之を聞いて愈々膳を潰して云ふ　或『左れば仰せの如く三七日よりてござります』と申して更らに又色々佛事に就いて物語をあされましたさうでござるが偖て此の皆糠をもて三七日を推した事ハ前よりも他の談話中にお話し申しましたるに今又此の男の事に就て古來話し傳へてござりますが其原ハ孰れか一ッおのか將た又二ッ別の話しがあるのか开ハ定かあらぬことですが若しも二回あッたとすれば一休も亦何とか此の皆糠の趣向ハ既に二回出合つたる趣きを語り現ハさねばあらぬことであるに敢て左ることの話しも傳ハつて居らぬのハチト不審のことでありますが孰れとも一寸一節ある最と面白き話しであります

○一休の放屁論面白の春べや

ある一年一休旦那衆二三人と同道して東山邊へ遊山に出でられました頃

しも春ハ彌生の半ばでござりましたれば櫻樹の梢ハ頻りに色着き染め苔を破りて笑ハれ今ぞ盛りと見はしましたれば三々五々の見物人の出ハ最と多きことでありましたが爰に和尚等の一團ハ酒興に乘じ手おどを打ち叩き頻りに躍りはねて遊んで居りましたるに开が中に一人屁を放りて面白がり笑ひ興じて居る旦那がありましたが其者の云ふやうハ　或『世に如何に面白きものがあればとて屁ほど面白いものハおいことである何人でも放屁を聞いて怒るものハおいことで十人が十人ハ必ず可笑しがッて笑ふことである皆おゝ何ンと面白いものでハござらぬか』と言ひつゝ復たブーと放たれますれば皆おゝ大いに興に入ッて雷の如く打ち笑ハれましたが一休之を聞いて云ふやうハ　一『イヤ固より其筈の事屁ハ面白くおくて叶ハぬことである左れば昔より面白きことおればこそ諷にも面白の春べや面白の春べやと謠ふことであれば今しも春の屁ハ面白きも道理のことである遠慮おくズンゝ　ポカゝ　放たるゝが善いことである嗚呼又し

ても面白の春べやと諾れますれば同行の者皆あ咄と打ち笑ッて深き興よ入ッたさうでござる

○一休終身の一大失敗

抑も一休終身の一大失敗とは何であるか至極たはいもあいつまらぬことのやうで至極肝要のことであれば努め忽よあ爲し給ひぞ或る一年の事十二月の末つ方偶々東山の吉田とあん云れますする所へ參られましたが开が歸るさに今出川口の河原を過られまするよ不圖見れば赤裸ある乞食が伏して居られました一休は一目之を見てヤレ不憫のものやと思召されまして身よ纏へて居る小袖を一重脱いで之を與へられました左れば一休は心の裡で竊かに思ふやうは彼れ定めて打ち喜ぶことであらうと想ひましたるよ案よ相違して彼の乞食は少しも喜ぶの氣色あく突然ッと手を通されますれば一休乞食よ向ッて云ふやうは　一『偖ても汝は不思議ある乞食ではあいか僅かよ一錢だよ貰はゝ難有しとて伏し拜むは乞食の習慣であ

るよ今汝は一重の小袖少しも嬉しくはあいか偖て〳〵奇妙あ乞食である と申せば彼の乞食の云ふやう　乞『御身は我れよ小袖を呉れて嬉しくは思はれませぬか』と答へますれば一休はハタと手を拍つて云ふ　一『偖ても我等誤まてり一大事の悟り玆であるぞや如何さま汝は唯だの乞食よてはよもあらじ汝一言の敎へ我等の愚をしも覺しぬること最と〳〵嬉しきことであるとて目を閉し掌を合せて暫時伏し拜みて居りましたるよ良々姑くよして目を明いて見ますればアラ不思議や彼の乞食は何地へ去りけん跡方も無にず唯だ小袖ばかり跡よ殘して居りました

○一休の豫言并よ永眠

活佛と云はれたる一休和尚も普通人類の身を以つたることであれば終よ時節到來風としたる疾病より臥床よ就き段々と重りて將に死あんとするよ當り遺言して云ふやうは　一『我れ死して百年の後ち唐土より一人の禪師來らば我が再來と思はれよ偖て又二百年よ當るの年我が死骸を墓中よ

り堀出して見られよ其時若しも我が死骸の朽ちてあらバ我が言ひ置きし言ハ皆おたはことゝして开が書類ハ皆おゝ之を火中ゑ投ずべし左ハ去りおがら我が死骸大方ハ朽ちまじと思ふことである』とやをら苦痛の中にも筆を把つて日頃繪畫くことの巧みおるまゝ自ら己れの像を畫れましたが其様を見てありますれバ頭ハ長髪ゑして眼をキット見出し湖紅の法衣を着され丸竹の柱杖をつき椅子ゑ腰打ち掛けて居るの体天晴聖僧知識とぞ見えられました偖て又其畫像の上ゑ自ら賛をせられました其賛ゑ

柳ハ綠花ハ紅

行脚事畢、今日時節　折二主丈子一　燒二六月雪一

虛堂之再來天下老和尚一休宗純末期書レ之

と斯くおん書され右遺言の事も終りて後ち年齡八十八を一期として瞑目せられ永く歸らぬ眠ゑ就かれました此時一休の長髪ハ剃り丸めて埋葬されましたが其剃りし毛髪ハ諸旦那弟子衆各々守袋ゑ納め最と大切ゑ所持

いたされました後一休の木像を作られましたが其木像は和尚の自ら畫かれたる像に倣ひ長髪に作られ襟に剃り落し分ちて守り袋に納めたる和尚自身の毛髪を其儘取り出して佛工に命じ頭髪眉毛に至るまで皆悉く之を植ゑられましたから其木像は宛然生ける一休禪師に對するが如く出來上り襟の自筆の畫像と並びて好一對の肖像となられました偖又彼の遺言は後果して靈驗ありしや否やは定かに知ることは出來ませぬけれども口碑に據れば一休の沒後百餘年にして唐土より隱元和尚となんいへる碩學高德の禪僧が來朝せられしとのことにて是ぞ即ち一休和尚の再來であると當時の人は申し傳へられしとのことでありますが其果して再來なるやは受取り難いことであります夫は兎に角一休は絶世の名僧智識にして悟道の極意を極め其滑稽洒落頓智に富み一舉一動は人をして抱腹絶倒せしめざるはなく悟道の種子ならざるはなく片言よく世態を穿ち雙語よく人情を寫し而も卑俗にして凡夫にも解し易く此の苦しき世を樂しく渡り其の

樂天の道を以て衆生を濟度せられしは大聖といふべきでありませうか大仙と稱すべきでありませうか

禪一休 終

禪一休

不許複製

定價金三十五錢

明治四十二年九月十五日印刷
明治四十二年九月二十日發行

著者　變哲狂禪　東京市日本橋區若松町四番地

發行者　湯淺粂策　東京市神田區松住町五番地

印刷者　菅井十一郎　東京市日本橋區若松町四番地

發行所　電話　振替口座　一四八六二番　一八〇六番　春江堂書店

大賣捌所　(東京)東京堂、前川、北隆館、至誠堂、太洋堂、文林堂、二松堂(大阪)杉本(京都)山中書店(名古屋)星野文星堂、小澤百架堂(久留米)菊竹(函館)小島大盛堂

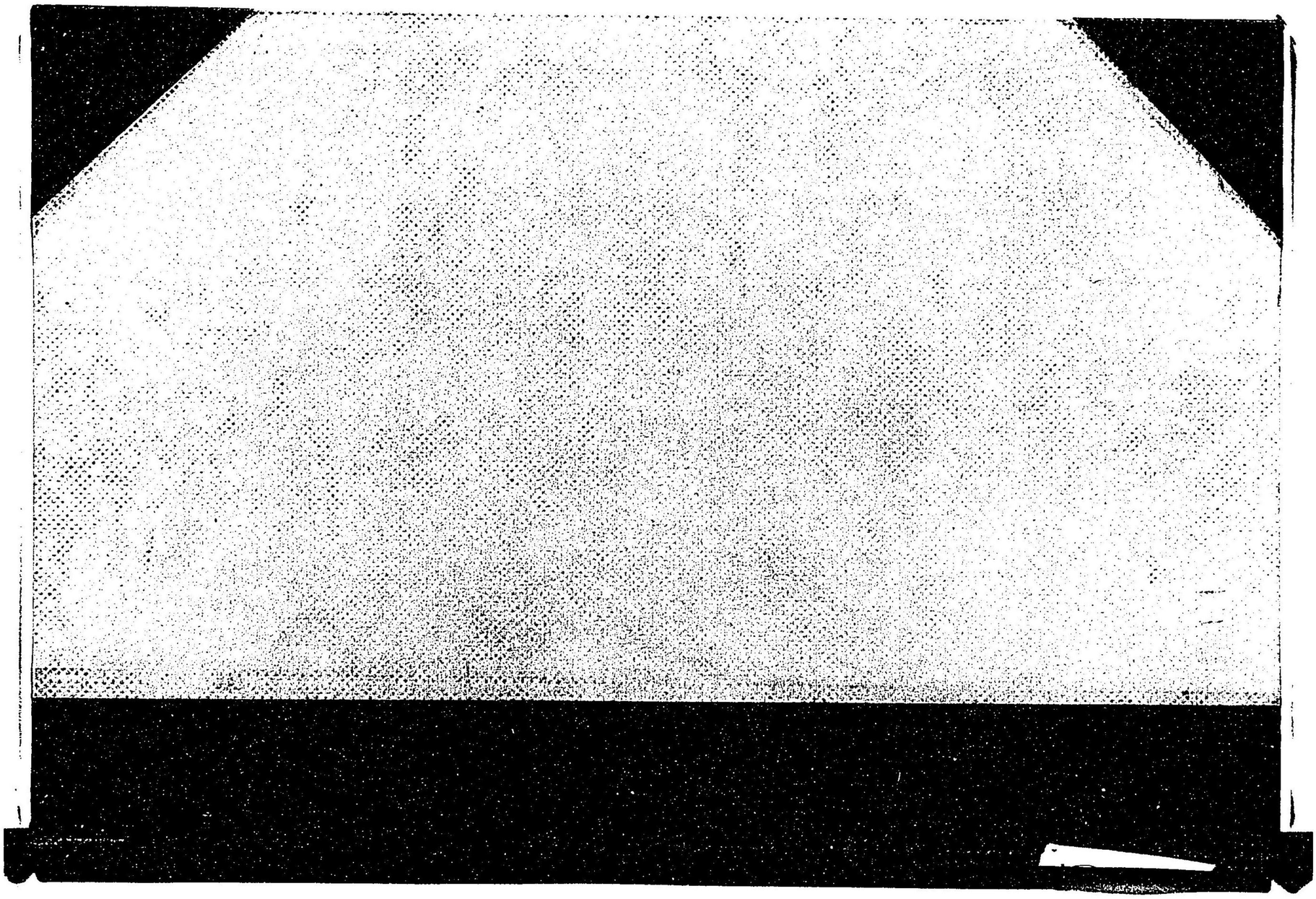
21167

春江堂發行書目

青果園著　霞峰畫
幕末俊傑
高野長英
新裝頗美本
定價三拾五錢
郵税六錢

桃川如燕遺講　霞峰畫
佐倉義民
木内宗五郎
新裝美本
定價三拾五錢
郵税六錢

桃川如燕遺講　霞峰畫
佐倉義民
續木内宗五郎
新裝頗美本
定價三十五錢
郵税六錢

永江斷水著
冒險奇談
海賊船
新裝頗美本
定價四十錢
郵税六錢

變哲狂粹著
休漫遊奇談
新裝頗美本
定價三十錢
郵税六錢